埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第465集

飯　能　市

向原A／芦苅場

株式会社秀拓飯能地区開発事業予定地に係る
埋蔵文化財発掘調査報告
（第1分冊）

２０２０

株式会社　秀拓
公益財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

1　第33号住居跡出土土器

1　第23号住居跡出土土器

2　第23号住居跡出土土器（第375図８）

3　第23号住居跡出土土器（第375図４）

序

埼玉県の南西部に位置する飯能市は、緑と清流という自然に恵まれており、古くから豊かな森林との共生によって、人々の暮らしや文化・歴史、産業が育まれてきました。

近年は、都心から約50km圏内に位置することから、東端の日高市及び狭山市との市境に圏央道狭山日高インターが建設され、地方との交通アクセスにも優れた地となり、インターの周辺では物流施設をはじめとした土地の造成がしばしば行われています。

その一つである芦苅場地区における本造成事業地内には、向原A遺跡と芦苅場遺跡の存在が知られていました。この開発に対して各関係機関により協議が行われた結果、発掘調査による記録保存の措置が講ぜられることとなりました。発掘調査は株式会社秀拓の委託を受け、当事業団が支援事業の一環として、飯能市教育委員会と協力して実施することとなりました。

発掘調査の結果、約5,000年前の縄文時代中期の人々が何世代にもわたって住み続けており、住居が環状に巡る集落が形成されていたことがわかりました。集落からは住居とともに、赤く焼けた石の詰まった調理施設と思われる穴も数多く発見されました。また、多くの土器や石器などが出土し、当時の生活を知る上で貴重な成果をあげることができました。中でも優美な文様が施された土器の数々は目を見張るものがあります。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。今年は未曽有の事態に世界全体が包まれましたが、そのような状況の中にあっても、このように一冊の報告書として調査の成果をまとめることができたことは大変感慨深いものがあります。埋蔵文化財の保護並びに普及・活用の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部文化資源課をはじめ、株式会社秀拓、飯能市教育委員会並びに地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

令和２年１２月

公益財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理　事　長　　藤　田　栄　二

例　言

1　本書は、飯能市大字芦苅場に所在する向原A遺跡（第４次調査）、芦苅場遺跡（第２・３・４次調査）の発掘調査報告書である。

2　遺跡の代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は以下のとおりである。

向原A遺跡第４次調査（No.21－004）
　埼玉県飯能市大字芦苅場字久保18－１
　平成30年１月５日付け　教生文第２－42号
芦苅場遺跡第２次調査（No.21－003）
　埼玉県飯能市大字芦苅場字久保12－１
　平成30年１月５日付け　教生文第２－41号
芦苅場遺跡第３次調査（No.21－003）
　埼玉県飯能市大字芦苅場字久保12－１
　平成30年４月23日付け　教文資第２－６号
芦苅場遺跡第４次調査（No.21－003）
　埼玉県飯能市大字芦苅場字久保12－１
　平成30年11月７日付け　教文資第３－38号

3　発掘調査は当事業団の飯能市支援事業により実施したものであり、株式会社秀拓による飯能地区開発事業に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課（当時）と飯能市教育委員会が調整し、株式会社秀拓の委託を受け、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4　各事業の委託事業名は、下記のとおりである。発掘調査、整理・報告書作成事業（平成29年～令和２年度）
「株式会社秀拓飯能地区開発事業予定地に係る埋蔵文化財発掘調査委託」

5　発掘調査、整理・報告書作成事業はⅠ－３に示した組織により実施した。

発掘調査は、向原A遺跡第４次、芦苅場遺跡第２次を平成30年１月１日から平成30年３月31日まで山本靖、上野真由美、片岸絵梨花（飯能市教育委員会）が、芦苅場遺跡第３次を平成30年４月１日から平成30年10月31日まで上野、宮井英一、金子直行、滝澤誠、近藤洋、片岸が、平成30年11月１日から平成30年11月９日まで上野が担当した。第４次調査は、飯能市教育委員会が平成30年11月６日から平成30年11月９日まで実施した。

整理報告書作成事業は、平成30年11月１日から平成31年３月31日まで宮井、金子が、平成31年４月１日から令和２年３月31日まで宮井、吉留頌平が、令和２年４月１日から令和２年10月31日まで金子、入江直毅が担当した。芦苅場遺跡第４次調査については、第３次調査の隣接地点であるため、株式会社秀拓の了解を得て飯能市教育委員会が整理した資料をⅤ－２章に収録した。

報告書は、令和２年12月23日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第465集として印刷・刊行した。

6　発掘調査における基準点測量は、株式会社東京航業研究所に委託した。

7　発掘調査における空中写真撮影は、三和航測株式会社、株式会社東京航業研究所に委託した。

8　巻頭図版の遺物写真撮影は、小川忠博氏に委託した。

9　発掘調査における写真撮影は、各調査担当者が行い、出土遺物の写真撮影は入江が行った。

10　出土品の整理・図版作成は、宮井、吉留、金子、入江が行い、上野、富田和夫、瀧瀬芳之、黒坂禎二、村山卓、滝澤の協力を得た。

11　本書の執筆は、Ⅰ－１、Ⅴ－２（１）d）を飯能市教育委員会、Ⅴ－２（５）e）を上野が、Ⅲ～Ⅴ、Ⅶ－１～３を金子が、Ⅱ、Ⅶ－４～６、縄文の石器を入江が、中・近世の遺物を村山が行った。

12　本書の編集は金子、入江が行った。

13　本書にかかる諸資料は、令和３年１月以降、飯能市教育委員会が管理・保管する。

14　発掘調査と本書の作成に際し、下記の機関・方々から御教示・御協力を賜った。記して感謝致します。（敬称略）

飯能市教育委員会　江原　英　石塚和則
笹森健一　富元久美子　西井幸雄
細田　勝　松本尚也　宮崎朝雄

凡　例

1　本書におけるＸ・Ｙの数値は、世界測地系、国土標準平面直角座標第Ⅸ系（原点：北緯36°00′00″、東経139°50′00″）に基づく座標値であり、Ｚ座標の値は標高を示す。また、各挿図に示した方位は全て座標北を指す。

向原Ａ遺跡Ｙ－４グリッド北西杭の座標は、Ｘ＝－14500.000m、Ｙ＝－41810.000m、Ｚ＝78.700mで、北緯35°52′06″2921、東経139°22′13″2395である。

芦苅場遺跡Ｓ－12グリッド北西杭の座標は、Ｘ＝－14440.000m、Ｙ＝－41730.000m、Ｚ＝78.900mで、北緯35°52′08″2512、東経139°22′16″4173である。

2　調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標第Ⅸ系に基づく10m×10mの範囲を基本（１グリッド）とし、向原Ａ遺跡と芦苅場遺跡の調査区を合わせた全体に方眼網を組んだ。

3　グリッドの名称は、北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット（Ａ…Ｚ、ＡＡ…）、西から東方向に数字（１…27）を付し、アルファベットと数字を組み合わせて、例えばＡ－24、ＡＡ－４グリッドと呼称した。さらに10mのグリッド内を２m四方の小グリッドに区分し、必要に応じて表記した。小グリッドは、北西隅を基点とし、西から東へ１～25に区分した。例えばＡ４－３小グリッドと呼称した。

4　向原Ａ遺跡の調査区は１区画であるが、芦苅場遺跡は西端の町道で区画された最西部の調査区をⅠ区、その東側から中央の未調査区までをⅡ区、さらに未調査区から北東部の広い調査区をⅢ区と呼称した。向原Ａ区と芦苅場Ⅰ区、芦苅場Ⅱ区とⅢ区の調査を並行して行った。

5　本書の本文、挿図、表中に記した遺構の略号は以下のとおりである。

ＳＪ…竪穴住居跡
ＳＣ…集石土壙
ＳＫ…土壙（地下式坑を含む）
ＳＥ…井戸跡
ＳＤ…溝跡
ＳＸ…特殊遺構
Ｐ…小穴・柱穴

6　本書における挿図の縮尺は、以下のとおりである。ただし一部例外もあり、それについては図中に縮尺とスケールを示した。

縄文土器実測図　１：４
ミニチュア土器実測図　２：３
土器拓影図　１：３
石器実測図　２：３　１：３
土製品実測図　２：３　１：３
石製品実測図　２：３

7　縄文土器の展開実測図は、文様構成や文様単位が把握されるものについて、縄文土器の理解に不可欠であるため可能な限り実測し、掲載した。

8　遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。

・土器類については口径・器高・底径をcm単位で表した。

・石器及び土製品類については縦（長さ）・横（幅）・厚さをcm単位で表した。
・（　）内の数値は復元推定値、［　］は残存計測値を示す。
・胎土は土器中に含まれる鉱物等のうち、特徴的なものを記号で示した。
A：雲母　B：片岩　C：角閃石・輝石
D：長石　E：石英　F：軽石　G：砂粒子
H：赤色粒子　I：白色粒子　J：針状物質
K：黒色粒子　L：その他
・残存率は図示した器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。
・焼成は良好・普通・不良の３段階に分けて記号で示した。
・色調は『新版標準土色帖』に照らし、最も近い色相を示した。

9　本文中における縄文土器の説明は、勝坂式については井戸尻編年を参考にして以下のように大きく土器群を分類し、説明を加えた。土器群の詳細については、第Ⅶ章でまとめた。なお、実測土器については計測値等を一覧表にまとめ、住居跡ごとに示した。

・勝坂式土器
古段階－狢沢式・新道式
中段階－藤内Ⅰ式
中～新段階－藤内Ⅱ式・井戸尻式Ⅰ式
新段階－井戸尻Ⅱ式
終末段階－井戸尻Ⅲ式・加曽利ＥⅠ式初頭
・加曽利ＥⅠ式段階
・加曽利ＥⅡ式段階
・加曽利ＥⅢ式段階

10　石器の分類については、Ⅴ－２（５）で説明を加えた。

11　集石土壙の礫については、全点について重量を計測し、形状、材質とともにデータ化した。形状については、全礫、半割礫、４分の１礫、破砕礫、小礫片に分類し、さらにそれぞれ重量でランク分けし記録化した。報告データについては、各集石土壙について50ｇごとの数量比と形状比の推移を棒グラフにして示した。集石の礫については様々な視点からの分析が可能となるよう、基礎データに関しては飯能市教育委員会が保管する。

12　遺構図・遺物実測図における網掛けについては、被熱化、彩色などを表し、その都度例示した。

13　遺物出土状況において、●が土器を、○が石器を示している。

14　遺構図における水準数値は、海抜標高（m）を示している。

15　本書に使用した地形図等は、国土地理院地図1/25000、飯能市都市計画図1/10000を使用して、改変した。

16　遺構番号は、原則、調査時のものを用いた。

17　引用文献は、（著者（組織名）発行年）の順で表記し、参考文献とともに巻末に掲載した。

目　次

（第１分冊）

巻頭図版
序
例言
凡例
目次
Ⅰ　発掘調査の概要 …… 1
1　発掘調査に至る経過 …… 1
2　発掘調査・報告書作成の経過 …… 5
（1）発掘調査 …… 5
（2）整理・報告書の作成 …… 5
3　発掘調査・報告書作成の組織 …… 6
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 7
1　地理的環境 …… 7
2　歴史的環境 …… 10
Ⅲ　遺跡の概要 …… 16
1　向原Ａ遺跡 …… 20
2　芦苅場遺跡 …… 21
Ⅳ　向原Ａ遺跡の調査 …… 28
1　縄文時代の遺構と遺物 …… 28
（1）住居跡 …… 28
（2）集石土壙 …… 61
（3）グリッド出土遺物 …… 65
2　中・近世の遺構と遺物 …… 70
（1）地下式坑 …… 70
（2）土壙 …… 70
（3）ピット …… 72
（4）グリッド出土遺物 …… 72
Ⅴ　芦苅場遺跡の調査 …… 81
1　旧石器時代の遺構と遺物 …… 81
2　縄文時代の遺構と遺物 …… 83
（1）住居跡 …… 83
ａ）Ⅰ区 …… 83
ｂ）Ⅱ区 …… 92

（第２分冊）

ｃ）Ⅲ区 …… 437
ｄ）Ⅳ区 …… 675
（2）集石土壙 …… 704
ａ）Ⅱ区 …… 704
ｂ）Ⅲ区 …… 741
ｃ）Ⅳ区 …… 777
（3）土壙 …… 779
ａ）Ⅱ区 …… 779
ｂ）Ⅲ区 …… 788
ｃ）Ⅳ区 …… 798
（4）特殊遺構 …… 799
ａ）Ⅰ区 …… 799
ｂ）Ⅱ区 …… 799
（5）グリッド出土遺物 …… 804
ａ）縄文土器 …… 804
ｂ）土製品 …… 807
ｃ）石器 …… 811
ｄ）石製品 …… 817
3　中・近世の遺構と遺物 …… 821
（1）地下式坑 …… 821
ａ）Ⅱ区 …… 821
（2）土壙 …… 829
ａ）Ⅰ区 …… 829
ｂ）Ⅱ区 …… 829
ｃ）Ⅲ区 …… 836
（3）井戸跡 …… 836
ａ）Ⅱ区 …… 836

（4）溝跡 …… 836
a）Ⅱ区 …… 836
b）Ⅲ区 …… 837
（5）ピット …… 837
a）Ⅰ区 …… 845
b）Ⅱ区 …… 845
c）Ⅲ区 …… 845
（6）グリッド出土遺物 …… 847
Ⅵ 自然科学分析 …… 856
1 材同定 …… 856
2 放射性炭素（^{14}C）
年代測定（AMS法） …… 859
3 レプリカ・セム法による
土器圧痕分析 …… 861
Ⅶ 調査のまとめ …… 866
1 発掘調査の成果 …… 866
2 縄文時代中期の環状集落変遷 …… 866
3 縄文時代中期の土器群について …… 875
4 縄文時代中期の石器群について …… 886
5 芦苅場遺跡の集石土壙について …… 886
6 集石土壙の礫分析について …… 890

（第３分冊）

写真図版

挿　図　目　次

（第１分冊）

第１図　埼玉県の地形図…… 7
第２図　遺跡の位置図（１）…… 8
第３図　遺跡の位置図（２）…… 9
第４図　遺跡の位置図（３）…… 9
第５図　周辺の遺跡 …… 12
第６図　周辺の遺跡（縄文）…… 12
第７図　周辺の遺跡（古代以降）…… 14
第８図　調査区全体図（１）…… 16
第９図　調査区全体図（２）…… 17
第10図　調査区全体図（３）…… 18
第11図　調査区全体図（４）…… 19
第12図　集石土壙・土壙分布図（１）…… 22
第13図　集石土壙・土壙分布図（２）…… 23
第14図　集石土壙・土壙分布図（３）…… 24
第15図　ピット分布図（１）…… 25
第16図　ピット分布図（２）…… 26
第17図　ピット分布図（３）…… 27
第18図　第１号住居跡・遺物出土状況 …… 29
第19図　第１号住居跡出土遺物（１）…… 30
第20図　第１号住居跡出土遺物（２）…… 31
第21図　第２号住居跡・遺物出土状況 …… 33
第22図　第２号住居跡出土遺物…… 34
第23図　第３号住居跡（１）…… 35
第24図　第３号住居跡（２）…… 36
第25図　第３号住居跡遺物出土状況（１）… 37
第26図　第３号住居跡遺物出土状況（２）… 38
第27図　第３号住居跡出土遺物（１）…… 39
第28図　第３号住居跡出土遺物（２）…… 40
第29図　第３号住居跡出土遺物（３）…… 41
第30図　第３号住居跡出土遺物（４）…… 42
第31図　第３号住居跡出土遺物（５）…… 43
第32図　第３号住居跡出土遺物（６）…… 44
第33図　第４号住居跡（１）…… 47
第34図　第４号住居跡遺物出土状況 …… 48
第35図　第４号住居跡（２）…… 50
第36図　第４号住居跡出土遺物（１）…… 51
第37図　第４号住居跡出土遺物（２）…… 52
第38図　第４号住居跡出土遺物（３）…… 53
第39図　第５号住居跡 …… 54
第40図　第５号住居跡出土遺物（１）…… 55
第41図　第５号住居跡出土遺物（２）…… 56
第42図　第５号住居跡出土遺物（３）…… 57
第43図　第５号住居跡出土遺物（４）…… 58
第44図　第６～９号住居跡・出土遺物 …… 60
第45図　第１～５号集石土壙…… 62
第46図　第１・３・４号集石土壙出土遺物 ‥ 63
第47図　集石土壙礫分析図…… 64
第48図　グリッド出土遺物（１）…… 66
第49図　グリッド出土遺物（２）…… 67
第50図　グリッド出土遺物（３）…… 68
第51図　グリッド出土遺物（４）…… 69
第52図　地下式坑（１）…… 71
第53図　地下式坑（２）…… 72
第54図　地下式坑出土遺物（１）…… 73
第55図　地下式坑出土遺物（２）…… 74
第56図　土壙…… 75
第57図　ピット…… 76
第58図　ピット出土遺物 …… 76
第59図　中・近世グリッド出土遺物（１）… 77
第60図　中・近世グリッド出土遺物（２）… 78
第61図　中・近世グリッド出土遺物（３）… 79
第62図　旧石器時代の出土遺物…… 81
第63図　基本土層 …… 82
第64図　第１号住居跡（１）…… 84
第65図　第１号住居跡（２）…… 85
第66図　第１号住居跡遺物出土状況 …… 86

第67図　第１号住居跡出土遺物（１）…… 87
第68図　第１号住居跡出土遺物（２）…… 88
第69図　第１号住居跡出土遺物（３）…… 89
第70図　第２号住居跡 …… 90
第71図　第２号住居跡出土遺物…… 91
第72図　第３号住居跡（１）…… 94
第73図　第３号住居跡（２）…… 95
第74図　第３号住居跡遺物出土状況（１）‥ 96
第75図　第３号住居跡遺物出土状況（２）‥ 97
第76図　第３号住居跡遺物出土状況（３）‥ 98
第77図　第３号住居跡出土遺物（１）…… 99
第78図　第３号住居跡出土遺物（２）…… 100
第79図　第３号住居跡出土遺物（３）…… 101
第80図　第３号住居跡出土遺物（４）…… 102
第81図　第３号住居跡出土遺物（５）…… 103
第82図　第３号住居跡出土遺物（６）…… 104
第83図　第３号住居跡出土遺物（７）…… 105
第84図　第３号住居跡出土遺物（８）…… 106
第85図　第３号住居跡出土遺物（９）…… 107
第86図　第４号住居跡（１）…… 110
第87図　第４号住居跡（２）…… 111
第88図　第４号住居跡遺物出土状況…… 112
第89図　第４号住居跡出土遺物（１）…… 113
第90図　第４号住居跡出土遺物（２）…… 114
第91図　第４号住居跡出土遺物（３）…… 115
第92図　第４号住居跡出土遺物（４）…… 116
第93図　第４号住居跡出土遺物（５）…… 117
第94図　第４号住居跡出土遺物（６）…… 118
第95図　第４号住居跡出土遺物（７）…… 119
第96図　第４号住居跡出土遺物（８）…… 120
第97図　第４号住居跡出土遺物（９）…… 121
第98図　第５号住居跡（１）…… 126
第99図　第５号住居跡（２）…… 127
第100図　第５号住居跡遺物出土状況（１）・ 128
第101図　第５号住居跡遺物出土状況（２）・ 129
第102図　第５号住居跡出土遺物（１）…… 130
第103図　第５号住居跡出土遺物（２）…… 131
第104図　第５号住居跡出土遺物（３）…… 132
第105図　第５号住居跡出土遺物（４）…… 133
第106図　第５号住居跡出土遺物（５）…… 134
第107図　第５号住居跡出土遺物（６）…… 135
第108図　第５号住居跡出土遺物（７）…… 136
第109図　第５号住居跡出土遺物（８）…… 137
第110図　第６・20・28・30号住居跡（１）・ 140
第111図　第６・20・28・30号住居跡（２）・ 141
第112図　第６・20・28・30号住居跡
遺物出土状況（１）…… 142
第113図　第６・20・28・30号住居跡
遺物出土状況（２）…… 143
第114図　第６号住居跡出土遺物（１）…… 145
第115図　第６号住居跡出土遺物（２）…… 146
第116図　第６号住居跡出土遺物（３）…… 147
第117図　第20号住居跡出土遺物（１）…… 148
第118図　第20号住居跡出土遺物（２）…… 149
第119図　第20号住居跡出土遺物（３）…… 150
第120図　第20号住居跡出土遺物（４）…… 151
第121図　第20号住居跡出土遺物（５）…… 152
第122図　第20号住居跡出土遺物（６）…… 153
第123図　第28号住居跡出土遺物（１）…… 155
第124図　第28号住居跡出土遺物（２）…… 156
第125図　第30号住居跡出土遺物（１）…… 158
第126図　第30号住居跡出土遺物（２）…… 159
第127図　第７・８号住居跡（１）…… 162
第128図　第７・８号住居跡（２）…… 163
第129図　第７・８号住居跡遺物出土状況‥ 164
第130図　第７・８号住居跡出土遺物（１）・ 165
第131図　第７・８号住居跡出土遺物（２）・ 166
第132図　第７・８号住居跡出土遺物（３）・ 167
第133図　第７・８号住居跡出土遺物（４）・ 168
第134図　第７・８号住居跡出土遺物（５）・ 169
第135図　第９・14号住居跡（１）…… 172
第136図　第９・14号住居跡（２）…… 173
第137図　第９・14号住居跡出土遺物（１）・ 174
第138図　第９・14号住居跡出土遺物（２）・ 175

第139図　第９・14号住居跡出土遺物（３）・ 176
第140図　第９・14号住居跡出土遺物（４）・ 177
第141図　第10号住居跡 ･････････････････ 179
第142図　第10号住居跡遺物出土状況･･････ 180
第143図　第10号住居跡出土遺物（１）･････ 181
第144図　第10号住居跡出土遺物（２）･････ 182
第145図　第10号住居跡出土遺物（３）･････ 183
第146図　第11号住居跡（１）･･････････････ 185
第147図　第11号住居跡（２）･･････････････ 186
第148図　第11号住居跡出土遺物（１）･････ 186
第149図　第11号住居跡出土遺物（２）･････ 187
第150図　第11号住居跡出土遺物（３）･････ 188
第151図　第12号住居跡（１）･･････････････ 190
第152図　第12号住居跡（２）･･････････････ 191
第153図　第12号住居跡
遺物出土状況（１）･････････････････ 192
第154図　第12号住居跡
遺物出土状況（２）･････････････････ 193
第155図　第12号住居跡
遺物出土状況（３）･････････････････ 194
第156図　第12号住居跡出土遺物（１）･････ 195
第157図　第12号住居跡出土遺物（２）･････ 196
第158図　第12号住居跡出土遺物（３）･････ 197
第159図　第12号住居跡出土遺物（４）･････ 198
第160図　第12号住居跡出土遺物（５）･････ 199
第161図　第12号住居跡出土遺物（６）･････ 200
第162図　第12号住居跡出土遺物（７）･････ 201
第163図　第12号住居跡出土遺物（８）･････ 202
第164図　第13号住居跡（１）･･････････････ 204
第165図　第13号住居跡（２）
・出土遺物（１）･･････････････････ 205
第166図　第13号住居跡（３）･･････････････ 206
第167図　第13号住居跡出土遺物（２）･････ 207
第168図　第13号住居跡出土遺物（３）･････ 208
第169図　第13号住居跡出土遺物（４）･････ 209
第170図　第15号住居跡（１）･･････････････ 210
第171図　第15号住居跡（２）･･････････････ 211
第172図　第15号住居跡出土遺物（１）･････ 212
第173図　第15号住居跡出土遺物（２）･････ 213
第174図　第15号住居跡出土遺物（３）･････ 214
第175図　第15号住居跡出土遺物（４）･････ 215
第176図　第15号住居跡出土遺物（５）･････ 216
第177図　第15号住居跡出土遺物（６）･････ 217
第178図　第15号住居跡出土遺物（７）･････ 218
第179図　第15号住居跡出土遺物（８）･････ 219
第180図　第15号住居跡出土遺物（９）･････ 220
第181図　第15号住居跡出土遺物（10）･････ 221
第182図　第16号住居跡（１）･･････････････ 226
第183図　第16号住居跡（２）
・出土遺物（１）･･････････････････ 227
第184図　第16号住居跡出土遺物（２）･････ 228
第185図　第16号住居跡出土遺物（３）･････ 229
第186図　第16号住居跡出土遺物（４）･････ 230
第187図　第17・18・19号住居跡（１）･････ 232
第188図　第17・18・19号住居跡（２）･････ 233
第189図　第17・18・19号住居跡（３）･････ 235
第190図　第17号住居跡出土遺物（１）･････ 236
第191図　第17号住居跡出土遺物（２）･････ 237
第192図　第18号住居跡出土遺物（１）･････ 238
第193図　第18号住居跡出土遺物（２）･････ 239
第194図　第19号住居跡出土遺物（１）･････ 240
第195図　第19号住居跡出土遺物（２）･････ 241
第196図　第24号住居跡 ･･････････････････ 243
第197図　第24号住居跡出土遺物･･････････ 244
第198図　第25・26号住居跡（１）･････････ 246
第199図　第25・26号住居跡（２）･････････ 247
第200図　第25・26号住居跡
遺物出土状況（１）･････････････････ 248
第201図　第25・26号住居跡
遺物出土状況（２）･････････････････ 249
第202図　第25・26号住居跡
出土遺物（１）･････････････････････ 250
第203図　第25・26号住居跡
出土遺物（２）･････････････････････ 251

第204図　第25・26号住居跡
出土遺物（3）…… 252
第205図　第25・26号住居跡
出土遺物（4）…… 253
第206図　第25・26号住居跡
出土遺物（5）…… 254
第207図　第25・26号住居跡
出土遺物（6）…… 255
第208図　第25・26号住居跡
出土遺物（7）…… 256
第209図　第25・26号住居跡
出土遺物（8）…… 257
第210図　第27号住居跡 …… 260
第211図　第27号住居跡出土遺物（1）…… 261
第212図　第27号住居跡出土遺物（2）…… 262
第213図　第27号住居跡出土遺物（3）…… 263
第214図　第29号住居跡（1）…… 265
第215図　第29号住居跡（2）
・出土遺物（1）…… 266
第216図　第29号住居跡出土遺物（2）…… 268
第217図　第29号住居跡出土遺物（3）…… 269
第218図　第29号住居跡出土遺物（4）…… 270
第219図　第29号住居跡出土遺物（5）…… 271
第220図　第31・75号住居跡（1）…… 273
第221図　第31・75号住居跡（2）…… 274
第222図　第31・75号住居跡遺物出土状況 …… 275
第223図　第31号住居跡出土遺物（1）…… 277
第224図　第31号住居跡出土遺物（2）…… 278
第225図　第31号住居跡出土遺物（3）…… 279
第226図　第31号住居跡出土遺物（4）…… 280
第227図　第31号住居跡出土遺物（5）…… 281
第228図　第31号住居跡出土遺物（6）…… 282
第229図　第75号住居跡出土遺物…… 283
第230図　第32号住居跡（1）…… 285
第231図　第32号住居跡（2）…… 286
第232図　第32号住居跡出土遺物（1）…… 287
第233図　第32号住居跡出土遺物（2）…… 288
第234図　第32号住居跡出土遺物（3）…… 289
第235図　第33号住居跡（1）…… 291
第236図　第33号住居跡（2）…… 292
第237図　第33号住居跡
遺物出土状況（1）…… 293
第238図　第33号住居跡
遺物出土状況（2）…… 294
第239図　第33号住居跡出土遺物（1）…… 296
第240図　第33号住居跡出土遺物（2）…… 297
第241図　第33号住居跡出土遺物（3）…… 298
第242図　第33号住居跡出土遺物（4）…… 299
第243図　第33号住居跡出土遺物（5）…… 300
第244図　第33号住居跡出土遺物（6）…… 301
第245図　第33号住居跡出土遺物（7）…… 302
第246図　第33号住居跡出土遺物（8）…… 303
第247図　第33号住居跡出土遺物（9）…… 304
第248図　第33号住居跡出土遺物（10）…… 305
第249図　第33号住居跡出土遺物（11）…… 306
第250図　第33号住居跡出土遺物（12）…… 307
第251図　第33号住居跡出土遺物（13）…… 308
第252図　第34号住居跡（1）…… 310
第253図　第34号住居跡（2）…… 311
第254図　第34号住居跡出土遺物…… 312
第255図　第35号住居跡（1）…… 314
第256図　第35号住居跡（2）…… 315
第257図　第35号住居跡遺物出土状況…… 316
第258図　第35号住居跡出土遺物（1）…… 317
第259図　第35号住居跡出土遺物（2）…… 318
第260図　第35号住居跡出土遺物（3）…… 319
第261図　第35号住居跡出土遺物（4）…… 320
第262図　第35号住居跡出土遺物（5）…… 321
第263図　第35号住居跡出土遺物（6）…… 322
第264図　第36号住居跡 …… 324
第265図　第36号住居跡出土遺物…… 325
第266図　第37号住居跡（1）…… 327
第267図　第37号住居跡（2）
・遺物出土状況 …… 328

第268図　第37号住居跡出土遺物（1）…… 329
第269図　第37号住居跡出土遺物（2）…… 331
第270図　第37号住居跡出土遺物（3）…… 332
第271図　第37号住居跡出土遺物（4）…… 333
第272図　第38号住居跡 …… 336
第273図　第38号住居跡出土遺物（1）…… 337
第274図　第38号住居跡出土遺物（2）…… 338
第275図　第38号住居跡出土遺物（3）…… 339
第276図　第39号住居跡 …… 340
第277図　第39号住居跡
遺物出土状況（1）…… 341
第278図　第39号住居跡
遺物出土状況（2）…… 342
第279図　第39号住居跡出土遺物（1）…… 344
第280図　第39号住居跡出土遺物（2）…… 345
第281図　第39号住居跡出土遺物（3）…… 346
第282図　第39号住居跡出土遺物（4）…… 347
第283図　第39号住居跡出土遺物（5）…… 348
第284図　第39号住居跡出土遺物（6）…… 349
第285図　第39号住居跡出土遺物（7）…… 350
第286図　第39号住居跡出土遺物（8）…… 352
第287図　第39号住居跡出土遺物（9）…… 353
第288図　第39号住居跡出土遺物（10）…… 354
第289図　第39号住居跡出土遺物（11）…… 355
第290図　第39号住居跡出土遺物（12）…… 356
第291図　第39号住居跡出土遺物（13）…… 357
第292図　第40号住居跡（1）…… 361
第293図　第40号住居跡（2）…… 362
第294図　第40号住居跡出土遺物…… 363
第295図　第41・42・50号住居跡（1）…… 365
第296図　第41・42・50号住居跡（2）…… 366
第297図　第41・42・50号住居跡
遺物出土状況（1）…… 367
第298図　第41・42・50号住居跡
遺物出土状況（2）…… 368
第299図　第41号住居跡出土遺物（1）…… 370
第300図　第41号住居跡出土遺物（2）…… 371
第301図　第41号住居跡出土遺物（3）…… 372
第302図　第42号住居跡出土遺物（1）…… 373
第303図　第42号住居跡出土遺物（2）…… 374
第304図　第42号住居跡出土遺物（3）…… 375
第305図　第42号住居跡出土遺物（4）…… 376
第306図　第42号住居跡出土遺物（5）…… 377
第307図　第42号住居跡出土遺物（6）…… 378
第308図　第42号住居跡出土遺物（7）…… 379
第309図　第42号住居跡出土遺物（8）…… 380
第310図　第42号住居跡出土遺物（9）…… 381
第311図　第42号住居跡出土遺物（10）…… 382
第312図　第50号住居跡出土遺物…… 383
第313図　第43号住居跡・出土遺物…… 386
第314図　第44・45号住居跡（1）…… 387
第315図　第44・45号住居跡（2）…… 388
第316図　第44・45号住居跡
遺物出土状況 …… 390
第317図　第44号住居跡出土遺物（1）…… 391
第318図　第44号住居跡出土遺物（2）…… 392
第319図　第44号住居跡出土遺物（3）…… 394
第320図　第44号住居跡出土遺物（4）…… 395
第321図　第44号住居跡出土遺物（5）…… 396
第322図　第44号住居跡出土遺物（6）…… 397
第323図　第45号住居跡出土遺物（1）…… 399
第324図　第45号住居跡出土遺物（2）…… 400
第325図　第46号住居跡（1）…… 402
第326図　第46号住居跡（2）…… 403
第327図　第46号住居跡
遺物出土状況（1）…… 405
第328図　第46号住居跡
遺物出土状況（2）…… 406
第329図　第46号住居跡出土遺物（1）…… 407
第330図　第46号住居跡出土遺物（2）…… 408
第331図　第46号住居跡出土遺物（3）…… 409
第332図　第46号住居跡出土遺物（4）…… 410
第333図　第46号住居跡出土遺物（5）…… 411
第334図　第46号住居跡出土遺物（6）…… 412

第335図　第46号住居跡出土遺物（7）…… 413
第336図　第46号住居跡出土遺物（8）…… 414
第337図　第46号住居跡出土遺物（9）…… 415
第338図　第46号住居跡出土遺物（10）…… 416
第339図　第46号住居跡出土遺物（11）…… 417
第340図　第46号住居跡出土遺物（12）…… 418
第341図　第46号住居跡出土遺物（13）…… 419
第342図　第47号住居跡・出土遺物（1）… 423
第343図　第47号住居跡出土遺物（2）…… 424
第344図　第48号住居跡 …… 426
第345図　第48号住居跡出土遺物…… 427
第346図　第49号住居跡 …… 428
第347図　第49号住居跡出土遺物…… 429
第348図　第69号住居跡・出土遺物…… 429
第349図　第70・71号住居跡 …… 430
第350図　第70・71号住居跡出土遺物…… 431
第351図　第72・73号住居跡・出土遺物…… 432
第352図　第74号住居跡 …… 433
第353図　第76号住居跡 …… 434
第354図　第76号住居跡出土遺物…… 435

表　目　次

（第１分冊）

第１表　周辺の遺跡一覧…… 13
第２表　第１号住居跡柱穴計測表…… 28
第３表　第１号住居跡出土石器観察表…… 32
第４表　第２号住居跡柱穴計測表…… 33
第５表　第２号住居跡出土石器観察表…… 33
第６表　第３号住居跡柱穴計測表…… 36
第７表　第３号住居跡
出土復元土器観察表…… 45
第８表　第３号住居跡出土石器観察表…… 45
第９表　第４号住居跡柱穴計測表…… 49
第10表　第４号住居跡
出土復元土器観察表…… 49
第11表　第４号住居跡出土石器観察表…… 49
第12表　第５号住居跡柱穴計測表…… 56
第13表　第５号住居跡
出土復元土器観察表…… 56
第14表　第５号住居跡出土石器観察表…… 58
第15表　第６号住居跡柱穴計測表…… 60
第16表　第８号住居跡柱穴計測表…… 60
第17表　第８号住居跡出土石器観察表…… 60
第18表　集石土壙出土石器観察表…… 64
第19表　縄文時代の住居跡一覧表…… 65
第20表　縄文時代の集石土壙一覧表…… 65
第21表　グリッド出土石器観察表…… 69
第22表　中・近世の土壙一覧表…… 76
第23表　中・近世のピット一覧表…… 76
第24表　第７・８号地下式坑
出土遺物観察表…… 80
第25表　中・近世ピット出土遺物観察表…… 80
第26表　中・近世グリッド出土遺物観察表 ‥ 80
第27表　旧石器時代出土石器観察表…… 81
第28表　第１号住居跡柱穴計測表…… 85
第29表　第１号住居跡
出土復元土器観察表…… 85
第30表　第１号住居跡出土石器観察表…… 85
第31表　第２号住居跡柱穴計測表…… 90
第32表　第２号住居跡
出土復元土器観察表…… 92
第33表　第２号住居跡出土石器観察表…… 92
第34表　第３号住居跡柱穴計測表…… 95
第35表　第３号住居跡
出土復元土器観察表…… 102

第36表　第３号住居跡出土石器観察表 …… 108
第37表　第４号住居跡柱穴計測表 …… 111
第38表　第４号住居跡
出土復元土器観察表 …… 124
第39表　第４号住居跡出土石器観察表 …… 124
第40表　第５号住居跡柱穴計測表 …… 127
第41表　第５号住居跡
出土復元土器観察表 …… 127
第42表　第５号住居跡出土石器観察表 …… 138
第43表　第６・20・28・30号住居跡
柱穴計測表 …… 144
第44表　第６号住居跡出土石器観察表 …… 147
第45表　第20号住居跡
出土復元土器観察表 …… 154
第46表　第20号住居跡出土石器観察表 …… 154
第47表　第28号住居跡
出土復元土器観察表 …… 157
第48表　第28号住居跡出土石器観察表 …… 157
第49表　第30号住居跡
出土復元土器観察表 …… 159
第50表　第30号住居跡出土石器観察表 …… 159
第51表　第７・８号住居跡柱穴計測表 …… 170
第52表　第７・８号住居跡
出土復元土器観察表 …… 170
第53表　第７・８号住居跡
出土石器観察表 …… 170
第54表　第９・14号住居跡柱穴計測表 …… 173
第55表　第９・14号住居跡
出土復元土器観察表 …… 173
第56表　第９・14号住居跡
出土石器観察表 …… 178
第57表　第10号住居跡柱穴計測表 …… 180
第58表　第10号住居跡
出土復元土器観察表 …… 180
第59表　第10号住居跡出土石器観察表 …… 184
第60表　第11号住居跡柱穴計測表 …… 186
第61表　第11号住居跡
出土復元土器観察表 …… 188
第62表　第11号住居跡出土石器観察表 …… 188
第63表　第12号住居跡柱穴計測表 …… 191
第64表　第12号住居跡
出土復元土器観察表 …… 198
第65表　第12号住居跡出土石器観察表 …… 203
第66表　第13号住居跡柱穴計測表 …… 205
第67表　第13号住居跡
出土復元土器観察表 …… 205
第68表　第13号住居跡出土石器観察表 …… 206
第69表　第15号住居跡柱穴計測表 …… 211
第70表　第15号住居跡
出土復元土器観察表 …… 218
第71表　第15号住居跡出土石器観察表 …… 222
第72表　第16号住居跡柱穴計測表 …… 226
第73表　第16号住居跡
出土復元土器観察表 …… 226
第74表　第16号住居跡出土石器観察表 …… 227
第75表　第17･18号住居跡柱穴計測表 …… 234
第76表　第19号住居跡柱穴計測表 …… 234
第77表　第17号住居跡出土石器観察表 …… 237
第78表　第18号住居跡
出土復元土器観察表 …… 239
第79表　第18号住居跡出土石器観察表 …… 239
第80表　第19号住居跡
出土復元土器観察表 …… 242
第81表　第19号住居跡出土石器観察表 …… 242
第82表　第24号住居跡出土石器観察表 …… 243
第83表　第25･26号住居跡柱穴計測表 …… 247
第84表　第25号住居跡
出土復元土器観察表 …… 247
第85表　第25･26号住居跡出土石器観察表 …… 258
第86表　第27号住居跡柱穴計測表 …… 263
第87表　第27号住居跡
出土復元土器観察表 …… 263
第88表　第27号住居跡出土石器観察表 …… 264
第89表　第29号住居跡柱穴計測表 …… 267

第 90 表　第29号住居跡
出土復元土器観察表…… 267
第 91 表　第29号住居跡出土石器観察表…… 271
第 92 表　第31･75号住居跡柱穴計測表…… 276
第 93 表　第31号住居跡
出土復元土器観察表…… 279
第 94 表　第31号住居跡出土石器観察表…… 282
第 95 表　第75号住居跡
出土復元土器観察表…… 283
第 96 表　第75号住居跡出土石器観察表…… 283
第 97 表　第32号住居跡柱穴計測表…… 286
第 98 表　第32号住居跡
出土復元土器観察表…… 290
第 99 表　第32号住居跡出土石器観察表…… 290
第100表　第33号住居跡柱穴計測表…… 292
第101表　第33号住居跡
出土復元土器観察表…… 304
第102表　第33号住居跡出土石器観察表…… 309
第103表　第34号住居跡柱穴計測表…… 310
第104表　第34号住居跡出土石器観察表…… 311
第105表　第35号住居跡柱穴計測表…… 315
第106表　第35号住居跡
出土復元土器観察表…… 318
第107表　第35号住居跡出土石器観察表…… 323
第108表　第36号住居跡柱穴計測表…… 325
第109表　第36号住居跡
出土復元土器観察表…… 325
第110表　第36号住居跡出土石器観察表…… 325
第111表　第37号住居跡柱穴計測表…… 330
第112表　第37号住居跡
出土復元土器観察表…… 330
第113表　第37号住居跡出土石器観察表…… 334
第114表　第38号住居跡柱穴計測表…… 339
第115表　第38号住居跡
出土復元土器観察表…… 339
第116表　第38号住居跡出土石器観察表…… 339
第117表　第39号住居跡柱穴計測表…… 343
第118表　第39号住居跡
出土復元土器観察表…… 350
第119表　第39号住居跡出土石器観察表…… 358
第120表　第40号住居跡柱穴計測表…… 361
第121表　第40号住居跡
出土復元土器観察表…… 361
第122表　第41・42・50号住居跡
柱穴計測表 …… 369
第123表　第41号住居跡
出土復元土器観察表…… 372
第124表　第41号住居跡出土石器観察表…… 372
第125表　第42号住居跡
出土復元土器観察表…… 384
第126表　第42号住居跡出土石器観察表…… 384
第127表　第50号住居跡出土石器観察表…… 384
第128表　第43号住居跡柱穴計測表…… 386
第129表　第43号住居跡
出土復元土器観察表…… 386
第130表　第44･45号住居跡柱穴計測表…… 389
第131表　第44号住居跡
出土復元土器観察表…… 393
第132表　第44号住居跡出土石器観察表…… 398
第133表　第45号住居跡
出土復元土器観察表…… 401
第134表　第45号住居跡出土石器観察表…… 401
第135表　第46号住居跡柱穴計測表…… 403
第136表　第46号住居跡
出土復元土器観察表…… 403
第137表　第46号住居跡出土石器観察表…… 420
第138表　第47号住居跡柱穴計測表…… 425
第139表　第47号住居跡
出土復元土器観察表…… 425
第140表　第47号住居跡出土石器観察表…… 425
第141表　第48号住居跡柱穴計測表…… 426
第142表　第48号住居跡出土石器観察表…… 426
第143表　第49号住居跡柱穴計測表…… 429
第144表　第69号住居跡柱穴計測表…… 429

第145表　第70・71号住居跡柱穴計測表・・・・・ 431
第146表　第72・73号住居跡柱穴計測表・・・・・ 433
第147表　第72・73号住居跡
出土復元土器観察表・・・・・・・・・・・・ 433
第148表　第74号住居跡柱穴計測表・・・・・・・・ 433
第149表　第76号住居跡柱穴計測表・・・・・・・・ 434
第150表　第76号住居跡
出土復元土器観察表・・・・・・・・・・・・ 434
第151表　第76号住居跡出土石器観察表・・・・ 436

写真図版目次

（第１分冊）

巻頭図版１　１　第33号住居跡出土土器
巻頭図版２　１　第23号住居跡出土土器
２　第23号住居跡出土土器
３　第23号住居跡出土土器

Ⅰ　発掘調査の概要

1　発掘調査に至る経過

飯能市では、圏央道狭山日高インターチェンジ周辺に企業誘致を進め、芦苅場や下川崎で複数の企業が飯能へ進出した。しかし、インターチェンジ周辺の飯能市域の土地は、大半が農業振興地域に指定されており、開発区域を指定することは難しいと判断される。

今回発掘調査を実施した場所は、現況が山林であったため、都市計画法第34条第12項の区域指定（以下12号指定）を行う事で、企業誘致に対応する事ができた。ここで、市の計画が準備されてから実際に発掘調査が行われるまでの経緯を記載する。

平成27年５月

企業誘致担当から新たな企業誘致計画エリアについて、埋蔵文化財の該当有無の照会を受け、計画の概要の情報提供を受ける。

平成28年１月

企業誘致担当と試掘調査の時期、調査の方法、必要な手続きについて調整を行う。

平成28年２月

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課（当時、以下、県文化資源課）へ市の企業誘致に伴う調査支援について、どのような支援が可能かについて相談を行う。

この段階で、調査着手までに時間があるため公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（以下、事業団）に調査支援が可能かについての打診依頼を行う。

平成28年５月

市企業誘致担当・進出企業関係者・文化財担当で試掘調査に向けた調整会議を行う。

現場での工事着手は29年６月からを予定。

発掘調査は概ね１年間

試掘調査は概ね２週間

試掘調査の前に、トレンチ部分の樹木の伐採が必要となる。

平成28年８月

企業誘致担当と今後の予定について調整を行う。企業誘致のための12号指定は飯能市で行い、土地所有者との交渉は開発事業者側で行うことになった。

平成28年10月

飯能市企業誘致推進本部において、新たな企業誘致エリアについて協議を行い、12号指定を進める方向で承諾を得る。

平成29年１月

企業誘致担当との調整を行う。12号指定は、６月１日に告示を予定する。区域指定範囲の現状測量調査を２月に実施予定、開発許可と林地開発許可については同時申請を予定する。

平成29年２月

市農林課・企業誘致担当と調整を行う。林地開発前提での伐採はできない。そのため間伐は難しい。現地は密生植林では無くかなり間隔のある植林のため、有用樹木（スギ・ヒノキ）以外の植樹していない樹木で、低木なものを下草と一緒に除去することは可となる。

試掘調査は南側から着手し、予算範囲内まで実施し、完了できなければ翌年度へ継続する。北側の現況竹林については、今後の課題となる。

平成29年３月10日

株式会社秀拓より試掘調査依頼書が提出される。西側竹林以外の大半の範囲が対象となる。

平成29年３月

調査予定箇所の下草及び低木の除去作業を実施する。

平成29年３月16日から３月31日

開発事業者からの依頼に基づき飯能市教育委員

会で試掘調査を実施する。

現段階で試掘調査に承諾をもらった地主の土地を対象とする。中央部の既存開発部分は対象外とした。

調査区東端から南北方向にトレンチを設定して、調査を開始する。東端では遺構・遺物が検出されなかったが、中央部に近づくに伴い、縄文時代中期の土器や住居跡・土坑等の遺構が検出された。

平成29年４月10日から４月27日

平成29年度になり、昨年度の残り部分の試掘調査を実施する。

中央部の調査対象外範囲を挟んで東西部分に遺構の集中が確認され、相当数の住居跡や集石土坑等の遺構を検出し、縄文土器や石器等の遺物も数多く出土した。

開発対象範囲の２／３の調査を終了し、遺構の概数と調査対象範囲の目安がたった。今後はここで算出した数字を根拠に、調整を進めることとなった。

平成29年４月28日

株式会社秀拓から埋蔵文化財発掘の届出が提出される。

平成29年５月

企業誘致担当と調整を行う。遅れていた12号指定は７月に申請することとなった。

西側の竹林での試掘調査は７月から一部間伐し、その後調査へ着手する。

平成29年５月

県文化資源課と調整を行う。事業団・市・事業者での協議の席を10月ごろに設け、上記４者で協定書の締結を行いたい旨協議する。

発掘調査の現段階での時期と期間は、29年11月末着手、調査期間は10か月間である。

平成29年６月14日

株式会社秀拓より試掘調査依頼書が提出される。西側竹林及び東側の一部が対象となる。これで開発エリア全体の試掘調査依頼が提出された。

平成29年６月19日から６月29日

西側の竹林において試掘調査を実施する。竹林の北東端と西側で遺構が検出され、遺物が出土する。中央部には遺構や遺物の出土が無く、遺跡の範囲が途切れていると判断された。これで対象地の全ての試掘調査が終了した。

平成29年７月

企業誘致担当と開発業者と協議を行う。現段階の造成工事の概要を聞き取る。

開発予定地は南側に接している道路から北側の南小畦川まで高低差が８ｍある北向き斜面となっている。このことから、遺構が見つかった範囲の南側は大規模な切土を行い、その土を北側へ盛土する造成工事が計画された。そのため、現地での盛土保存は不可能であることを確認し、発掘調査を実施する方向で調整を進めて行くことも確認した。

飯能市で発掘調査を実施した場合の期間と費用の積算を依頼される。

平成29年７月

開発業者との調整を行う。飯能市遺跡調査会で発掘調査を実施した場合の積算結果を提示するが、開発事業計画の進行との関係で、飯能市が提示した発掘調査期間では事業実施が不可能と判断される。

事前に県文化資源課に調査支援の相談をしていたため、事業団の調査支援を受ける方向で調整を進めることを確認する。

平成29年７月～８月

発掘調査の実施について、開発業者から民間の発掘業者に依頼することが可能かどうかの相談を受ける。県との協議になるが、事業団に調査支援に入ってもらう事を前提に調整を進めたい意向を伝える。

その後、民間の発掘調査会社と事業団からそれぞれ積算結果が提出される。

平成29年８月25日

試掘調査の結果に基づいて、芦苅場遺跡及び向原Ａ遺跡の周知の埋蔵文化財包蔵地範囲の変更増補を行う。

平成29年９月

開発事業者から、調査支援は事業団にお願いしたい旨の連絡を受ける。県文化資源課にその旨を連絡し、次のことを確認する。

協定書については、県と市で協議すること。遺跡調査の委託契約書については、以下のとおりとすること。

事業団と飯能市遺跡調査会がそれぞれ開発事業者と契約を結ぶ。

発掘調査と室内調査をあわせた形で委託契約を交わし、発掘調査終了後に変更契約を結び、室内調査も終了時に清算を行う。

平成29年９月

県文化資源課・事業団・飯能市で協議を行う。

93条は10月前半に提出する。発掘調査範囲を図面で確認し、調査面積16,000㎡を予定する。

・向原Ａ遺跡第４次（29年度）

・芦苅場遺跡第２次（29年度）

・芦苅場遺跡第３次（30年度）で調査を実施

発掘調査の対象は縄文時代とし、近世・旧石器は今後の協議で話し合うことを確認する。

この他、調査着手までの準備工程や課題について協議する。

平成29年10月２日

芦苅場地内の12号指定が告示される。今後は、この指定に基づいて開発の申請が可能なエリアとなる。

平成29年10月13日

４者と造成工事請負業者で協議を行う。開発予定地内での埋蔵文化財調査の進行計画と造成工事の進行計画のすりあわせが主な議題となる。

・プレハブ設置予定箇所の現作業は年内終了を予定、その後プレハブ設置可

・立木伐採は約半月間で、５～６千㎡が対象地

・遺跡の表土除去は１月から２月初旬に実施

この後、事業団が工程表を作成、その工程表を受けて造成工事業者が工程表を作成し、11月に再度４者協定を予定する。

平成29年10月

事業団との調整を行う。積算及び調査における細かい部分の調整、確認を行う。

調査工程での調査区範囲の区分け及び引き渡し時期について意見交換を行う。

平成29年11月

４者と造成工事業者で調整会議を行い、発掘調査と造成工事の工程について協議する。

全体を４つの範囲に区分し、それぞれの範囲で発掘調査の着手・終了予定時期、造成工事着手・終了時期を調整し、引き渡し予定に間に合うようにする。それぞれの着手までに解決すべき課題の抽出を行い、調整を行った。

平成29年11月

４者協定の案を県文化資源課が作成し、県以外の３者で意見を出し、協定書の準備を進める。その中で、飯能市遺跡調査会を含め５者での協定締結が意見される。

平成29年12月21日

開発事業者（株式会社秀拓）・埼玉県文化資源課・事業団・飯能市教育委員会・飯能市遺跡調査会で「株式会社秀拓飯能地区開発事業予定地に係る埋蔵文化財の取扱いに関する協定書」を締結する。

協定書では、以下の点を取り決める

・発掘調査は平成30年１月１日から平成30年10月31日まで実施

・出土品整理は発掘調査終了後、平成32年10月31日まで実施

・報告書刊行は平成32年12月31日まで実施

・発掘調査対象面積は16,000㎡
（向原Ａ遺跡1,750㎡、芦苅場遺跡14,250㎡）

平成29年12月25日

株式会社秀拓と飯能市遺跡調査会が委託契約を締結する。

平成29年12月28日

株式会社秀拓と公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が調査の委託契約を締結する。

平成30年１月４日

公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団から埋蔵文化財発掘調査の届出が提出される。県文化資源課からは平成30年１月５日付けで、教生文２－41号、２－42号の発掘調査の指示通知が出される。

平成30年１月７日

事業団が現地で調査準備に着手する。

平成30年２月１日

林地開発許可が下りる。この許可を受けて、本格的に発掘調査が開始される。

平成30年10月下旬

協定書で調査対象外となっていた既存開発部分の残土搬出作業後、当該地に住居跡等の遺構が残されていることを確認する。

飯能市が県文化資源課（現在）と事業団に連絡し、対応を協議。結果は、協定範囲外のため事業団での調査は不可能。飯能市が調査を実施することになる。

飯能市が事業主に調査実施について相談。当初、調査に難色を示していたが、工事業者との調整がつけば実施しても良いとの返答をもらう。

工事業者に状況を説明し、工期に影響ない範囲での協力を依頼する。工事も遅延している為、協力は不可能と返答を受けたが、粘り強く交渉し、再度協力依頼を行う。その結果、雨天延期無しで３日間の調査期間の協力を得る。

平成30年11月2日

協議結果を県文化資源課に伝え、飯能市遺跡調査会が調査主体となり、発掘調査を実施することとなる。６日に準備、７～９日に調査となる。

（飯能市教育委員会）

2　発掘調査・報告書作成の経過

（1）発掘調査

向原A遺跡第４次調査、芦苅場遺跡第２次調査は、平成30年１月から準備を行い、２月から本格的な調査を開始した。向原A遺跡は1調査区、芦苅場遺跡はⅠ区からⅢ区に区分した３調査区が対象であるが、平成29年度は向原A遺跡の調査を主体とし、芦苅場遺跡の西端でⅠ区とした調査区も並行して調査を行った。３月末までに向原A遺跡の調査を完了させ、３月27日に空中写真撮影を行って調査を終了した。芦苅場遺跡Ⅰ区についてもほぼ調査を完了した。

平成30年度は４月から芦苅場遺跡の調査を行い、Ⅰ区を終了させ、中央のⅡ区の調査を開始した。また、東側のⅢ区の表土除去も同時に行い、５月からⅢ区内の市道拡幅部分10m幅について調査を開始し、６月５日に空中写真撮影を行って終了した。先行調査区以外のⅢ区については９月末まで調査を継続し、10月３日に空中写真撮影を行って終了して、引き渡しを行った。Ⅲ区は縄文時代中期の勝坂式期を中心とした住居跡21軒が比較的まとまって検出されており、住居跡の覆土からいわゆる吹上パターンの遺物が多量に出土した。

Ⅱ区とした中央部の調査区は、工事の関係から西側の市道沿いの調査終了区の一部について、８月１日に空中写真撮影を行った後、８月３日に先行して引き渡しを行った。この地区は住居跡の分布が希薄ではあるものの、Ⅲ区よりも時期の新しい加曽利E式期の住居も存在しており、隣接する向原A遺跡との境界を設定するのが難しい地点となっている。

Ⅱ区の中央部から東側にかけては、Ⅲ区同様に勝坂式期から加曽利E式初頭期の住居跡が構築されており、予想より遺存状態が良く、深い覆土からは土器を中心とした多量の遺物が出土した。また、表土直下では掘り込みが浅く確認の難しい加曽利E式後半期の住居跡も存在しており、調査が難航した。調査の進行を促すため、木の根の伐根や遺構実測の委託も並行して行って調査を完了させ、10月30日に空中写真撮影を行い、その後、11月９日までに事務所の撤去等を行い、引き渡しを行って調査の全てを終了した。

（2）整理・報告書の作成

報告書作成事業は、平成30年11月から令和２年10月までの三年度にわたり継続して実施した。

平成30年11月から平成31年３月にかけては遺物の洗浄、注記及び図面整理、写真整理を並行して行った。注記は、効率化のため機械を導入して行った。多量に出土した集石土壙の礫類については分類を行い、計測を行ってデータ化した。

令和元年度は遺物の接合・復元を主に行い、報告用の遺物を抽出した。実測用の土器は約600点、拓本用の破片は各住居跡コンテナ１箱分抽出し、石器類も約300点を抽出した。これらの遺物の実測を開始し、土器片の採拓・断面実測も行った。並行して、遺構の第二次原図を作成し、パソコン上で電子トレースを行い、組み合わせて報告用の版下とした。また、出土遺物の科学的分析である年代測定や、土器器面への種実圧痕の同定、集石土壙から出土した木炭の樹種同定等を行った。

令和２年度は主に土器の実測を行い、トレースを行って、パソコン上で土器片や石器などと組み合わせて報告用の図版を作成した。また、遺物の写真撮影も同時に行い、遺構写真、土器の立体写真、破片等の俯瞰写真、石器の俯瞰写真等をパソコン上で組み合わせて報告用の版組を行った。

８月からこれらの版組を基に割付を行い、文章の執筆を開始し、10月末に入稿した。その後、校正を行い12月23日に印刷・刊行した。

3　発掘調査・報告書作成の組織

平成29年度（発掘調査）

理事長	塩野谷孝志	**調査部**	
常務理事兼総務部長	川目晴久	調査部長	赤熊浩一
総務部		調査部副部長	田中広明
総務部副部長	黒坂禎二	主幹兼調査第一課長	山本靖
総務課長	曽川浩二	主幹兼調査第二課長	上野真由美

平成30年度（発掘調査）

理事長	藤田栄二	**調査部**	
常務理事兼総務部長	川目晴久	調査部長	瀧瀬芳之
総務部		調査部副部長	吉田稔
総務部副部長	田中広明	主幹兼調査第二課長	上野真由美
総務課長	新井了悟	主任専門員	宮井英一
		主任専門員	金子直行
		主事	滝澤誠
		主事	近藤洋

平成30年度（整理・報告書作成）

理事長	藤田栄二	**調査部**	
常務理事兼総務部長	川目晴久	調査部長	瀧瀬芳之
総務部		調査部副部長兼整理第二課長	山本靖
総務部副部長	田中広明	主幹兼整理第一課長	福田聖
総務課長	新井了悟	主任専門員	宮井英一
		主任専門員	金子直行

平成31年度（令和元年度）（整理・報告書作成）

理事長	藤田栄二	**調査部**	
常務理事兼総務部長	髙津導	調査部長	黒坂禎二
総務部		調査部副部長兼整理第一課長	上野真由美
総務部副部長	山本靖	主任専門員	宮井英一
総務課長	新井了悟	主事	吉留頌平

令和２年度（整理・報告書作成）

理事長	藤田栄二	**調査部**	
常務理事兼総務部長	福沢景	調査部長	吉田稔
総務部		調査部副部長兼整理第一課長	上野真由美
総務部副部長	山本靖	主幹兼整理第二課長	大谷徹
総務課長	鈴木裕一	主任専門員	金子直行
		主事	入江直毅

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

向原Ａ遺跡及び芦苅場遺跡は、埼玉県の南西部に位置し、ＪＲ川越線武蔵高萩駅から約４km南方、圏央道狭山日高インターから約800m北西の飯能市大字芦苅場字久保に所在する（第１・２図）。

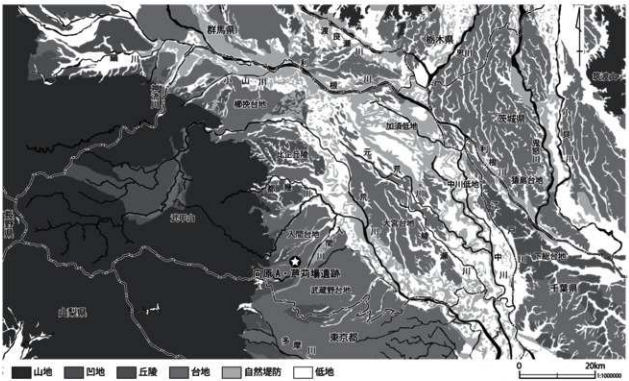
埼玉県は西高東低の地形で、大きく三つの地域に区分される。すなわち、関東山地と秩父盆地からなる県西部地域、それに連なる丘陵及び台地によって構成された県中部地域、荒川と中川の低地帯と、それに挟まれた大宮台地からなる県東部地域である。このうち、両遺跡が所在する飯能市は、秩父地域を除いた県の西部地域にあたる。

飯能市は埼玉県の南西部、秩父山地の東縁に位置する。市域の西側約８割が山地で、平地は入間川の古い扇状地として形成された飯能台地を中心とする。飯能台地は山地から東へ向かって張り出した高麗丘陵、加治丘陵に挟まれており、入間川左岸に数段の河岸段丘が発達している。西側の山地部は高麗川、入間川、成木川によって三つの谷が開析されている。河川は飯能市と秩父市、横瀬町、ときがわ町、東京都青梅市、奥多摩町との分水嶺から南東、東方向へ谷を刻み、飯能市街地を境として台地地形へと変化させる。この他、市北西部では、小畔川、第二小畔川、南小畔川などの小河川が高麗丘陵を樹枝状に開析している。

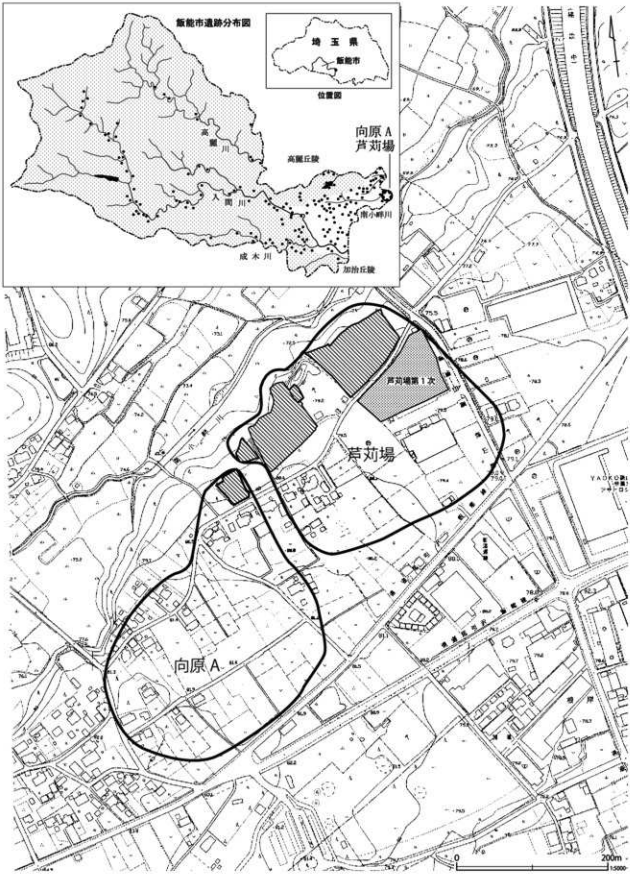
両遺跡は、入間台地の南側、南小畔川の右岸に位置しており、標高は約78mである。遺跡から南小畔川までは約80mで、緩やかな傾斜をなしている（第３・４図）。

入間台地は、入間川、高麗川、越辺川によって形成された扇状地性の台地で、台地の南側を東へ向かって流れる入間川を挟んで狭義の武蔵野台地が広がる。

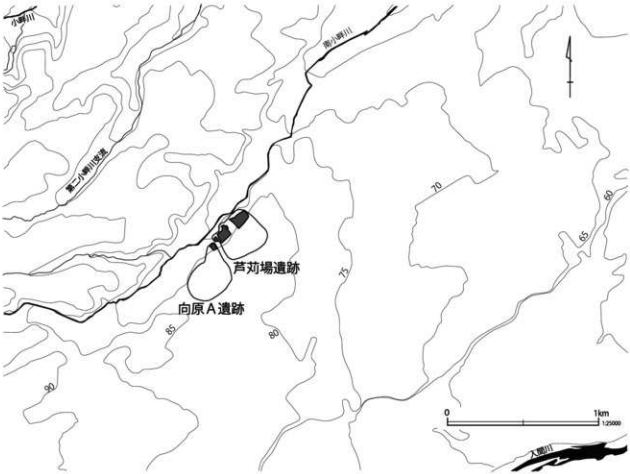
現在、遺跡周辺の地形は入間台地の中でも飯



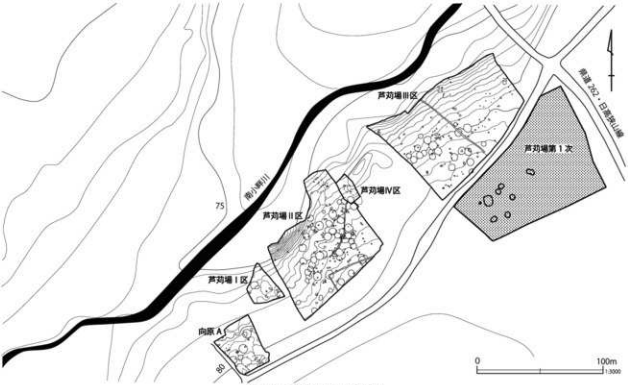
第１図　埼玉県の地形図


飯能市遺跡分布図
埼 玉 県
飯能市
位置図
高 麗 川
高麗丘陵
向原A
芦苅場
入 間 川
南小畔川
成 木 川
加治丘陵
芦苅場第1次
芦苅場
向原A
200m

第2図　遺跡の位置図（1）



第３図　遺跡の位置図（２）



第４図　遺跡の位置図（３）

能台地に分類されている。飯能台地は、入間川の古い扇状地として形成された台地で、三つの段丘面に区分されている。この段丘面のうち、武蔵野面に対比される中位の段丘面上に両遺跡は立地する。飯能台地の北側には幾筋もの河川が流れており、これらの河川を挟んで入間台地の一つである坂戸台地と対峙する。

飯能台地の北側を流れる河川の一つに、遺跡の北側を東流する南小畔川がある。南小畔川は、飯能台地の北に位置する高麗丘陵に源を発し、飯能市内を東へ向かって流れる。その後、川越市笠幡付近の中田橋下流で小畔川と、川越市、坂戸市、川島町の境界付近にあたる落合橋の下流で越辺川と合流する。越辺川と合流後はすぐに入間川とも合流し、最終的にはさいたま市との境界近くにあたる川越市大字古谷本郷で現荒川に統合される。入間川は近世以前においては単独で東京湾の近くまで流れていた河川であったが、江戸時代に行われた荒川の瀬替えにより現荒川の支流となっている。かつては水も豊かな清流で、江戸（東京）への木材輸送路や水車の動力源としても利用されていた。しかし、狭小な流域面積や降水量の減少、流路の変化などにより現在では流量が著しく減少している。

以上のように、今日における向原A遺跡及び芦苅場遺跡周辺の地形は、高麗丘陵に端を発する南小畔川をはじめとした幾筋もの河川によって、飯能台地が樹枝状に開析された複雑な地形となっている。

2　歴史的環境

飯能市内における遺跡は、主に高麗丘陵に源を発する小畔川及び南小畔川水系と、入間川左岸の湧水を伴う河岸段丘上に分布している（第５図）。両地域に挟まれる台地の中央部は、水利に乏しく集落遺跡の空白地帯で、集石土壙や落とし穴等が確認される散布地が僅かに点在する程度である。その他、丘陵の裾部や頂部、山地部では河川両岸の幅狭な小高い平場や、傾斜の緩い山稜の裾部に遺跡が存在している。向原A遺跡（１）、芦苅場遺跡（２）の立地する飯能台地では、南小畔川流域の浅い谷筋や丘陵裾部の小河川、河岸段丘上に点在する湧水付近に遺跡が集中する。

市内の遺跡は、縄文時代と奈良・平安時代の遺跡に大別され、特に縄文時代の遺跡は多く、台地部から山間部の広い範囲で確認されている。

旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、南小畔川沿いに多くが分布している。南小畔川の右岸に位置する中台遺跡（３）や屋淵遺跡（４）からはナイフ形石器が出土している。また、山間部の小岩井渡場遺跡でも尖頭器やナイフ形石器、細石刃などが見つかっている。

縄文時代

縄文時代になると、入間川流域に立地する草創期の加能里遺跡（５）や小岩井渡場遺跡、矢颪遺跡群（６～11）を嚆矢として増減を繰り返しながら次第に遺跡数が増加していく（第６図）。

入間川上流の右岸に位置する小岩井渡場遺跡では、微隆起線文土器や爪形文土器、有舌尖頭器が出土している。小岩井渡場遺跡より約４km下流で入間川右岸に立地する矢颪遺跡群のうち、中矢下遺跡（６）、夕日ノ沢遺跡（７）では押圧縄文段階と思われる土器や石器群が見つかっている。また、入間川左岸に位置する加能里遺跡からも爪形文土器が出土している。

早期には、堂ノ根遺跡（12）、天王前遺跡（13）、三ヶ谷戸遺跡（14）、池ノ東遺跡（15）などで、当該期の炉穴や、撚糸文系、条痕文系の遺構及び遺物が確認されている。

前期になると、飯能市内のほぼ全域で当該期の

遺跡を確認することができ、中でも丘陵裾部や山間部を遡った舌状台地を中心に分布している。当該期の遺跡はいずれも１～数軒程度の住居軒数で規模が小さく継続期間も短いが、花積下層式期、関山式期、黒浜式期、諸磯式期の各時期に集落が営まれている。特に、入間川の上流に立地する小岩井渡場遺跡では20数軒にも及ぶ関山式期の住居跡が見つかっている。

中期後半には遺跡数が激増し、市内における遺跡数は80箇所以上を数え、最盛期を迎える。加能里遺跡をはじめ、別所平遺跡（16）、落合上ノ台遺跡（17）、八王子遺跡（18）などは大規模な環状集落遺跡として知られている。

大字岩沢に所在する加能里遺跡は、入間川によって形成された河岸段丘上の左岸の第二段丘崖線下から第三段丘崖線の直上にかけて広がる。これまでに70回近く調査が行われており、調査範囲は広域に亘る。このうち、中期の環状集落は、この第二段丘崖線と藤田堀が最も近接し、東へ向かって舌状に張り出している「樋ノ口地点」と仮称している地域にあたる。

これまでに行われた調査の結果、勝坂式後半から加曽利Ｅ式前半にかけての住居跡が58軒確認されている。また、住居跡群に重複するように集石土壙も50基見つかっている。その一方で、土壙はあまり発見されず、落とし穴や貯蔵穴は極めて少ない。

樋ノ口地点の住居跡は、南北に並ぶように配置されており、かつてはより東側へ環状に分布する集落と想定されていた。しかし平成23年に実施された第42次調査では、調査区内の中央から東側では住居跡を確認できていない。また、平成25年に行われた崖上南西端の第56次調査区にて、住居跡が１軒見つかっている。以上の点から、近年、加能里遺跡における環状集落は、第42次調査区から西側へ展開する可能性が出てきている。

加能里遺跡から藤田堀を隔てた第三段丘崖線上に位置する池ノ東遺跡では加曽利Ｅ式後半から集落が営まれており、周辺遺跡も含めて各時期で集落域が移動している様相が窺える。また、崖線を離れた北方の双柳地区にはほぼ平坦な台地が広がる。地区内に所在する山ノ内遺跡（19）からは落とし穴群が確認されており、当該地域一帯が加能里遺跡周辺や南小畔川流域に分布する集落群の狩猟活動域であった可能性を示唆している。

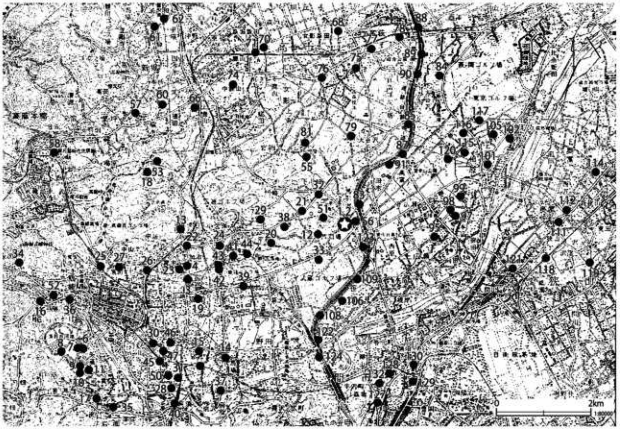
大字落合に所在する落合上ノ台遺跡は、入間川の支流の一つである成木川の右岸で、入間川と成木川の合流地点から約800m上流の、成木川が北へ大きく蛇行する地点に立地する。

勝坂式から加曽利Ｅ式にかけての住居跡が51軒、住居跡とは判断し難いがそれに準ずると思われる遺構が11軒確認されている。住居跡は調査区の南西から北東へかけて、幅約40mの弧を描くように分布している。調査範囲は、集落全体の４分の１にあたり、想定される集落の規模は約200軒に及ぶと思われる。

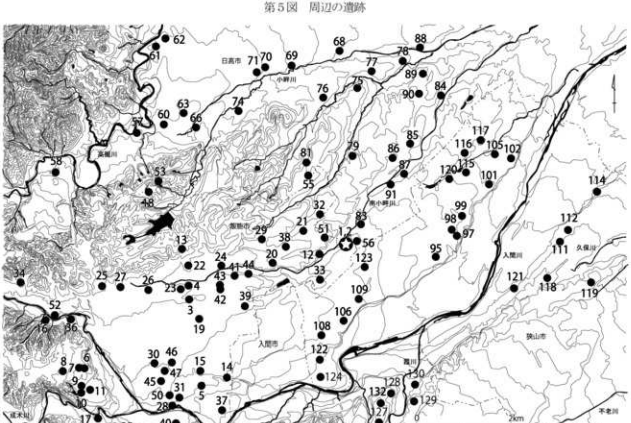
集落の開始期にあたる勝坂式期の前半から、すでに環状の帯範囲内に住居跡が分布している。勝坂式期の後半に一時的に環状の外側へ分布が移動するも、加曽利ＥⅠ式期にはやや内側ではあるが、再び帯範囲内に収まる。続く加曽利ＥⅡ式期になると、調査区内における住居跡の軒数が最も多くなる。当該期が落合上ノ台遺跡での最盛期であったと思われる。この時期についても住居跡の分布は環状を呈した帯の範囲内に収まる。その後、加曽利ＥⅢ式期以降になると、住居跡の軒数は減少し、環状の内側に配されるようになる。これまでの環状の帯範囲に対する住居占有地の意識が無くなった、あるいは希薄化したためと思われる。

大字宮沢に所在する八王子遺跡は、高麗丘陵上の南北に伸びる尾根と、それに続く南斜面上に立地する。尾根の南を除く三方向には小支谷が入り組んでおり、急傾斜となっている。

遺跡からは、勝坂式前半から加曽利Ｅ式前半に



第５図　周辺の遺跡



第６図　周辺の遺跡（縄文）

第1表　周辺の遺跡一覧（第5～7図）

番号	市町村	遺跡名	種類	時代
1、2	飯能	向原A・B・芦苅場	集	縄
3		中台	集	旧 縄 中
4		屋敷	集	旧 縄
5		加能里	集	縄 古 奈 平
6		中矢下	集	縄 平 中
7		夕日ノ沢	集	縄 平
8		上前原沢	集	縄
9		芝山ヲネ	集	縄
10		後山北谷	集	縄
11		滝尾塚	塚	縄
12		堂ノ根	集	縄 奈 平
13		天王前	集	縄 奈 平
14		三ヶ谷戸	集	縄
15		池ノ東	集	縄
16		別所平	集	縄
17		落合上ノ台	集	縄
18		八王子	集	縄
19		山ノ内	集	縄
20		釜塚久保	集	縄 奈 平 中
21		笠久保	集	縄 奈 平
22		栗坪	集	縄 奈 平
23		堂前	集	縄 中
24		株木	集	縄 奈 平
25		飯能上野	集	縄
26		旭原	集	縄 奈 平 中
27		上町東	集	縄
28		熊坂	集	縄
29		中原	集	縄 古 奈 平
30		新井原	集	縄 奈
31		新堀	集	縄 奈 平 中
32		下川崎向原	集	縄
33		向原B	集	縄
34		永田久保	集	縄
35		道間	集	縄 平
36		大河原森下	集	縄 平
37		前原地	集	縄
38		ヤタリ	集	縄
39		西新田	集	縄
40		森ノ木	集	縄 平
41		甲新田	集	縄 奈
42		郷路	集	縄
43		小久保向原	集	縄 奈 平
44		栗木田向	集	縄 奈 平
45		後熊	集	縄
46		六道	散	縄
47		榎戸	集	縄 奈
48		菅沢	集	近
49		飯能焼原窯跡	窯	近
50		新堀西	集	縄
51		芳ヶ谷	集	縄 奈 平
52		大六天	集	縄
53		大日向	集	縄
54		初雁	塚	不明
55		森ノ腰	集	縄
56		馬引沢向原	集	旧 縄 平
57		東原	集	縄 奈
58		高麗石器時代住居跡	集 館	縄 中
59	日高	愛宕山	塚	不明
60		小竹	集	縄
61		上野ヶ谷戸	集	縄
62		八幡	集	縄 中
63		神明	集	奈 平
64		稲荷	集	奈 平
65		常木久保	集	奈 平
66		宮ノ後	集	奈 平
67		新宿	集	奈 平
68	日高	拾石	集	縄 奈 平
69		大国ヶ谷戸	集	奈 平
70		稲荷	集	縄 奈 平
71		稲荷	集	縄 奈 平
72		古道	集	奈 平
73		堀ノ内	集	平
74		後耕地	集	縄
75		寺脇	集	縄
76		若宮	集 寺	縄 奈 平 中
77		宿東	集	縄
78		西不動	集	縄 奈
79		宿方	集	縄
80		上の条	集	平
81		西佛	集	縄
82		北ノ原	集	奈 平
83		上原	集	縄
84		惣原	集	旧 縄 古 奈 中
85		二反田	集 墓	縄 平 中
86		宮久保	集	奈 平
87		下向山	集	旧 縄 平 中
88		上猿ヶ谷戸	集	旧 縄 古 奈 中
89		長山甲	その他	縄
90		西ノ久保	その他	縄 中
91		向山	集	旧 縄
92		向谷	道	古代道
93		小河原	集	奈 平
94	狭山	上広瀬古墳群	古	古
95		今宿	集	縄 奈 平
96		霞ヶ丘	集	奈 平
97		森ノ上	集	縄 奈 平
98		富士塚	集	縄 奈 平
99		鳥ノ上	集	縄 奈 平
100		小山ノ上	集	奈 平
101		御所の内	集	縄 奈 平
102		城ノ越	集	縄 奈 平
103		城山砦跡	城	中
104		宮ノ越	集	奈 平
105		宮原	集	縄
106		宮地	集	縄 奈 平
107		八木北	集	平
108		八木上	集	縄 中
109		金井上	集	縄 中
110		峰	集	奈 平
111		戸渠	集	縄 奈 平 中
112		揚櫓木	集	縄 奈 平
113		坂上	集	奈 平
114		稲荷上	集	縄 奈 平
115		町久保	集	縄 中
116		金井林	集	縄 中
117		丸山	集	縄
118		中原	集	縄 奈 平
119		下向沢	集	縄
120		高根	集	縄
121		蔦紙園	集	縄 奈
122		八木	集	縄
123		西久保	集	旧 縄 平 中
124		八木前	集	縄
125		堀鯉井	道	中
126	入間	森坂	集	平
127		宮ノ小路	集	縄 平
128		若宮	集	縄 奈 平
129		金堀沢Ⅱ	集	縄
130		久保	集	縄
131		前内出窯跡	窯	奈
132		高倉寺前	集	縄 奈 平
133		森坂北	集	奈 平

種類　集…集落跡　窯…窯跡　散…散布地　館…館跡　寺…寺院跡　墓…墳墓　城…城跡　古…古墳　道…道路跡

第７図　周辺の遺跡（古代以降）

かけての住居跡が70軒確認されている。確認された住居跡の大半は、丘陵上の南北に伸びる尾根の平坦面の縁辺に数珠繋ぎ状に検出され、南側に開いた馬蹄形状に分布している。

集落の開始期にあたる勝坂式期の前半では、尾根の南緩斜面上から始まり、平坦面の最外縁へと住居跡の分布範囲が広がる。八王子遺跡における土地利用が、外縁から開始した様相が想定できる。勝坂式期の後半になると、住居跡の分布は西縁部が主体となり、特に平坦面の中央側に営まれるようになる。東縁部では南北に分布範囲を広げる。ただし、北縁部では住居跡がまだ見つかっていない。続く加曽利ＥⅠ式期になると、東縁部へと分布の主体が移動し、中でも東縁部南半において活発化する。また、北縁部への進出が始まる。その後、加曽利ＥⅡ式期では、東縁部にやや集中する傾向が窺えるものの、平坦面の周縁部全体に住居跡が分布するようになる。

八王子遺跡の北東に隣接する大日向遺跡（53）は、飯能市側と日高市側を合わせて住居跡が14軒見つかっている。阿玉台式期の住居跡１軒を除き、加曽利ＥⅡ式から加曽利ＥⅢ式段階と思われる。八王子遺跡の集落が途絶える時期、もしくはその直後から集落経営が開始したと思われる。

以上の大規模な環状集落が営まれていた三つの遺跡はそれぞれ、加能里遺跡が飯能台地南縁、落合上ノ台遺跡が加治丘陵上、八王子遺跡が高麗丘陵上における拠点的な集落としての性格を有していたと思われる。そして、環状集落が解体されると、小規模かつ短期間の集落が周辺に営まれるようになる。

今回報告する芦苅場遺跡も昭和45年の調査当時から勝坂式後半から加曽利Ｅ式前半にかけての集落が環状を呈するように広がっていたと想定されている。南小畔川流域の拠点的な集落をなしていたと思われる。芦苅場遺跡より約1.6km上流で南小畔川の左岸に立地する張摩久保遺跡（20）では、五領ヶ台式期と加曽利Ｅ式後半の集落が見つかっ

ている。両集落は小規模で、期間も短かったようである。また、落とし穴や集石土壙などは遺跡内に広く点在しており、狩猟・採集加工の活動域として利用されていた様子が窺える。

この他、南小畔川流域には芋久保遺跡（21）、栗屋遺跡（22）、堂前遺跡（23）、株木遺跡（24）などの集落遺跡が河川に面した台地縁辺部に並んで存在し、飯能上野遺跡（25）や旭原遺跡（26）は南小畔川の遺跡群のなかでも上流域に位置する。入間川上流に立地する矢颪遺跡群では勝坂期前半の遺構が発見されている。

後期に入ると遺跡数は減少していくが、上町東遺跡（27）などで称名寺式期の住居跡が確認されている。加能里遺跡や熊坂遺跡（28）、中橋場遺跡のように後期から晩期にかけて長期的に継続する集落も存続するが、これらの長期継続型の集落も晩期中葉になると終焉を迎えるようである。

その後は飯能市域における人々の活動痕跡が乏しくなり、弥生時代の遺跡はこれまで確認事例がない。

古墳時代

弥生時代に続き、古墳時代においても加能里遺跡、中原遺跡（29）などで小規模かつ短期間の集落が確認される程度である。

加能里遺跡では前期末から中期初頭にかけて短期的な集落が営まれていたようである。中原遺跡においては中期の住居跡が１軒見つかっており、集落として後代に継続した形跡は認められない。

市内において古墳時代に数回ほど小規模ないし単発的な開発が試みられたようだが、定着するまでには至らなかったようである。

奈良・平安時代

奈良・平安時代になると様相は一転し、716年の古代高麗郡建郡を契機として遺跡数が急速に増加する（第７図）。

張摩久保遺跡をはじめとし、南小畔川流域を中心に新井原遺跡（30）や旭原遺跡など、複数の遺跡で同時期に集落が営まれ始める。中でも張摩久保遺跡では８世紀第３四半期頃の住居跡から暗文が施された内面黒色土器の破片が出土している。入間郡内では８世紀前葉以降、供膳器としての土師器の生産や使用が途絶えている。さらに内面黒色土器は、盛行する９世紀になっても入間郡には定着しない器種である。こうした点から張摩久保遺跡から出土した内面黒色土器は今後注目されよう。

堂ノ根遺跡からは常陸新治産の須恵器が出土している。古代高麗郡建郡に伴う常陸国からの渡来人の移住を示唆する遺物として注目されている。

８世紀の遺跡は、入間川左岸の河岸段丘上に存在する湧水の周辺でも認められるが、南小畔川流域と比較すると小規模で、８世紀末には途絶し、９世紀へは継続しないようである。

９世紀以降は高麗丘陵及び加治丘陵の裾部や高麗川、入間川上流の山間地の奥深くに集落が広がり、水田耕作から離れた地域に進出している。

入間川上流に位置する茶内遺跡、ヨマキ遺跡、横道下遺跡では平安時代の住居跡が纏まって確認されている。

中・近世

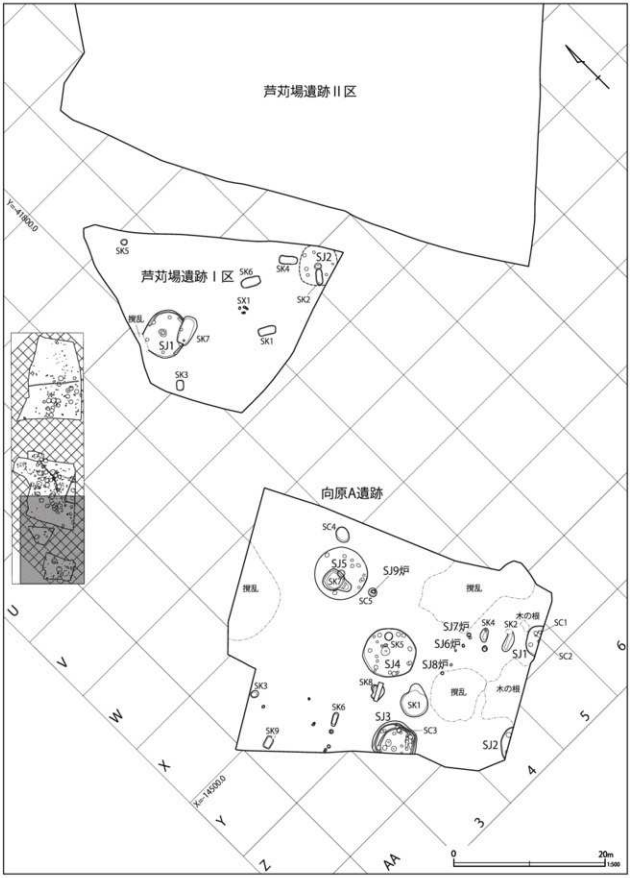
中・近世になると、再び遺跡数は激減する。発掘調査の成果としては、加能里遺跡で掘立柱建物が、新堀遺跡（31）にて堀や礎石建物跡がそれぞれ調査されている。また、張摩久保遺跡では中世末から江戸時代初頭にかけての火葬墓や土葬墓といった墓域が調査されている。江戸時代の遺構として、大字中山の中山新吉（水戸徳川家附家老）墓の調査、大字中居に位置する宝蔵寺礫石経塚、八幡町に所在する幕末の陶器窯である飯能焼原窯跡の調査、大字下直竹の長光寺における土塁調査などが事例として挙げられる。

Ⅲ　遺跡の概要

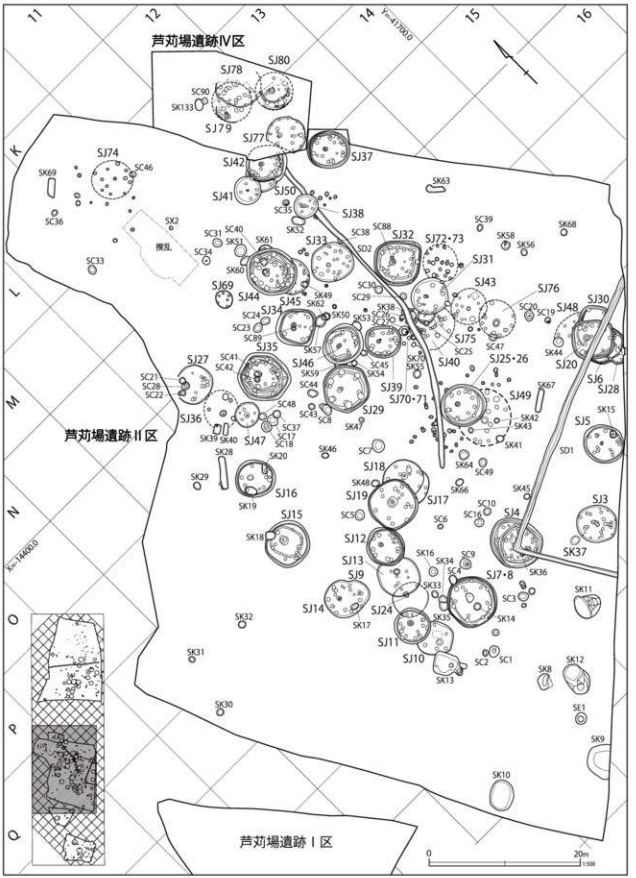
今回の調査区の北側には、南小畔川が北東方向に流れている。調査の対象となった向原A遺跡と芦苅場遺跡はこの南小畔川右岸の標高約78m前後の段丘上に位置している。両遺跡は段丘上の東西に並んで存在し、上流側の西側に向原A遺跡、下流側の東側に芦苅場遺跡が並列している。

両遺跡とも飯能市の東端に当たる飯能市芦苅場字久保地内に所在し、圏央道狭山日高インターの北西約800mの地点に位置している。インター周辺には流通関係の倉庫群等が多く建設されており、本調査も

第８図　調査区全体図（１）


芦苅場遺跡Ⅱ区
芦苅場遺跡Ⅰ区
向原A遺跡
Y=-4180.0
X=-14580.0
SK5
SK6
SK4
SJ2
SK2
SX1
SK1
SJ1
SK7
SK3
撹乱
SC4
SJ5
SK7
SJ9炉
SC5
SJ7炉
SK4
SK2
木の根
SC1
SJ6炉
SJ1
SC2
SJ8炉
SK5
SJ4
SK8
SK1
SK3
SK6
SJ3
SC3
SK9
SJ2
U
V
W
X
Y
Z
AA
3
4
5
6
0
20m
1:500

第９図　調査区全体図（２）



第10図　調査区全体図（3）

第11図　調査区全体図（4）

その造成関係の開発事業による事前調査である。遺跡の所在する南小畔川沿いの段丘上には遺跡が並列して存在しており、特に右岸の向原A遺跡と芦苅場遺跡は近接して並列している（第2図）。また、芦苅場遺跡は北側の県道日高狭山線を挟んで、北側に日高市向原遺跡が隣接するが、今回の調査で遺構群が連続せずに途切れることから、別遺跡であることが明らかになった。一方で、向原A遺跡と芦苅場遺跡の関係については、今回の調査区内での成果からは明らかにし得なかった。

発掘調査は平成30年１月から10月までの10箇月間で行い、平成30年１月から３月は向原A遺跡の第４次調査を主体に、芦苅場遺跡第２次調査Ⅰ区も並行して調査を行った。平成30年４月から10月までは、芦苅場遺跡の第３次調査を行った。工事と調査の進行の調整が難しかったが計画的に調査を行い、両者に支障を来たさないよう協力的に調整を図って、無事に調査を終了することができた。

１　向原Ａ遺跡

向原Ａ遺跡は飯能市大字芦苅場字久保57－１番地他に所在し、過去に３回調査が行われ、縄文時代の集石土壙４基が検出されている。今回の調査は第４次調査となり、対象面積1,250㎡について、平成30年１月から３月まで行われた。

調査区は向原Ａ遺跡の北端に突出した段丘上に当たり、南側は市道で、西側は個人墓地へと続く小路で区切られている（第２～４図）。芦苅場遺跡Ⅰ区（第８図）とは10ｍ程間隔を空けるが、芦苅場遺跡Ⅰ区の南側で、向原Ａ遺跡の東側に当たる地区が撹乱を受けていて様相が不明瞭であることから、向原Ａ遺跡と芦苅場遺跡の関係については不明瞭であると言わざるを得ない。

調査区全体が大小の撹乱を受けていたため、消滅したか、確認し得なかった遺構が存在していた可能性もある。今回の調査で発見された遺構は、約5000年前の縄文時代中期の竪穴住居跡９軒、集石土壙５基、中・近世の地下式坑３基、土壙６基、ピット９基であった（第９図）。

縄文時代中期の竪穴住居跡は、比較的ローム面への掘り込みが深い第１～３号住居跡と、掘り込みが浅く炉跡のみ検出された第６～９号住居跡とに分かれ、第４、５号住居跡はかろうじて炉や埋甕、床面等が残存していた状況であった。

第１号住居跡と第２号住居跡は、遺構の大半が調査区南側の市道下にあたり、調査区内では一部のみ調査が行われた。第１号住居跡の覆土内には、小規模の集石土壙が２基構築されていた。

第３号住居跡は一部が調査区外に当たるが、掘り込みがやや深く、多量の遺物が出土した。壁溝が３本、炉跡が３箇所に確認されたことから２回の建て替えもしくは重複が明らかになった。第４、５号住居跡は遺存状態が良好ではないが、全貌が明らかにされた住居跡である。第４号住居跡は炉体土器と埋甕２基が検出されており、ピットの配置等から少なくとも１回の建て替えが行われていた。第５号住居跡も住居跡の半分程に撹乱を受けているが、炉体土器と埋甕２基が検出されている。第６号住居跡から第９号住居跡は炉のみ現存しているが、第９号住居跡では炉の直上に、炉の窪みを利用して集石土壙が作られていた。

中・近世の地下式坑は３基検出されており、いずれも階段状の入り口部を備え、方形と円形状の地下坑を有するものである。板碑や15世紀を中心とした中世の焼き物などが出土している。

また、縄文時代の第４号集石土壙は、覆土から中世の焼き物が多量に出土したことから、中世段階に撹乱を受けていたものと思われる。

その他、根がらみ石の可能性がある礫を出土したピットがあることから、中世の建物があった可能性が考えられる。

2　芦苅場遺跡

芦苅場遺跡は飯能市大字芦苅場字久保12－１番地他に所在し、過去に１回調査が行われ、縄文時代の住居跡８軒等が検出されている。今回の調査は第２、３次調査となり、対象面積14,750㎡について、平成30年１月から10月まで行われた。

芦苅場遺跡は調査年度と調査地点で、Ⅰ区からⅢ区に区分して調査を行った（第８図）。Ⅰ区は調査区西端の小区画で、向原A遺跡に隣接する地区で、平成30年１月から３月にかけて調査を行った。Ⅱ区はⅠ区と遺跡中央部の未調査区との間の地区で、Ⅲ区は未調査区より東側の地区である。Ⅱ、Ⅲ区とも平成30年４月から10月末日まで調査が行われた。その後、隣接地点を飯能市教育員会が平成30年11月６日から11月９日まで調査を行い、その地点をⅣ区とした。調査区は中央部の幅約50mの未調査区を含めて、東西方向に約270m、南北の最大幅で約78mの範囲である。中央の未調査区は全体に深く撹乱されていたが、かろうじて調査可能な部分について飯能市教育委員会がⅣ区として調査した。

検出された遺構は約5500年前の縄文時代中期の竪穴住居跡80軒、集石土壙88基、土壙12基、時期不詳であるが縄文土器を出土する土壙49基、特殊遺構２基、中・近世の地下式坑３基、土壙37基、井戸跡１基、溝跡３条、ピット109基である。多くの遺構とともに、多量の土器、石器が出土している。

縄文時代中期の遺構を区毎に見ると、Ⅰ区では住居跡２軒、Ⅱ区では住居跡53軒、集石土壙45基、土壙29基、Ⅲ区では住居跡21軒、集石土壙42基、土壙31基、Ⅳ区では住居跡４軒、集石土壙１基、土壙１基が検出されている。

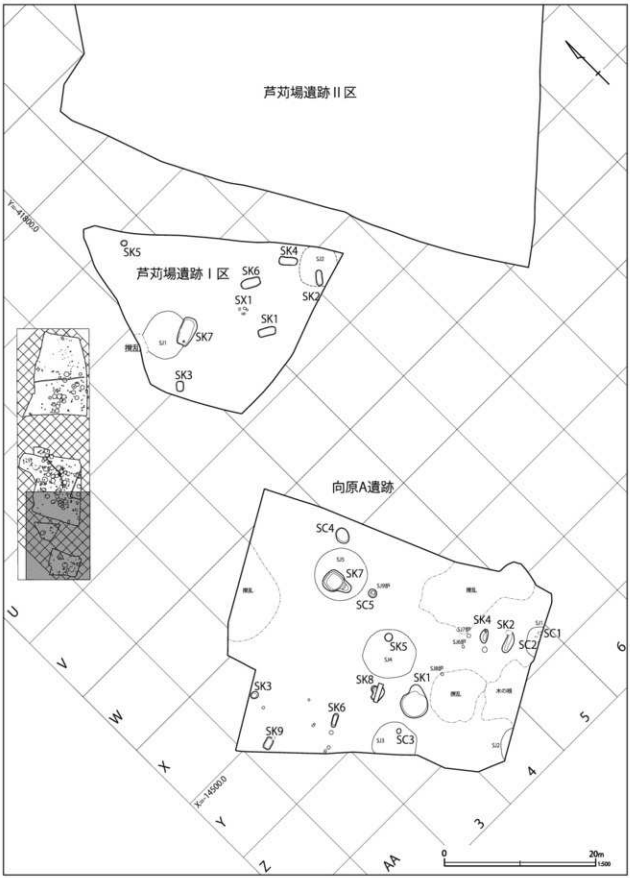
遺跡全体では約220mの範囲に住居跡が存在するが、環状の並びを呈するのは約180mの範囲である。Ⅰ区では中期後葉の住居跡２軒が検出されているが、これらの住居跡はⅡ区、Ⅲ区で構成される環状の並びからは外れる位置に構築されている。また、Ⅱ区では西側に中期後葉の住居跡が集中しており、これらとⅠ区の住居跡が組となる可能性がある。さらに、これらの住居跡は、隣接する向原A遺跡との中間地点に位置するため、両遺跡との関係性が不明瞭になっている。

遺跡全体では、Ⅲ区に中期中葉でもやや古い段階の住居跡が集中しており、中期後葉の住居跡は検出されていない。環状の並びを呈する住居跡は、中期中葉の勝坂式期から加曽利Ｅⅰ式までの住居跡で、掘り込みが比較的深く、覆土中にいわゆる吹上パターンと呼ばれる完形率の高い土器群が多数出土している。そして、何度も建て替えを行っており、複数の壁溝や炉跡が検出されている。これらの住居跡はいくつかのブロック状にまとまっており、ブロックの間には住居跡の構築されない空間が存在している。さらに、中央部には径100m程の住居跡が構築されない、いわゆる広場的な空間が存在している。未調査区があるため判断は今後の調査に委ねられるが、芦苅場遺跡は中央部に径100mの広場を有する、径180m程の中期中葉の環状集落である可能性が高いと言えよう。

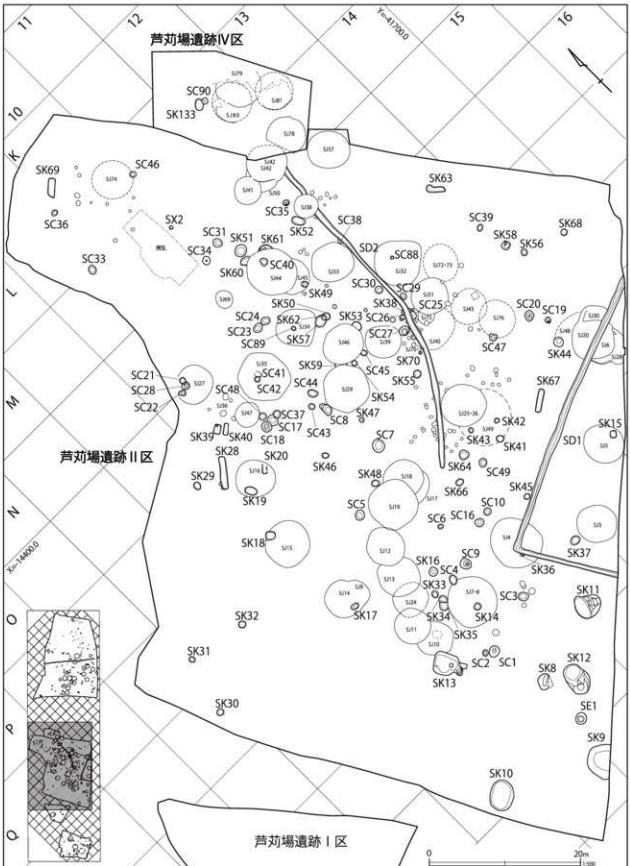
他の時代としては、旧石器時代のナイフ形石器が採集されており、旧石器時代の遺構も存在していた可能性がある。また、縄文時代早期から前期、後期の土器群、古代の須恵器も若干出土している。

また、中世ではⅡ区の市道沿いの南西地区から地下式坑が検出されている。芦苅場地区には厚くローム層が堆積していることから、貯蔵庫としてのムロである中世の地下式坑が構築されたものと想像される。

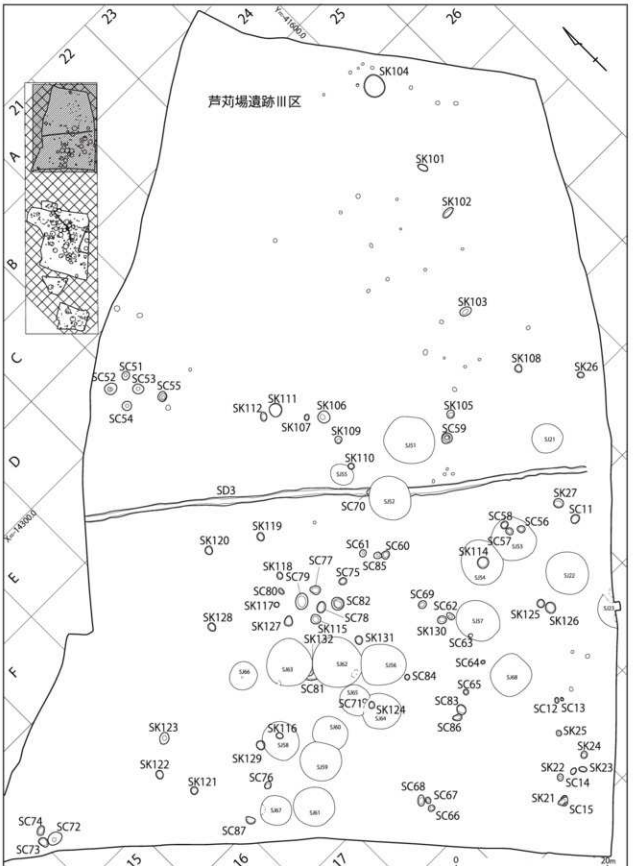
約70m程離れた台地の延長上には同様の地下式坑が検出された向原A遺跡が隣接し、関連する遺構群として注目される。



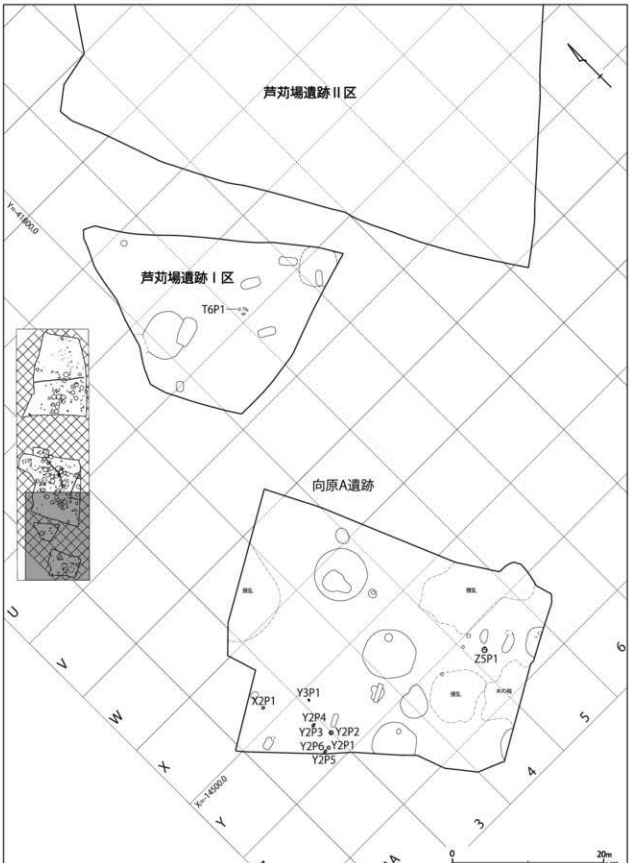
第12図　集石土壙・土壙分布図（1）



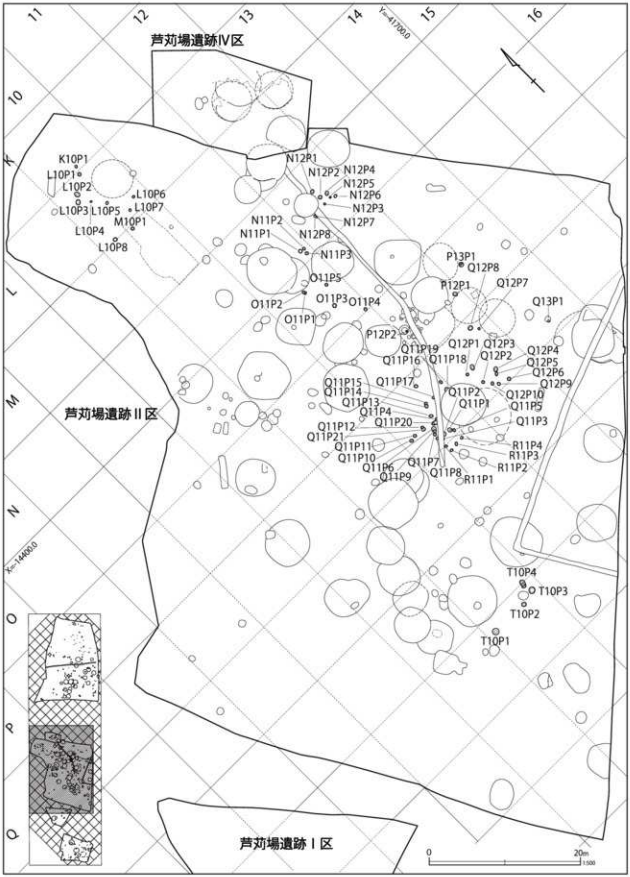
第13図　集石土壙・土壙分布図（2）



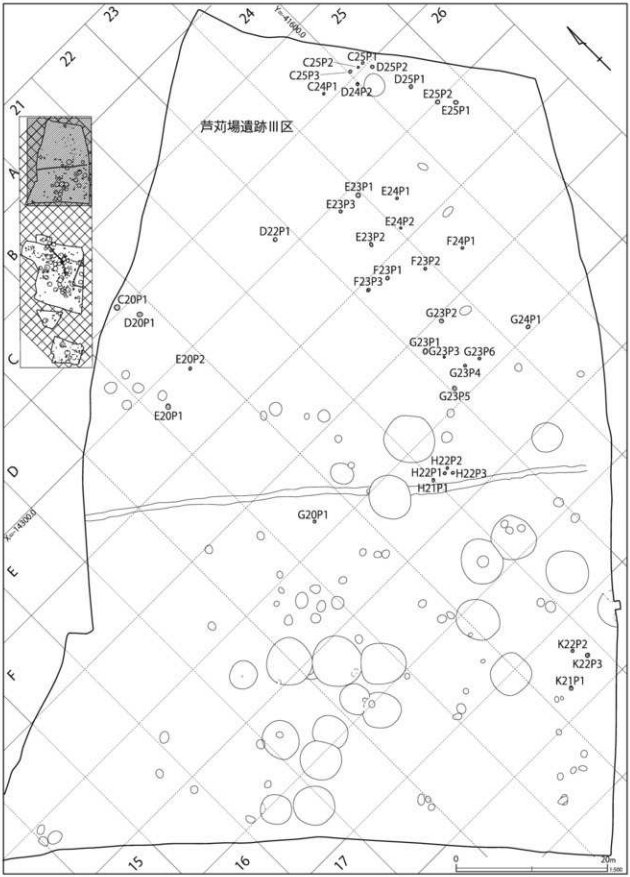
第14図　集石土壙・土壙分布図（3）



第15図　ピット分布図（1）



第16図　ピット分布図（2）



第17図　ピット分布図（3）

Ⅳ　向原Ａ遺跡の調査

１　縄文時代の遺構と遺物

（１）住居跡

竪穴住居跡は、合計９軒が検出された。調査区全体に大小の攪乱が及んでいたため、掘り込みが深く住居跡の壁が検出されたものや、掘り込みが削平されて炉のみ現存する住居跡が存在していた。

第１号住居跡（第18～20図）

Ｚ－５区に位置する。住居跡東側の覆土上層で、第１、２号集石土壙と重複する（第18図）。覆土が堆積している途中で、集石土壙が構築されている。

住居跡の約南側半分が調査区外の市道部分に当たる。調査区際に炉が確認されたことから、住居跡の平面プランは隅丸方形に近い形状が推定される。現存の長径で4.20m、短径1.70m、深さ0.29mを測る。調査区内での形状から、北西方向に主軸があるものと推定される。

壁溝は検出されず、西側の壁は床面からやや緩く立ち上がり、東側の壁は垂直に近い状態で立ち上がる。柱穴と思われるピットは２基検出された。柱穴の深さは床面から、P1=56cm、P2=66cmである。

炉は調査区際で約北側半分が検出され、住居跡のほぼ中央に位置していたものと思われるが、主軸が北西方向にあれば、中央部よりやや奥壁側に位置していた可能性がある。炉は地床炉と思われるが、埋設土器が抜かれている可能性もある。

住居跡は出土土器から、勝坂式の新段階の所産と思われる。

遺物は土器片類、石器類、土製円盤が出土した（第19～20図）。

出土土器は第19図１～19である。１～４は勝坂式古段階から中段階の土器群である。１、２は口縁部が逆「く」字状に屈曲する口縁部破片である。１は口唇部が内削状を呈し、内折する幅狭の口縁部文様帯の上下区画を角頭状工具による角押文で施し、区画内に細かな三角押文で横位の鋸歯状文を施文する。２は口縁部の内折部と頸部の区画文を三角押文で施し、口縁部文様帯内には三角押文による楕円区画文を配し、区画文内に三角押文の鋸歯状文を施している。

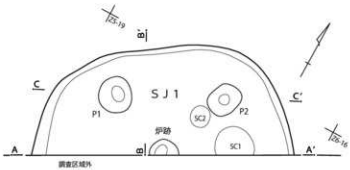
３～５は文様区画隆帯脇に幅広の細かな連続押引文であるキャタピラ文を施文する土器群である。３はキャタピラ文の三角区画文内に三叉文を施文し、キャタピラ文脇に三角押文を施文する。４はキャタピラ文に沿って沈線の小鋸歯状文を施す。５は若干新しい時期と思われ、沈線区画と三叉文の間にキャタピラ文状の細かな刻みを施す。

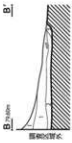
６～12は勝坂式新段階の土器群である。６は短い無文の口縁部が若干開く器形の深鉢形土器で、押引状の爪形文で口縁部を区画する。７はキャリパー形、８は口縁部が開く器形の深鉢形土器で、口縁部に刻みを施す隆帯で区画文を施し、区画内に沈線区画を施すものである。７は区画内に集合沈線や三叉文を充填施文し、三叉文に沿って爪形文を施す。８は口縁部に無文部を有し、隆帯区画内には集合沈線を施文する。９は口縁部を半截竹管状工具の平行沈線で区画し、押引爪形文を沿わせている。10は内湾する口縁部に隆帯を垂下させ、地文に沈線文を施文する。11は刻みを施す平行の隆帯を垂下する。12は沈線区画内に集合沈線を充填施文する。

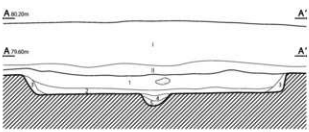
13は爪形文で疑似襞状文を施す阿玉台式系の土器で、沈線の小波状文を施文する。胎土に雲母を多く含んでいる。１～４あたりに伴うものと思われる。

第２表　第１号住居跡柱穴計測表（第18図）

ピットNo	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo	長径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	57.0	56.0	Ｐ２	54.0	66.0





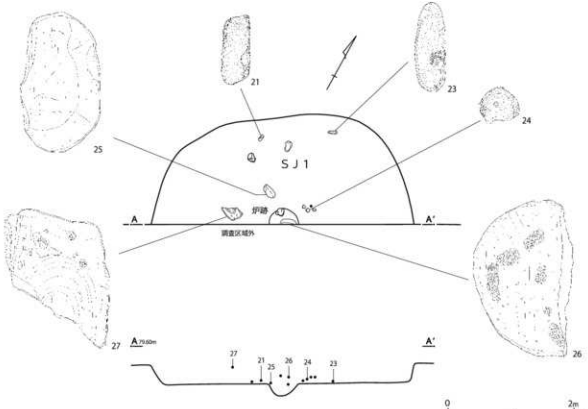


ＳＪ１
Ⅰ　表土層
Ⅱ　暗褐色土　　ローム粒子少量　焼土粒子・炭化物微量
　　縄文の包含層

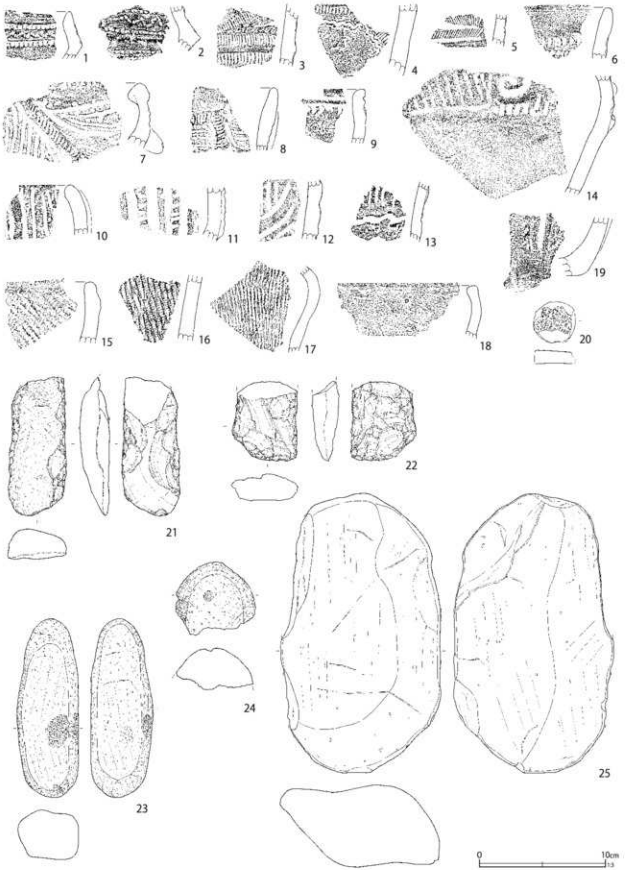
1　暗褐色土　　ローム粒子少量　炭化物微量　粘性弱い
　　遺物を多く出土
2　暗褐色土　　ローム粒子・ロームブロック（径1㎝）多量
　　炭化物少量　固くしまる　粘性強い
3　にぶい黄褐色土　ローム主体

ＳＪ１炉跡
4　暗褐色土　　ローム粒子・焼土粒子多量
　　壁面の焼土ブロックが微量含まれる
5　暗褐色土　　ローム粒子多量
　　ロームブロック（径0.5㎝）・焼土粒子微量

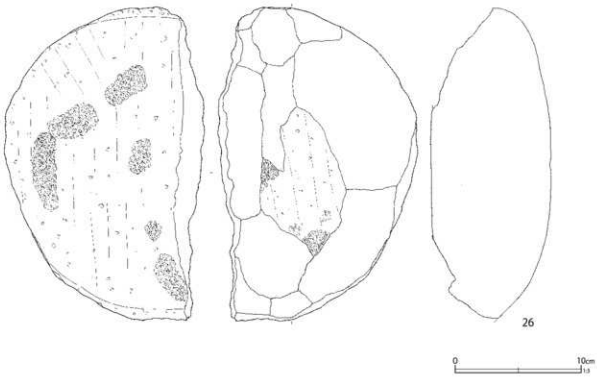
ＳＪ１ピット
6　暗褐色土　　ローム粒子・炭化物少量
7　暗褐色土　　ローム粒子多量
　　ロームブロック（径1～2㎝）・炭化物少量
8　暗褐色土　　ローム粒子多量　ソフトロームが混入

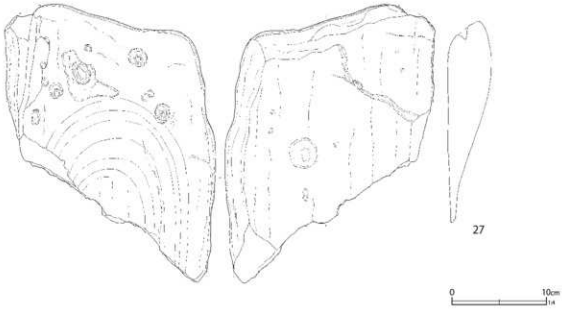


第18図　第１号住居跡・遺物出土状況



第19図　第１号住居跡出土遺物（１）





第20図　第１号住居跡出土遺物（２）

第３表　第１号住居跡出土石器観察表（第19・20図）

番号	器　種	分類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
19 － 21	打製石斧	Ⅱ2②イ	砂岩	[11.0]	4.6	2.4	143.7	
－ 22	打製石斧	Ⅴ②イ	ホルンフェルス	[6.3]	[5.3]	2.1	78.4	
－ 23	磨石	Ⅱ1-2-3①イ	砂岩	14.2	4.9	4.3	454.1	
－ 24	磨石	Ⅴ②ア	安山岩	[5.8]	[6.3]	[3.5]	127.8	
－ 25	石皿	Ⅲ①ア	砂岩	22.2	12.7	6.7	2432.6	
20 － 26	石皿	Ⅰ②ア	閃緑岩	[15.9]	[24.8]	9.9	5078.8	
－ 27	石皿	Ⅲ2②イ	緑泥片岩	[29.4]	22.2	5.5	3749.0	

15～17は地文に縄文や撚糸文を施文する深鉢形土器で、15は単節ＲＬの横位施文、16は０段多条ＲＬの縦走縄文、17は０段多条と思われる撚糸文Ｌを施文する。18は無文の口縁部破片である。

14は加曽利Ｅ式キャリパー形深鉢の口縁部文様帯の破片で、隆帯の渦巻文を短沈線で頸部区画隆帯と連結している。口縁部の区画内には集合沈線を施文する。19は加曽利Ｅ式の深鉢形土器の底部破片で、縦位施文のＲＬ縄文上に２本隆帯を垂下する。14、19は加曽利ＥⅠ式の新しい段階のものと思われる。

20は土器片を利用した土製円盤である。

21～27は石器類である。21、22は短冊形の打製石斧で、いずれも基部を欠損する。23、24は磨石で、23は長楕円形の柱状礫、24は円形の礫を使用し、部分的に敲打痕が残る。

25～27は石皿で、25が不定形であるが凹面を、26が扁平な礫面を使用面として使用している。27は長方形の緑泥片岩を利用した石皿で、欠損するが、皿状に窪んだ磨面と、両面に凹痕を有する。

第２号住居跡（第21～22図）

AA－４区に位置する。住居跡の大半が市道下の調査区外に当たり、住居跡の北壁側約５分の１を調査した（第21図）。

調査した部分からでは全体形の推測は難しいが、住居跡の平面プランは隅丸長方形に近い形状と思われる。現存の長径で4.40m、短径1.10m、深さ0.24mを測る。第１号住居跡と類似することから、北西方向に主軸があるものと推定される。

壁溝は検出されず、壁は床面からやや傾斜しながら立ち上がる。柱穴と思われるピットは２基検出された。柱穴の深さは床面から、Ｐ１＝42cm、Ｐ２＝70cmである。

炉及び埋甕類の付属施設は検出されなかった。

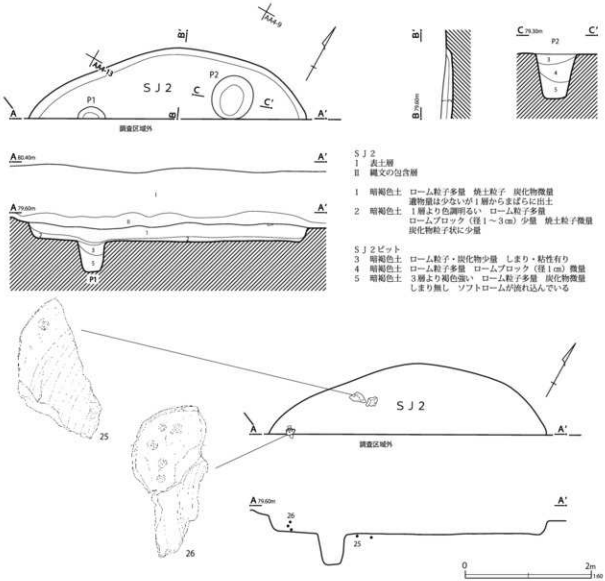
住居跡は壁溝がないことから勝坂式新段階の可能性があるが、覆土から連弧文土器等が出土しており、隅丸長方形状の形態を考慮すると、加曽利ＥⅡ式段階の可能性が高い。

遺物は土器類と石器類、土器片を利用した土製円盤が出土した。

出土土器は第22図１～21である。１～５は押引文や刻みを施すなどの勝坂式土器である。１は２本隆帯を合わせた橋状把手が付く口縁部破片で、把手部と口縁部に角頭状工具の押引文で楕円区画を施す。２～４は平行角押文を施文する土器群で、３は鋸歯状角押文、４は２列の角状押引文を隆帯の渦巻文脇に施文する。４は雲母を含む阿玉台式系の土器である。５は胴部区画隆帯上に刻みを施している。８は単節ＲＬを横位施文する勝坂式の縄文施文土器である。

６、７、９～21は加曽利Ｅ式土器である。６は単節ＲＬ地文上に、９は撚糸文Ｌ地文上にそれぞれ隆帯で文様を施している。７は単節ＲＬ地文上に蛇行沈線を垂下し、10～13は撚糸文Ｌを地文とする。10は２本沈線の懸垂文を、12は隆帯を垂下施文する。14～16、19、20は地文に条線文を施文するもので、14は蛇行隆帯を垂下させ、19は並行沈線で連弧文を描いている。

21は頸部に小波状隆帯を巡らす曽利式系土器



第21図　第2号住居跡・遺物出土状況

第4表　第2号住居跡柱穴計測表（第21図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	44.0	42.0	P 2	71.0	70.0

第5表　第2号住居跡出土石器観察表（第22図）

番号	器　種	分類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
22 － 23	スクレイパー	Ⅱ1②ア	ホルンフェルス	5.6	[5.3]	1.8	48.0	
－ 24	打製石斧	Ⅲ2②イ	頁岩	[6.8]	[3.5]	1.1	24.3	
－ 25	石皿	Ⅲ2②イ	緑泥片岩	[22.2]	[13.3]	4.7	1221.8	
－ 26	石皿	Ⅲ2②イ	緑泥片岩	[24.1]	[12.0]	[2.4]	464.5	

で、胴部に単節ＲＬを施文する。17は外反する無文の口縁部で、18は無文の胴部破片である。

22は底部破片を利用した、大形の土製円盤である。縁辺である剥離面を部分的に研磨する。

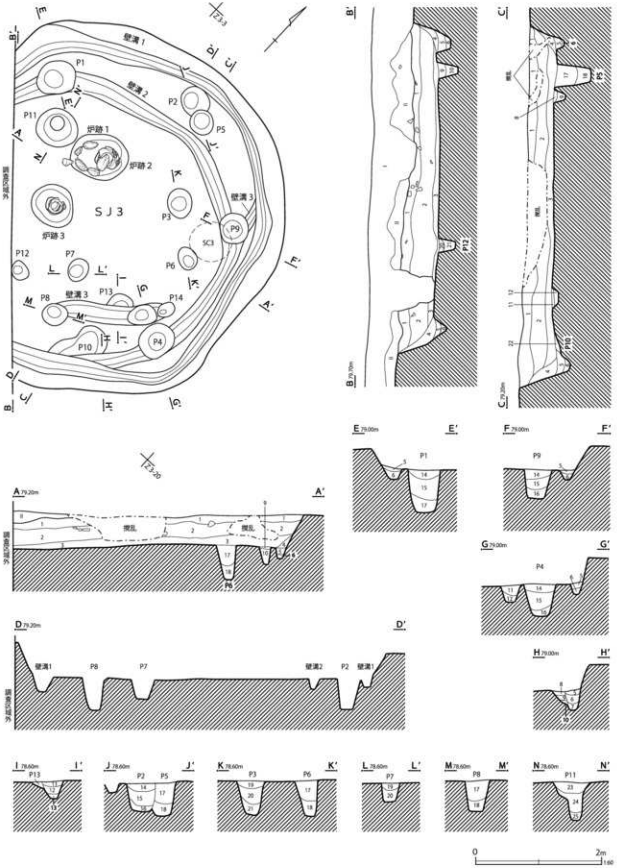
石器類は23～26である。

23は大形剥片の縁辺部を利用したスクレイパーである。24は短冊形の打製石斧であり、25、26は緑泥片岩製の石皿で、凹痕を有する。

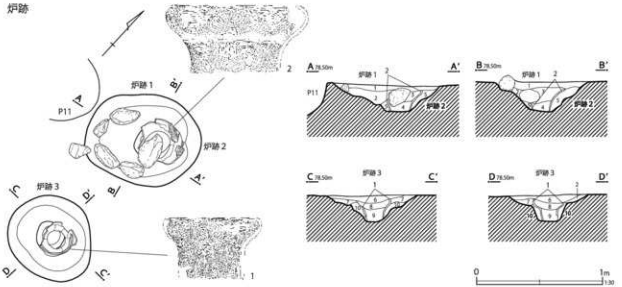
第3号住居跡（第23～32図）

Ｚ－３区に位置する。住居跡南西側の壁付近約５分の１が調査区域外に当たる（第23図）。

第22図　第２号住居跡出土遺物



第23図　第３号住居跡（1）



ＳＪ３
Ⅰ　表土
Ⅱ　縄文の包含層

1　暗褐色土　ローム粒子少量　焼土粒子・炭化物微量　黒色が強い
　　遺物１層から２層上層にかけて多量に出土する
2　暗褐色土　ローム粒子多量　ローム粒子は１mm程度の物が微量含まれる
　　焼土粒子微量　炭化物粒子状に少量
　　遺物１層から２層上層にかけて多量に出土する
3　暗褐色土　ローム粒子多量　ソフトローム が混入し色調明るい
　　ロームブロック（径１～２cm）・焼土粒子微量
　　炭化物粒子状に少量
4　褐色土　ローム粒子少量
　　ソフトローム が多量に混入するため色調は黄褐色土に近い
5　暗褐色土　ローム粒子多量　ロームブロック（径１～２cm）少量
　　炭化物微量（壁溝１）
6　褐色土　ローム粒子・ロームブロック・ソフトローム多量（壁溝１）
7　にぶい黄褐色土　ソフトローム主体（壁溝１）
8　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロック（径１～３cm）多量
　　壁溝１を補強するための埋土（壁溝２）
9　暗褐色土　ローム粒子・炭化物少量（壁溝２）
10　暗褐色土　ローム粒子多量　ロームブロック（径１～３cm）少量
　　ソフトローム多量（壁溝２）
11　暗褐色土　ローム粒子多量　ロームブロック（径１cm）微量
　　炭化物少量（壁溝３）
12　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロック（径１～２cm）多量
　　炭化物微量（壁溝３）
13　にぶい黄褐色土　ソフトローム主体

ＳＪ３ピット
14　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量
15　暗褐色土　ローム粒子多量　ロームブロック（径１～２ cm）微量でまばら
　　炭化物少量
16　暗褐色土　ローム粒子多量　ロームブロック（径１cm）少量
　　ソフトローム多量　炭化物微量
17　暗褐色土　ローム粒子多量（14層よりも多い）　炭化物少量
18　暗褐色土　ローム粒子・ソフトローム多量　炭化物微量
19　暗褐色土　ローム粒子多量　ロームブロック（径１～５cm）・炭化物少量
20　暗褐色土　ローム粒子密に多量　炭化物微量
21　暗褐色土　ローム粒子・ソフトローム多量
22　暗褐色土　ローム粒子多量　ロームブロック（径１～２cm）少量　炭化物微量
23　暗褐色土　ローム粒子多量
　　ロームブロック（径１cm）が中層に少量分布する炭化物微量
24　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量　23層より黒色強い
25　暗褐色土　ローム粒子多量　ロームブロック（径１cm）少量
　　ソフトローム多量

ＳＪ３炉跡１・２・３
1　暗褐色土　ローム粒子少量　焼土粒子微量　炭化物少量
2　暗褐色土　ローム粒子少量
3　暗褐色土　ローム粒子多量　焼土粒子・炭化物少量
4　暗褐色土　ローム粒子多量　ロームブロック（径１～２cm）・焼土粒子少量
　　焼土ブロック微量　炭化物少量
5　暗褐色土　ローム粒子多量　ロームブロック（径１cm）・焼土粒子微量
　　炭化物少量　炉体土器が埋められた際の土
6　暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量　床面の貼床
7　暗褐色土　ローム粒子多量
　　ロームブロック（径１～２cm）・焼土粒子・炭化物少量
8　暗褐色土　ローム粒子少量　ロームブロック・焼土粒子微量　炭化物少量
9　暗褐色土　ローム粒子多量　焼土粒子・炭化物微量
10　暗褐色土　ローム粒子多量　焼土粒子・炭化物少量
　　炉体を埋設した穴に入り込んだ土

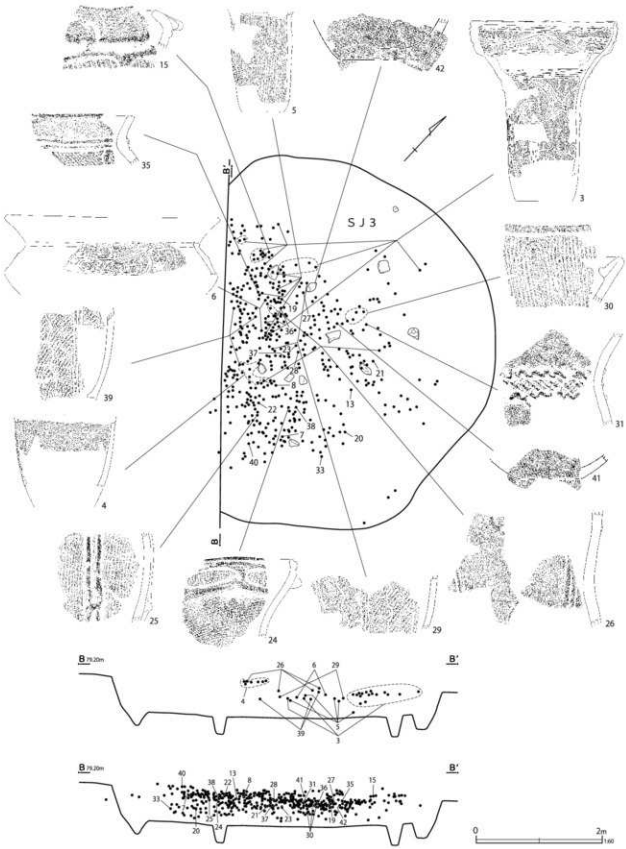
第24図　第３号住居跡（２）

第６表　第３号住居跡柱穴計測表（第23図）

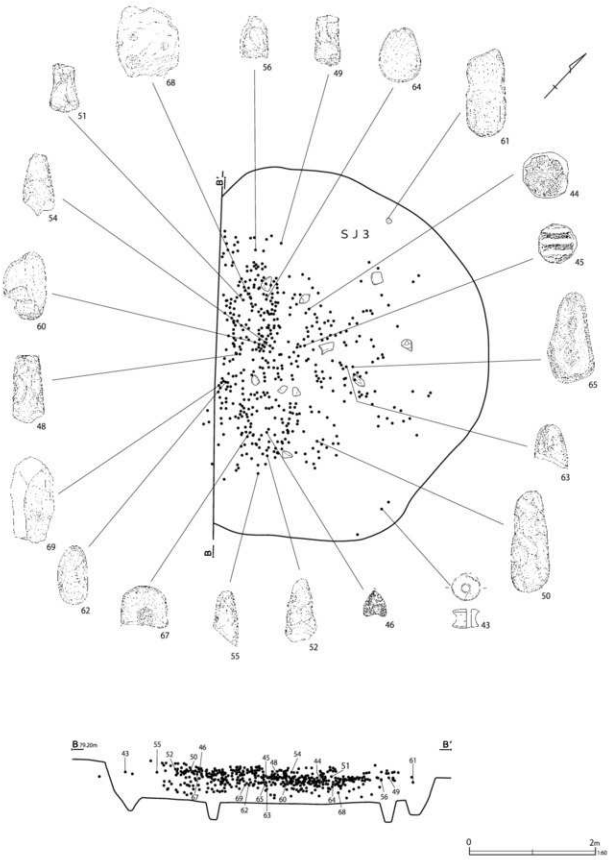
ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P１	65.0	67.0	P２	48.0	45.0	P３	47.0	53.0	P４	58.0	51.0	P５	41.0	55.0
P６	38.0	54.0	P７	38.0	29.0	P８	41.0	48.0	P９	48.0	46.0	P10	[54.0]	10.0
P11	65.0	60.0	P12	30.0	25.0	P13	41.0	10.0	P14	29.0	30.0			

床面に壁溝が３本確認されたことから、２回の建て替えが行われたものと推定され、住居跡の最終平面プランは楕円形に近い不整円形であるが、柱穴の配置からやや角張る六角形になる可能性もある。長径5.80m、現存の短径4.50m、深さ0.52mを測る。炉の位置から推定すると、主軸が北西方向の時期と、北方向の時期があるものと想定される。

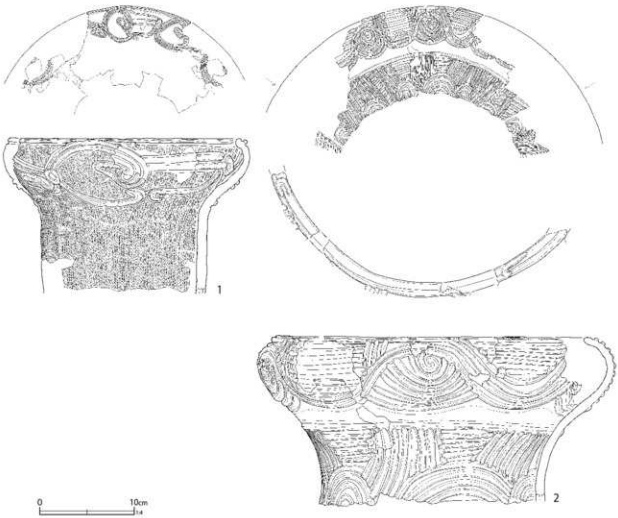
壁溝は重複しながら３本が確認され、壁溝１が一番新しく、一番大きい住居跡外形を形成している。壁溝３は壁溝１と重複しながらやや内側を巡



第25図　第３号住居跡遺物出土状況（１）



第26図　第３号住居跡遺物出土状況（２）



第27図　第３号住居跡出土遺物（１）

り、２番目に新しい。壁溝２は最も内側に巡るもので、一番古く構築されたものである。床面は確認面からの掘り込みが52cmと深く、壁は床面からやや開きながら立ち上がっている。

炉は中央部とやや北寄りに３基が確認された（第24図）。炉１は石囲炉で住居跡中央部やや北西寄り位置し、炉２の埋甕炉を壊して、その上に構築されていた。炉１の範囲が北側にやや広いのは、その下部にあった炉２の埋甕炉の範囲も含まれているからである。炉３は炉１の南側に単独で検出されており、埋甕炉である。

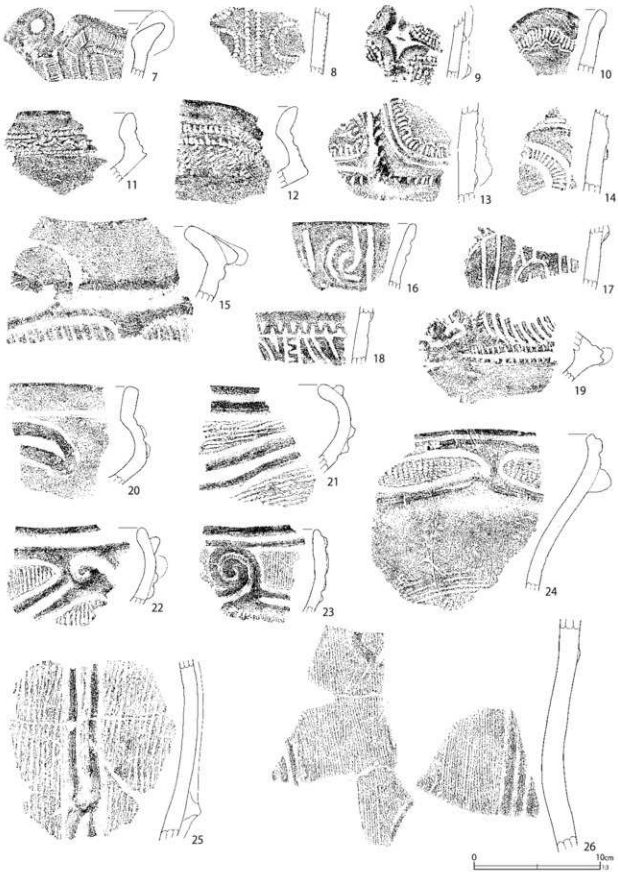
柱穴は14基で、深さはＰ１＝67cm、Ｐ２＝45cm、Ｐ３＝53cm、Ｐ４＝51cm、Ｐ５＝55cm、Ｐ６＝54cm、Ｐ７＝29cm、Ｐ８＝48cm、Ｐ９＝46cm、Ｐ10＝10cm、Ｐ11＝60cm、Ｐ12＝25cm、Ｐ13＝10cm、Ｐ14＝30cmを測る。

炉と壁溝や柱穴との関係をまとめると、Ⅰ期の古段階は炉３、壁溝２、Ｐ３、Ｐ８、Ｐ11が組み加曽利ＥⅠ式古段階、Ⅱ期の中段階は炉２、壁溝３、Ｐ５、Ｐ６、Ｐ７、Ｐ１の一部が組み加曽利ＥⅠ式後半段階、Ⅲ期の新段階は炉１、壁溝１、Ｐ１、Ｐ２、Ｐ４、Ｐ９が組み加曽利ＥⅡ式古段階の時期に比定されよう。

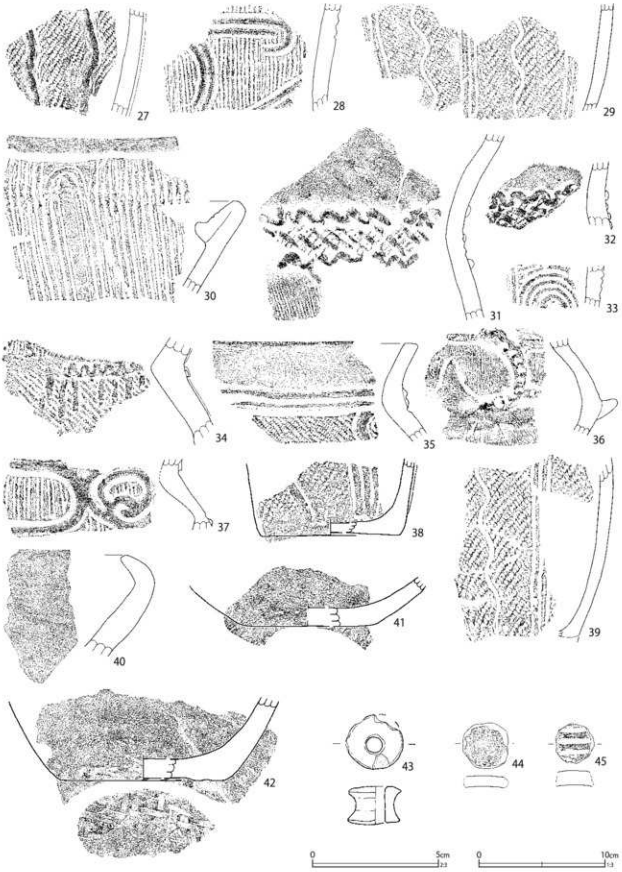
住居跡は炉体土器や出土土器から、Ⅰ期からⅢ期の加曽利ＥⅠ式からⅡ式にかけての変遷を経ているものと判断される。

遺物は土器片類、石器類、土製円盤、土製耳飾りが出土した（第27～32図）。

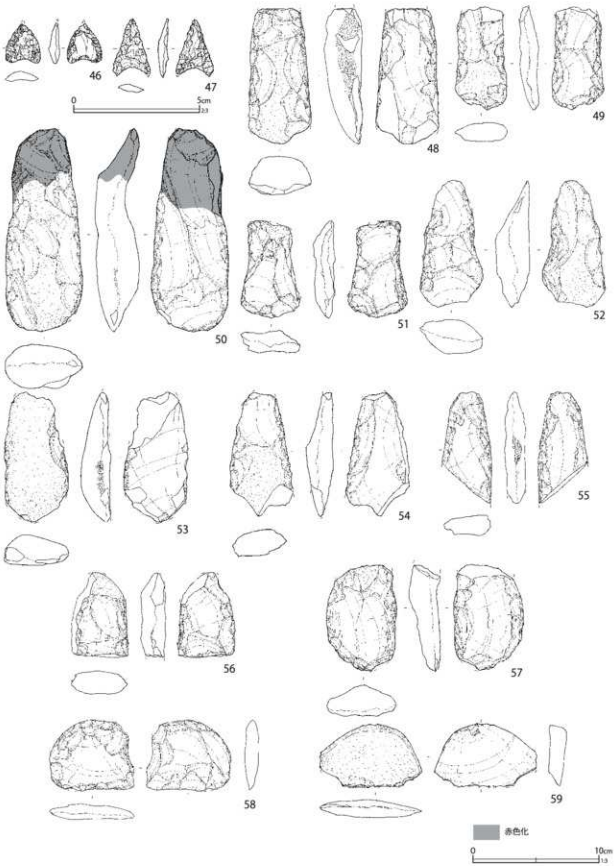
第28図　第３号住居跡出土遺物（２）



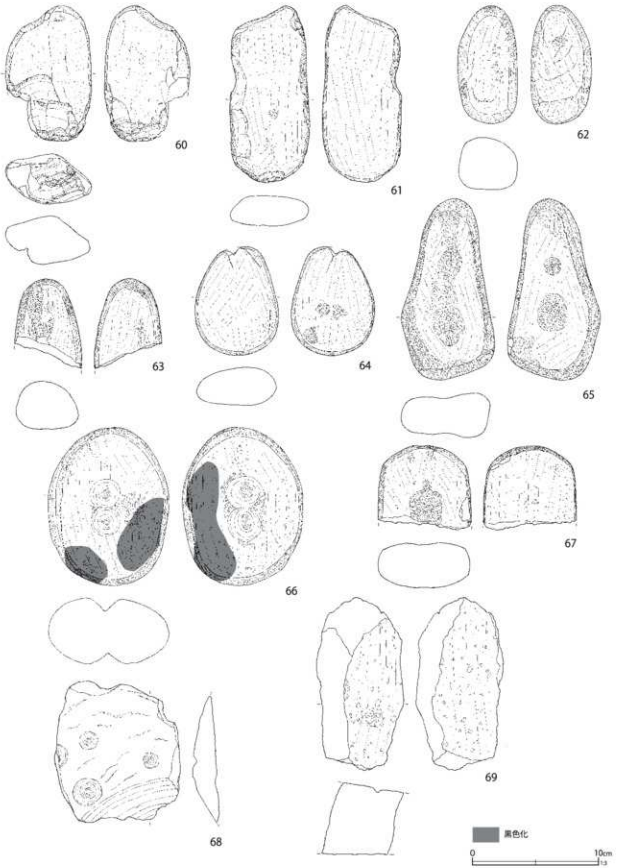
第29図　第３号住居跡出土遺物（３）



第30図　第３号住居跡出土遺物（４）



第31図　第３号住居跡出土遺物（５）



第32図　第３号住居跡出土遺物（６）

第７表　第３号住居跡出土復元土器観察表（第27・28図）

番号	器 高(cm)	口 径(cm)	最大径(cm)	底 径(cm)	備 考
27-1	[16.1]	(25.4)	－	－	50%
2	[17.5]	(33.8)	38.0	－	40%
3	[33.1]	(30.4)	(31.2)	－	60%

番号	器 高(cm)	口 径(cm)	最大径(cm)	底 径(cm)	備 考
28-4	[14.2]	－	[21.4]	－	30%
5	[21.0]	－	(12.8)	－	40%
6	[7.2]	－	[44.6]	－	30%

第８表　第３号住居跡出土石器観察表（第31・32図）

番号	器 種	分類	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備 考
31 － 46	石鏃	Ⅰ2①	黒曜石	1.6	1.4	0.4	0.6	
－ 47	石鏃	Ⅰ2①	チャート	2.3	1.5	0.4	0.9	
－ 48	打製石斧	Ⅲ2②ア	砂岩	[10.8]	5.0	3.1	199.2	
－ 49	打製石斧	Ⅲ2②イ	砂岩	[8.2]	4.1	1.5	56.8	
－ 50	打製石斧	Ⅲ2①ア	砂岩	16.1	6.1	3.5	358.9	表裏面一部赤色化
－ 51	打製石斧	Ⅲ2②イ	ホルンフェルス	7.7	[4.7]	1.8	61.6	
－ 52	打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	10.1	5.0	2.7	115.8	
－ 53	打製石斧	Ⅲ2②イ	砂岩	[10.3]	5.1	2.4	135.8	
－ 54	打製石斧	Ⅲ2②イ	ホルンフェルス	[9.8]	[5.0]	2.2	102.6	
－ 55	打製石斧	Ⅲ2②イ	砂岩	[8.8]	4.0	1.7	64.3	
－ 56	打製石斧	Ⅴ②イ	頁岩	[6.7]	[4.5]	2.0	88.6	
－ 57	打製石斧	Ⅱ2②イ	ホルンフェルス	[8.4]	5.5	2.5	119.1	
－ 58	スクレイパー	Ⅱ1①イ	ホルンフェルス	5.6	6.7	1.3	55.6	
－ 59	スクレイパー	Ⅱ1②ア	砂岩	[5.0]	8.1	1.4	65.1	
32 － 60	礫器	②ア	チャート	[10.8]	6.8	4.0	350.6	
－ 61	敲石	Ⅱ1-3①イ	閃緑岩	14.0	6.3	2.7	382.7	
－ 62	敲石	Ⅱ1-3①ア	閃緑岩	9.4	4.8	4.3	326.2	
－ 63	磨石	Ⅱ1-3②イ	砂岩	[7.1]	[5.3]	[3.8]	154.6	
－ 64	磨石	Ⅱ1-3①ア	砂岩	8.6	6.6	3.2	251.6	
－ 65	磨石	Ⅳ1-2-3①イ	砂岩	14.3	7.4	3.8	513.3	
－ 66	凹石	Ⅱ1-2-3①ア	安山岩	12.5	9.6	5.3	741.8	表裏面一部黒色化
－ 67	磨石	Ⅱ1-3②ア	閃緑岩	[6.6]	[7.4]	3.7	283.5	
－ 68	石皿	Ⅳ②ア	緑泥片岩	[11.2]	[10.0]	[2.6]	348.1	
－ 69	石皿	Ⅳ②ア	安山岩	[13.7]	[6.9]	[5.8]	696.8	

１は炉３の埋設土器である。内湾する口縁部が大きく開き、円筒形の胴部へ平行する深鉢形土器である。撚糸文Ｒを地文とし、口縁部に２本隆帯で渦巻文を連結するモチーフを描き、渦巻文の先端が丸味を帯びた剣先状を呈する。モチーフの連結部には隆帯の円形文を貼付する。加曽利ＥⅠ式前半段階に位置付けられよう。

２は内湾する口縁部が開き、胴部でやや張る器形の深鉢形土器で、複数の隆帯を合わせて波状文や渦巻文を描く曽利式系の土器である。口縁部は褶曲状の波状文を描き、波頂部下には渦巻文を囲む重弧文を構成する。胴部は不明瞭であるが、横連結の渦巻文を、頸部区画からの隆帯で垂下する構成と思われる。

３は覆土出土で、器形復元できる土器である。頸部無文帯を有するキャリパー形土器で、口縁部文様帯に２本隆帯の渦巻文を緩い弧状に施文し、口縁部下端区画との間に楕円枠状文を区画する。胴部には２本隆帯で渦巻文を横位連結するモチーフを描く。地文は口縁部及び胴部とも単節ＲＬ縄文の縦位施文である。

４は深鉢形土器の胴部で、撚糸文Ｌ地文上に３本沈線の連弧文を施文する。連弧文の端部が垂れ下がり、懸垂文状を呈している。

５はほぼ筒形状を呈する深鉢の胴部で、地文は撚糸文Ｌである。

６は胴部が屈曲する浅鉢で、頸部文様帯に２本隆帯の先端が渦を巻くモチーフを描き、一部剣先

状を呈する。地文は単節ＲＬの縦位施文である。

７～20は流れ込みの勝坂式系土器で、７～12は角押文、三角押文、キャタピラ文などを施文する古段階から中段階の各器種の土器群である。13～20は新段階から終末段階の土器群で、13は沈線脇に蓮華文を施文する。沈線文のみで施文する15～19は終末段階であろう。

21～29は加曽利Ｅ式系の土器群で、21～24はキャリパー形の深鉢の口縁部破片である。21、22は撚糸文地文上に隆帯の渦巻文を施文するもので、24は突起状に突出する渦巻文と沈線の区画文を組み合わせる構成で、口縁部と胴部の地文に単節ＲＬを施文する。23は口縁部の地文が条線である。25～29、38、39はキャリパー形土器の胴部から底部の破片で、25、28が撚糸地文、27、29、38、39は縄文地文、26は条線地文である。いずれも隆帯や沈線の懸垂文を垂下するが、28は重ね平行３本沈線で曲線文を描いており、大木式系の要素が見られ、21とともに加曽利ＥⅠ式古段階に位置付けられよう。他の大半は加曽利ＥⅡ式古段階のものと思われる。

30～34は曽利式系の土器群で、30は沈線重弧文が直線化している。31、32、34は頸部に蛇行隆帯と斜格子目文を組み合わせた籠目文土器である。33は沈線の重円文を施文する深鉢の胴部破片である。

35～37は胴部が屈曲する浅鉢で、頸部に文様帯を有するものである。36は区画隆帯上に円形刺突文を施す。40は口縁部が内折する無文の浅鉢の口縁部で、41、42は底部破片である。42は底面に網代痕が残る。

43は土製の耳飾りである。一部欠損するが、鼓形の形状を呈する。

44、45は土器片を利用した土製円盤である。

出土石器は46～69である。46、47は石鏃である。48～57は打製石斧で、48～50、52は短冊形、53～58は撥形である。58､59は扁平な剥片のエッジに加工を加えたスクレイパーである。60、61は敲石、62～67は磨石で、66、67は深い凹痕を有する。68は凹石、69は石皿である。

第４号住居跡（第33～38図）

Ｙ－３・４区に位置する。住居内の東壁際で、中・近世の第５号土壙と重複する（第33図）。

住居跡の平面プランは径5.8m、深さ0.23mの円形で、中央部北西寄りに炉が存在する。

柱穴は17基で、深さはＰ１＝70㎝、Ｐ２＝85㎝、Ｐ３＝72㎝、Ｐ４＝67㎝、Ｐ５＝68㎝、Ｐ６＝64㎝、Ｐ７＝37㎝、Ｐ８＝26㎝、Ｐ９＝52㎝、Ｐ10＝20㎝、Ｐ11＝48㎝、Ｐ12＝60㎝、Ｐ13＝62㎝、Ｐ14＝22㎝、Ｐ15＝61㎝、Ｐ16＝72㎝、Ｐ17＝50㎝を測る。６本主柱の住居構造と思われ、Ｐ１～Ｐ６を基本として、それぞれ近くのピットと組みながら、１回以上の建て替えを行っているものと推定される。壁溝は存在しない。

炉は２回の構築が確認された。新しい炉は埋甕炉で、第36図１が埋設されていた。古い炉は炉床のみ確認された。

埋甕は南壁中央部付近に２基確認され、埋甕１が埋甕２を壊して埋設されていた。

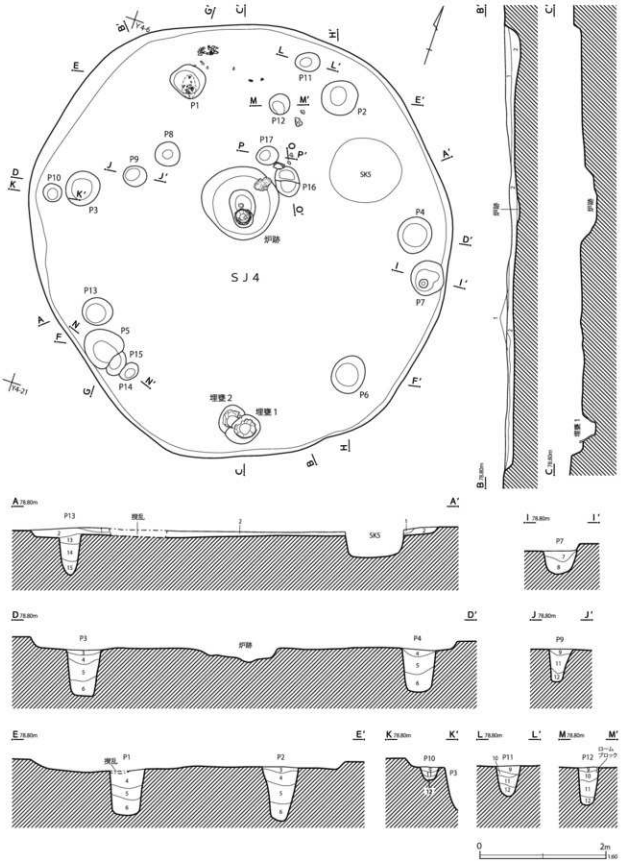
炉と埋甕がそれぞれ２回にわたって構築されていることから、本住居跡は少なくとも１回以上の建て替えが行われたものと判断される。

炉体土器及び埋甕から判断して、本住居跡は加曽利ＥⅡ式期の所産と判断される。

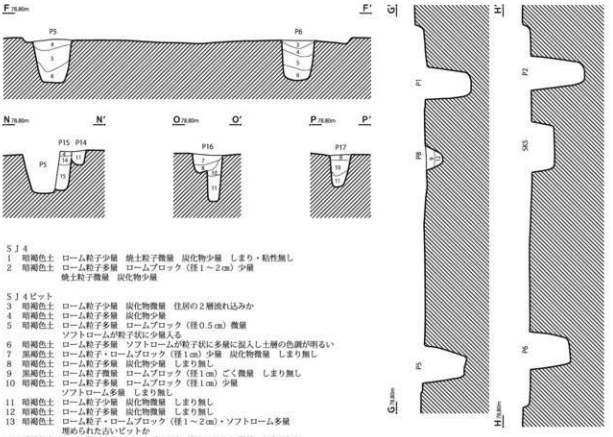
遺物は土器群と石器が出土した（第36～38図）。

１は新しい炉の埋設土器である。頸部が大きく括れるキャリパー形土器で、口縁部文様帯に２本隆帯による繋弧文状の渦巻文を７単位に施文する。渦巻文は両端で左右逆巻きする渦巻文を表裏の２単位に配し、それぞれの間に右巻きの渦巻文を２単位と１単位に配する構成となっている。口縁部の弧状区画文内には、縦位の集合沈線を施文する。

２は新しい埋甕である埋甕１で、加曽利ＥⅡ

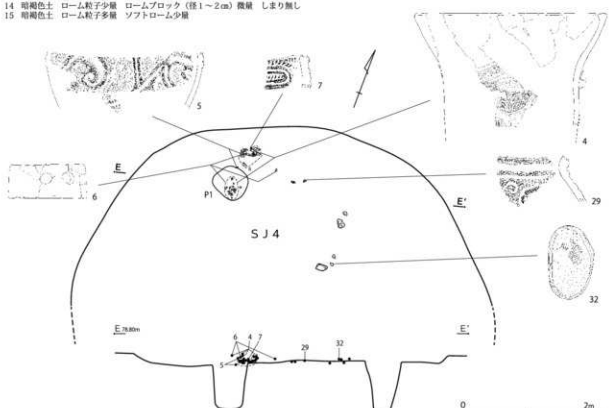


第33図　第４号住居跡（１）



ＳＪ４
1　暗褐色土　ローム粒子少量　焼土粒子微量　炭化物少量　しまり・粘性無し
2　暗褐色土　ローム粒子多量　ロームブロック（径１～２cm）少量
　　焼土粒子微量　炭化物少量

ＳＪ４ピット
3　暗褐色土　ローム粒子少量　炭化物微量　住居の２層流れ込みか
4　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量
5　暗褐色土　ローム粒子多量　ロームブロック（径0.5cm）微量
　　ソフトロームが粒子状に少量入る
6　暗褐色土　ローム粒子多量　ソフトロームが粒子状に多量に混入し土層の色調が明るい
7　黒褐色土　ローム粒子・ロームブロック（径１cm）少量　炭化物微量　しまり無し
8　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量　しまり無し
9　黒褐色土　ローム粒子微量　ロームブロック（径１cm）ごく微量　しまり無し
10　暗褐色土　ローム粒子多量　ロームブロック（径１cm）少量
　　ソフトローム多量　しまり無し
11　暗褐色土　ローム粒子少量　炭化物微量　しまり無し
12　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物微量　しまり無し
13　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロック（径１～２cm）・ソフトローム多量
　　埋められた古いピットか
14　暗褐色土　ローム粒子少量　ロームブロック（径１～２cm）微量　しまり無し
15　暗褐色土　ローム粒子多量　ソフトローム少量



第34図　第４号住居跡出土遺物状況

第9表　第4号住居跡柱穴計測表（第33・34図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	55.0	70.0	P 2	59.0	85.0	P 3	57.0	72.0	P 4	59.0	67.0	P 5	60.0	68.0
P 6	61.0	64.0	P 7	55.0	37.0	P 8	39.0	26.0	P 9	38.0	52.0	P 10	30.0	20.0
P 11	38.0	48.0	P 12	32.0	60.0	P 13	48.0	62.0	P 14	32.0	22.0	P 15	41.0	61.0
P 16	49.0	72.0	P 17	35.0	50.0									

第10表　第4号住居跡出土復元土器観察表（第36・37図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
36-1	-	22.2	25.3	-	40%
2	[21.5]	(36.2)	(36.8)	-	40%
3	[23.6]	(29.0)	(35.2)	-	40%
37-4	[30.0]	(50.0)	(51.0)	-	30%
5	[14.8]	-	(41.2)	-	20%
6	[9.1]	-	(20.6)	(20.4)	20%

第11表　第4号住居跡出土石器観察表（第38図）

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
38 - 30	打製石斧	Ⅲ1②イ	ホルンフェルス	8.9	[4.6]	1.6	70.0	
- 31	打製石斧	Ⅴ②イ	砂岩	[5.5]	5.7	1.7	66.1	
- 32	磨石	Ⅱ1-3①イ	ホルンフェルス	11.6	7.2	4.9	593.7	

式キャリパー形の口縁部文様帯と胴部文様帯の2帯構成の深鉢形土器で、口縁部は緩い波状を呈し、底部を欠いている。口縁部に楕円区画文を中心として上下から巻き込む渦巻文を配し、地文に単節ＲＬ縄文を施文する。胴部には3本単位の沈線懸垂文を垂下する。

3は古い埋甕である埋甕2で、地文縦位の条線文上に、口縁部では鞏弧渦巻文が配される。胴部には渦巻文下に蛇行隆帯懸垂文、その間に2本組の隆帯懸垂文が規則正しく配置されている。胴部以下を欠く。

4は破片からの復元で詳細は不明であるが、頸部で括れ、無文の口縁部が開く曽利式系の深鉢形土器である。頸部と胴部の境に橋状の把手が付くものと思われる。地文は撚糸文Ｌである。

5は4と同様に胴部が張る器形で、2本隆帯による渦巻文を横位連結するモチーフを描く。地文は撚糸文である。

6はいわゆる台形土器で、台上部と脚部の一部が現存する。

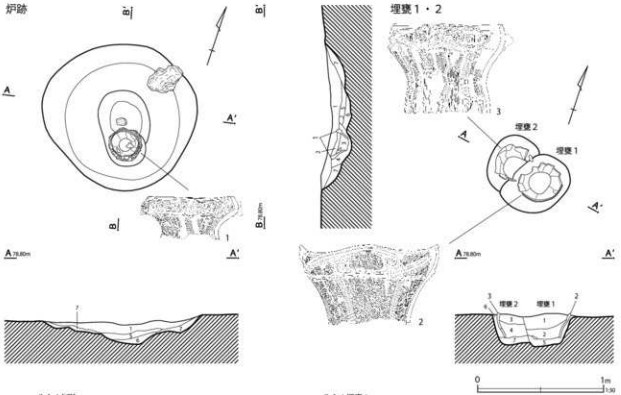
7、8は勝坂式土器の浅鉢の破片で、7は頸部文様帯に当たる。沈線の楕円区画内に単沈線を充填施文する。区画隆帯上には刻みを施す。8は無文の口縁部で、良く磨かれている。口唇部は内側に突出している。

9～16は加曽利E式系土器で、9はキャリパー形深鉢土器の口縁部、11～16は胴部破片である。9は口縁部の横位撚糸文Ｌ地文上に、2本隆帯で渦巻文を連結するものと思われるが、2本隆帯の中央部に刻み状の押圧を施して棘状の屈曲部を作り出している。10は胴部が屈曲する浅鉢の頸部文様帯部分である。11、12、16は地文が撚糸文、10は単節ＲＬの縦位施文、13～15は条線文である。9は加曽利EⅠ式、他は加曽利EⅡ式になろうか。

17～22は連弧文土器で、17～19は口縁部破片である。17、18は口縁部の平行沈線区画文内に交互刺突文を施す。19は口縁部に沈線で弧状の枠状文を描いている。地文は17、22が条線文、18～21が撚糸文である。20、21は3本沈線で連弧文を描いている。

23～26は曽利式系の土器群で、23、24は沈線の重弧文系土器で、23は口唇部が内折し、文様帯となる。26は頸部で括れ、胴部で張る器形である。

27～29は加曽利EⅢ式土器で、27、28は胴部に磨消懸垂文を垂下する。29は屈曲する浅鉢の頸部の文様帯である。



ＳＪ４炉跡
1　暗褐色土　ローム粒子多量　焼土粒子少量　炭化物微量
2　暗褐色土　ローム粒子多量　焼土粒子・炭化物微量
3　暗褐色土　ローム粒子多量　ロームブロック（径２cm）微量
　　焼土粒子少量　炭化物微量
4　暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子多量
　　焼土ブロック（径１cm）少量　炭化物微量（掘り方）
5　暗褐色土　ローム粒子多量　ロームブロック（径１cm）微量
　　焼土粒子多量　焼土ブロック（径0.5cm）・炭化物少量
6　黄褐色土　ローム粒子・ロームブロック多量
7　暗褐色土　ロームブロック多量　焼土ブロック少量
※　２～４層：埋設土器内土層

ＳＪ４埋甕１
1　暗褐色土　ローム粒子少量　炭化物微量
2　暗褐色土　ローム粒子多量　ロームブロック（径１cm）微量
　　炭化物少量

ＳＪ４埋甕２
3　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロック（径１～２cm）少量
　　炭化物微量
4　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量
5　暗褐色土　ローム粒子多量　ロームブロック（径１cm）少量
6　暗褐色土　ローム粒子多量　ロームブロック（径１cm）微量
　　硬くしまる
7　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロック（径１～２cm）多量

第35図　第４号住居跡（２）

石器は30～32が出土した。30､31は打製石斧で、30は正面左側縁が一部欠損する。右側縁には大きな抉り状の調整が施されている。31は基部と刃部を欠く短冊形の打製石斧である。

32は楕円形の磨石で、正面及び裏面に敲打による浅い凹痕が残る。

第５号住居跡（第39～43図）

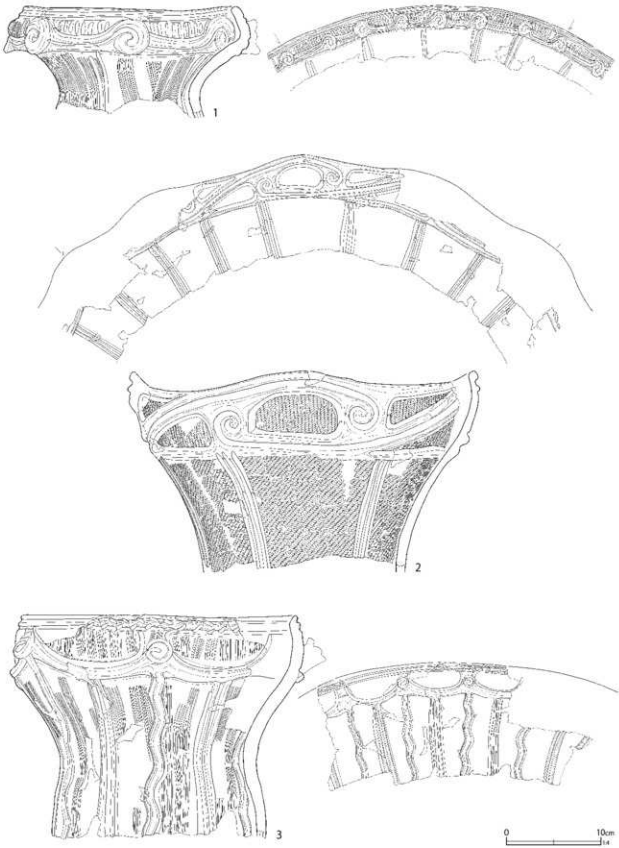
Ｗ・Ｘ－４区に位置する。床面まで削平されていたが、炉と埋甕がかろうじて現存していた。炉の西側で中・近世の地下式坑である第７号土壙と重複する（第39図）。

住居跡の平面プランは円形を呈するものと思われるが、南壁一部を残すのみで、他は撹乱を受けているため全貌を把握し得ない。

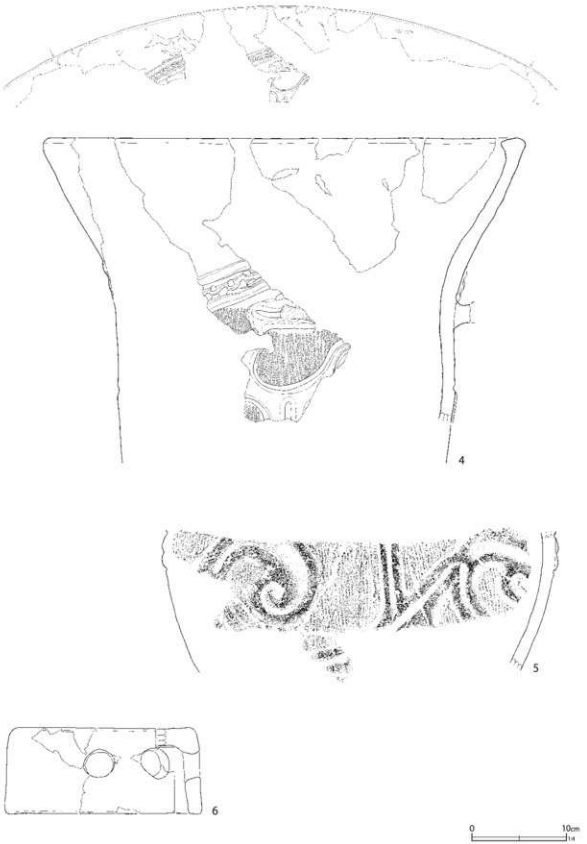
ほぼ中央部に炉が存在するものと思われ、柱穴は９基検出され、ほぼ円形に巡るものと思われる。柱穴の深さはＰ１＝52cm、Ｐ２＝52cm、Ｐ３＝68cm、Ｐ４＝41cm、Ｐ５＝53cm、Ｐ６＝65cm、Ｐ７＝58cm、Ｐ８＝62cmを測る。壁溝は存在しない。

炉は径１ｍ程の円形で、中央部に第40図１の炉体土器が埋設されていた。また、炉の周りには第42図32や第43図33の石皿が並べられた状態で出土した。埋甕が２基存在することから、石囲炉と埋甕炉の２回の構築があった可能性がある。

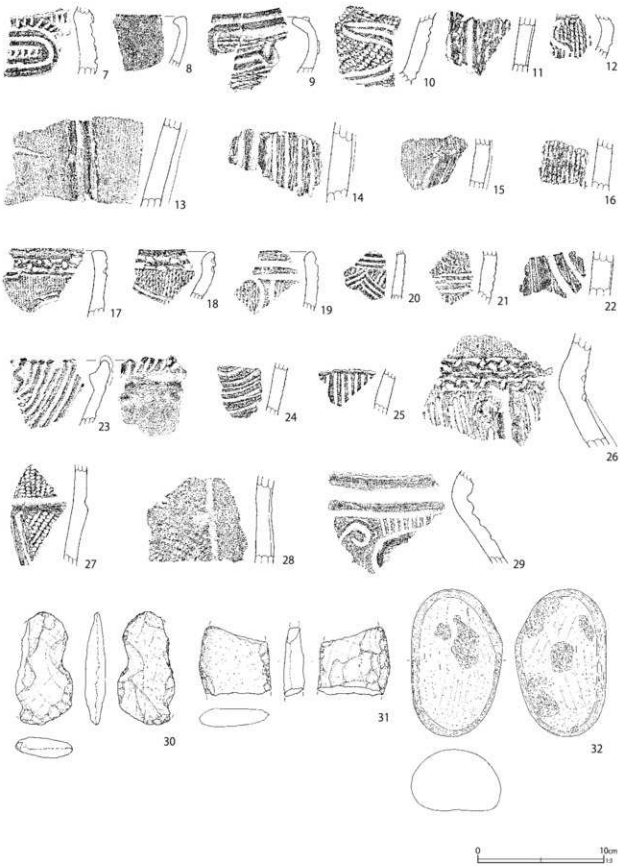
埋甕は２基設置されていた。埋甕１、埋甕２はＰ６、Ｐ７を挟んで対峙する形で設置されているため、両者の新旧関係は不明である。



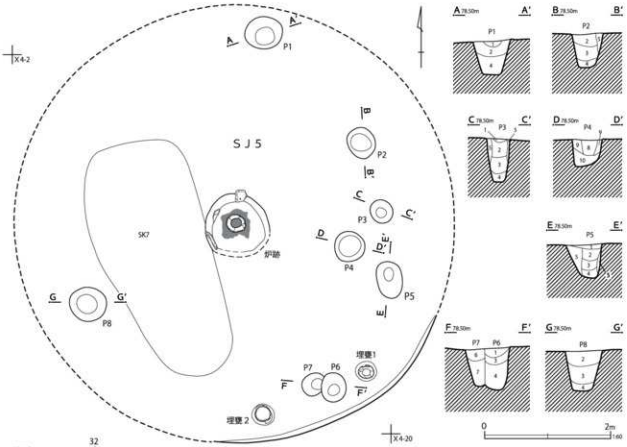
第36図　第４号住居跡出土遺物（１）

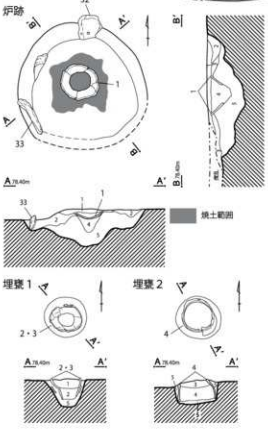


第37図　第4号住居跡出土遺物（2）



第38図　第４号住居跡出土遺物（３）





SJ5

1　暗褐色土　ローム粒子少量　ロームブロック（径1cm）微量
　　縄目の痕跡がひどく状態は良くない
2　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロック（径1～2cm）多量　壁の崩落土と考えられる

SJ5ピット

1　暗褐色土　ローム粒子少量　炭化物微量
2　暗褐色土　ローム粒子多量　ロームブロック（径1～2cm）少量　炭化物微量
3　褐色土　ローム粒子多量　炭化物微量　ソフトローム含む
4　褐色土　ローム粒子多量　炭化物微量　ソフトローム多量
5　にぶい黄褐色土　ローム主体　ローム粒子多量
6　暗褐色土　ローム粒子・炭化物少量
7　褐色土　ローム粒子・ソフトローム多量
8　黒褐色土　ローム粒子多量　黒色土少量
9　黒褐色土　ローム粒子多量　黒色土とロームが互層に堆積
10　にぶい黄褐色土　ソフトロームとロームブロックで埋められた土

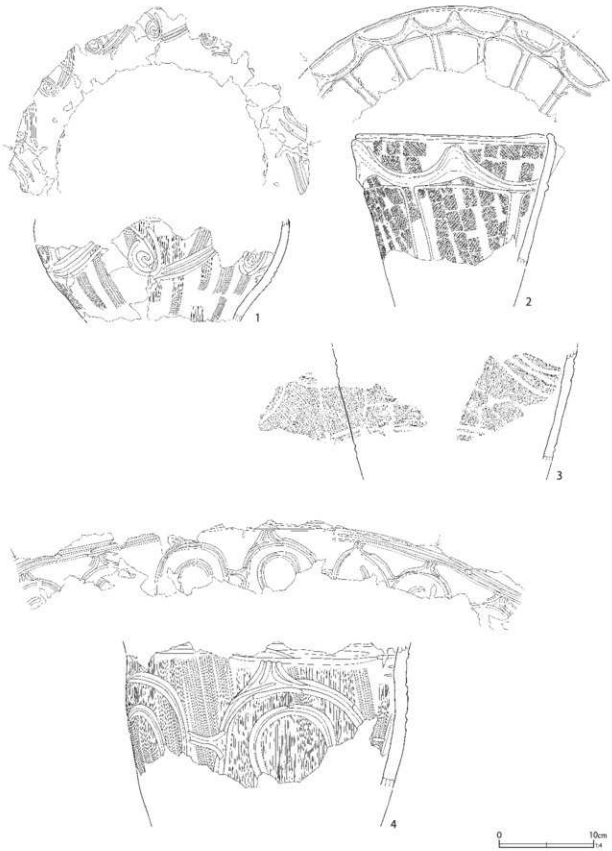
SJ5炉跡

1　暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量
2　暗褐色土　ローム粒子多量　焼土粒子・炭化物少量　炉跡の礫の抜き取り痕か
3　暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子多量　焼土ブロック（径1～2cm）・炭化物少量
4　暗褐色土　焼土粒子・炭化物少量
5　赤褐色土　焼土ブロック主体　間にクラックが入り込む
　　ロームブロックも多量に混入するが同様にクラックが入る

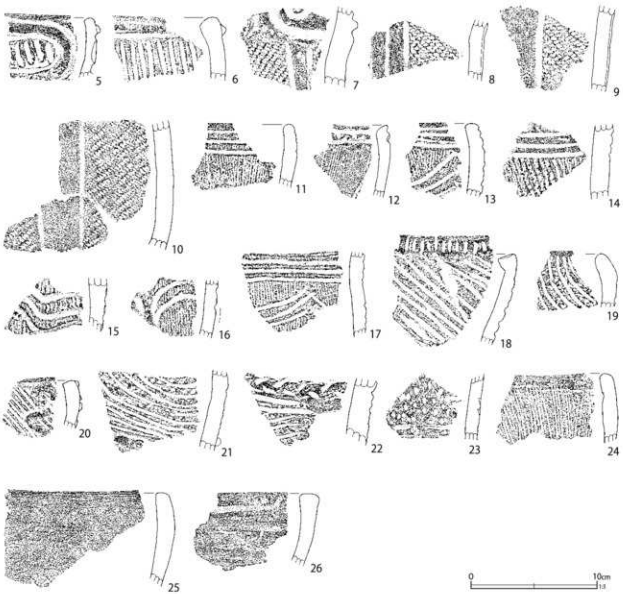
SJ5埋甕

1　褐色土　ローム粒子少量　炭化物微量
2　暗褐色土　ローム粒子・炭化物少量
3　暗褐色土　ローム粒子・炭化物少量
4　暗褐色土　ローム粒子多量　ソフトロームがまだらにブロック状に多量に含む
5　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量　色調明るい
　　埋土　色調明るい　土器を埋設した跡につめた土と考えられる（掘り方）

第39図　第5号住居跡



第40図　第５号住居跡出土遺物（１）



第41図　第５号住居跡出土遺物（２）

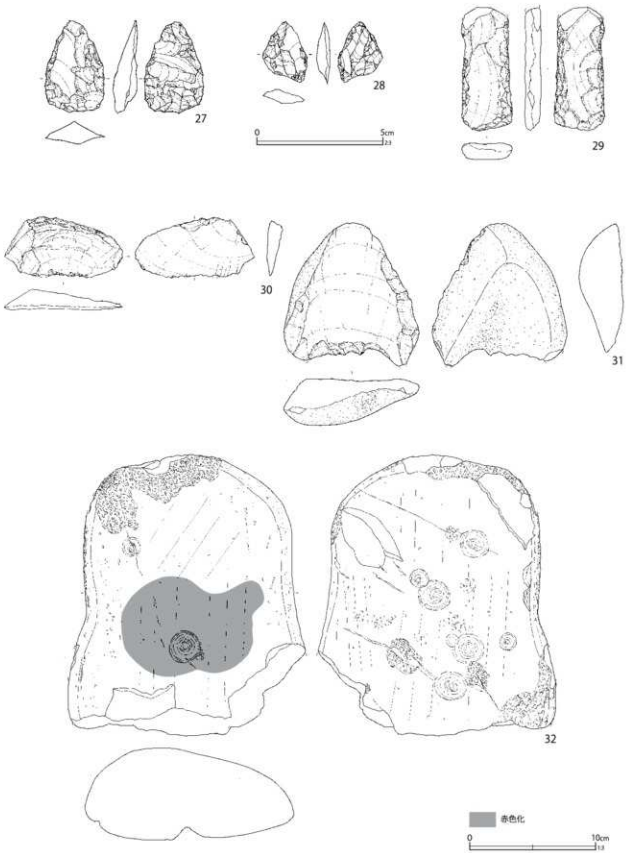
第12表　第５号住居跡柱穴計測表（第39図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
P 1	60.0	52.0	P 2	50.0	52.0	P 3	38.0	68.0	P 4	48.0	41.0	P 5	58.0	53.0
P 6	46.0	65.0	P 7	39.0	58.0	P 8	60.0	62.0						

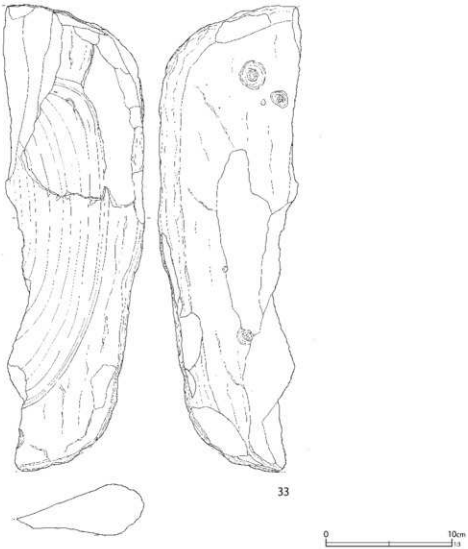
第13表　第５号住居跡出土復元土器観察表（第40図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
40-1	[11.0]	－	(27.0)	－	30%
2	[14.0]	20.0	21.2	－	50%

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
40-3	[11.9]	－	(26.0)	－	20%
4	[15.4]	－	[30.0]	－	30%



第42図　第５号住居跡出土遺物（３）



第43図　第５号住居跡出土遺物（４）

第14表　第５号住居跡出土石器観察表（第42・43図）

番号	器　種	分類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
42 － 27	石鏃	Ⅲ①	チャート	3.7	2.4	1.0	6.1	
－ 28	石鏃	Ⅲ①	チャート	2.4	1.8	0.6	1.8	
－ 29	打製石斧	Ⅱ2②イ	頁岩	[9.8]	4.0	1.3	78.4	
－ 30	スクレイパー	Ⅱ1①ア	ホルンフェルス	4.8	9.4	1.6	58.6	
－ 31	スクレイパー	①ア	砂岩	11.4	10.7	3.8	427.3	
－ 32	石皿	Ⅲ2②ア	砂岩	[22.2]	[18.9]	[8.5]	4590.8	表面一部赤色化
43 － 33	石皿	Ⅱ2②イ	緑泥片岩	[37.0]	[11.2]	[4.4]	2193.3	

炉と埋甕を結ぶ線を主軸に想定すると、埋甕１、埋甕２は30度程振れており、それに伴って柱穴の配置も少しずれることが想定される。しかし、本住居跡においては未検出の柱穴もあり、炉、埋甕、柱穴の新旧関係については明らかにし得ない。

本住居跡は少なくとも１回以上の建て替えがあり、炉体土器及び埋甕から、加曽利ＥⅢ式期の所産であると判断される。

遺物は土器類と石器類が出土している（第40～43図）。

第40図１は炉体土器である。新しい住居に伴うものであり、膨らむ胴上半部に３本沈線の渦巻文を弧状に連結するモチーフを描いている。地文は間隔のまばらな条線文である。被熱による風化が著しい。

２・３は埋甕１として埋設されていた土器で、２の外側を補強するように３が密接して埋設されていた。２は括れの少ない深鉢形土器で、口縁部文様帯に５単位の波頂部のある隆帯で弧を描き、波頂部を突出させている。胴部は曽利式的な枠状の沈線懸垂文を垂下する。沈線懸垂文間は、無文帯となっている。地文は、口縁部から胴部にかけて、口縁部横位１段、以下縦位の単節ＲＬ縄文で、充填施文である。胴下半部を欠く。３は２同様の器形で、胴部を３本沈線で区画し、上半部に３本沈線の連弧文を施文する。地文は条線文である。

４は埋甕２で、胴部の区画部で括れ、膨らむ下半部に２本沈線の渦巻文を横位連結するモチーフを描く。地文は条線文である。胴部のみが現存する。

５、６はキャリパー形土器の口縁部破片で、口縁部の区画文内に縦位の沈線文を施文する。曽利式系の土器である。７～10は加曽利Ｅ式系のキャリパー形土器で、いずれも胴部に磨消懸垂文を施文する。地文は７、10が単節ＲＬ、８、９が複節ＬＲＬを縦位施文する。

11～17は連弧文土器である。14が地文に撚糸文Ｌを施文する以外は、全て条線文である。12は口縁部区画に交互刺突文を施している。連弧文は大半が３本沈線で描いている。18～23は曽利式系の土器で、18～21は頸部で括れる重弧文系の土器である。19、21は沈線が弧線を描き、18、20は斜沈線状を呈する。20は口縁部から蛇行隆帯を垂下させるもので、18にも痕跡が残っている。18は内折して突出する口唇部に、刻み状の沈線を施文する。

石器は石鏃、打製石斧、掻器、石皿が出土した。

27、28は石鏃であるが未成品と思われる。29は短冊形の打製石斧で、基部を欠損する。30、31は大形剥片の縁辺を利用し、調整剥離を施したスクレイパーである。

32、33は石皿で、正面及び裏面に凹痕を有する。33は緑泥片岩製で、中央部が皿状に窪んでいる。縦長の石皿で、約半分が現存する。

第６号住居跡（第44図）

Ｚ－４・５区に位置する。炉床のみが現存する。東側に第７号住居跡の炉跡が、西側に第８号住居跡の炉跡が隣接する。２基の柱穴が第６号住居跡に伴うものと思われる。深さはＰ１＝34cm、Ｐ２＝11cmを測る。

第７号住居跡（第44図）

Ｚ－５区に位置する。炉床のみが現存する。東側に第６号住居跡の炉跡が隣接する。

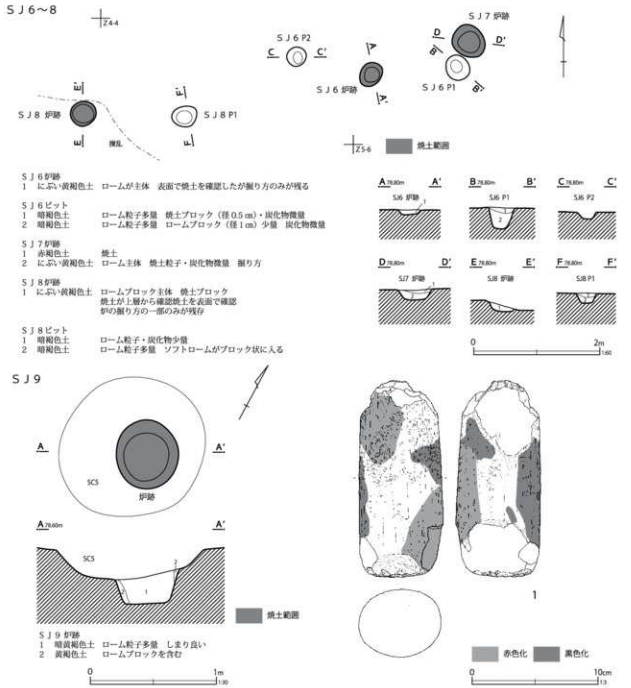
第８号住居跡（第44図）

Ｚ－４区に位置する。炉床のみが現存する。西側に第６号住居跡の炉跡が隣接する。１基の柱穴が伴うものと思われ、深さはＰ１＝16cmを測る。

１の磨製石斧を再利用したと思われる敲石が出土した。

第９号住居跡（第44図）

Ｘ－４区に位置する。炉床の一部のみが現存する。第５号住居跡の南壁に隣接して位置する。当初、第５号集石を調査していたところ、その下部から良く焼けた第９号住居跡の炉跡が検出された。炉跡は円形状の掘り込みが明瞭であり、設置されていた埋甕炉が抜かれたような状況を示していた。集石土壙の石が炉の覆土直上まで覆っていたため、炉跡を利用して集石土壙を構築したものと思われる。



第44図　第６～９号住居跡・出土遺物

第15表　第６号住居跡柱穴計測表（第44図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)	ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	41.0	34.0	Ｐ２	31.0	11.0

第16表　第８号住居跡柱穴計測表（第44図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)
Ｐ１	41.1	16.0

第17表　第８号住居跡出土石器観察表（第44図）

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
44 － 1	敲石	②ア	緑色岩	15.5	6.7	5.5	929.9	磨製石斧からの再利用

（2）集石土壙

向原A遺跡の第4次調査では、集石土壙が5基検出された。住居跡と重複するものが多く、廃棄後の窪地を利用したものが多いようである。

集石土壙の礫については、全点石材や重量のデータを採取している。石材はチャート系の礫が多く、次いで砂岩、頁岩等が小量含まれている。チャート系の礫の含まれる割合を示し、礫の形状で全礫、半割礫、その他に分けて、重量ごとにグラフ化し第47図に示した。

第1号集石土壙（第45、46図）

Z－5区に位置する。第1号住居跡の覆土内に構築されていた。平面形は楕円形で、長径0.65m、短径0.60m、深さ0.17mである。住居跡覆土内での構築であるため、土壙底面については不明瞭である。時期は出土土器から、勝坂式新段階である。

礫は総数80個で、総重量は25.1kgである。チャート率は90%である。重量200g以上の全礫、半割礫が多い。

遺物は第46図1、2の土器片と3の石器が出土した。1、2は口縁部文様帯を有するキャリパー形深鉢の勝坂式土器である。1は刻み隆帯で口縁部の区画を行い、区画内に集合沈線を施文する。2は胴部破片で刻みを施す区画隆帯から隆帯懸垂文を垂下する。勝坂式新段階の土器群である。3は石棒からの再利用と思われる敲石である。

第2号集石土壙（第45図）

Z－5区に位置する。第1号集石と同様に、第1号住居跡の覆土内に構築されていた。平面形は楕円形で、長径0.35m、短径0.31m、深さ0.11mである。住居跡覆土内での構築であるため、土壙底面については不明瞭である。

遺物が出土していないため、時期は不詳である。

礫は総数27個で、総重量は2.8kgである。チャート率は93%である。

第3号集石土壙（第45、46図）

Z－3区に位置する。第3号住居跡の覆土内に構築されていた。平面形は楕円形で、長径0.64m、短径0.62m、深さ0.08mである。時期は住居跡との関係から、加曽利EⅡ式期と思われる。

遺物は4、5の無文土器が出土している。加曽利E式深鉢形土器の頸部と思われる。

礫は総数25個で、総重量は5.0kgである。チャート率は73%である。重量200g以上の全礫、半割礫が多い。

第4号集石土壙（第45、46図）

W－4・5、X－4区に位置する。平面形は楕円形で、長径2.08m、短径1.77m、深さ0.22mである。時期は出土遺物から、加曽利EⅡ式期と思われる。

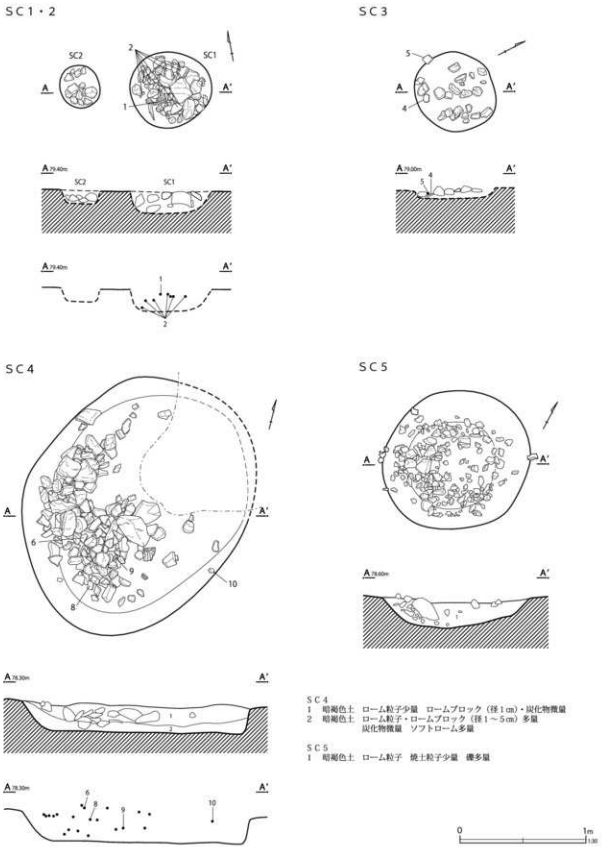
遺物は6～10の土器片と、11、12の打製石斧である。無文土器が出土している。6、7は加曽利EⅡ式キャリパー形深鉢の胴部破片である。8は磨消懸垂文を施文する加曽利EⅢ式土器である。11は撥形、12は側縁が窪み、基部を欠損する。9は無文土器の口縁部破片、10は曽利式系の弧線文土器である。他に、中世の陶磁器が多く出土している。中世段階に攪乱を受けたものと思われる。

礫は総数171個で、総重量は73.8kgである。チャート率は68%である。重量200g以上の全礫、半割礫が多い。

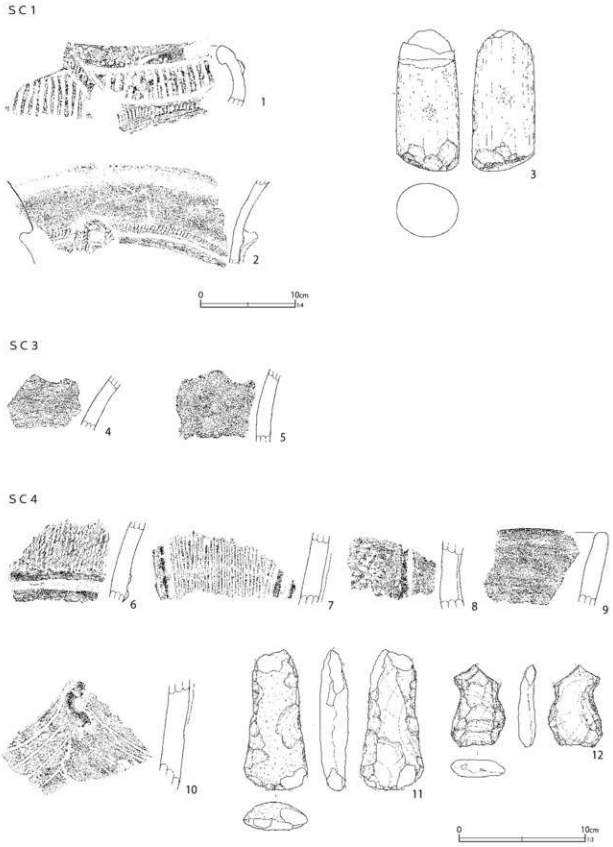
第5号集石土壙（第45図）

X－4区に位置する。第9号住居跡の炉直上に構築されている。平面形は楕円形で、長径1.17m、短径1.10m、深さ0.21mである。時期は不詳である。

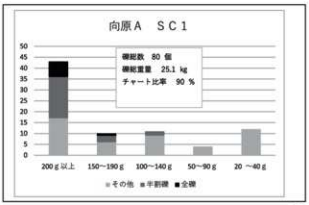
礫は総数275個で、総重量は26.9kgである。チャート率は83%である。重量200g以上の全礫、半割礫が目立つが、量が少ない。



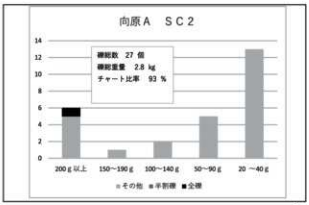
第45図　第1～5号集石土壙



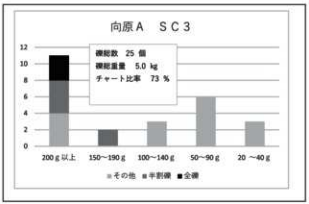
第46図　第1・3・4号集石土壙出土遺物



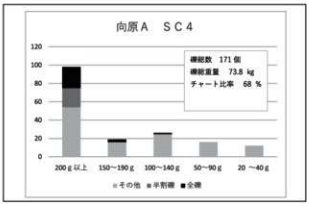
1



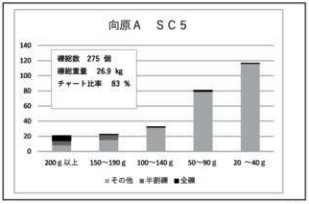
2



3



4



5

第47図　集石土壙礫分析図

第18表　集石土壙出土石器観察表（第46図）

番号	出土位置	器　種	分　類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
46-3	SC1	敲石	②ア	砂岩	[11.1]	5.0	12.0	381.9	石棒かちの再利用
11	SC4	打製石斧	Ⅲ2②ア	安山岩	11.1	5.1	2.2	156.2	
12	SC4	打製石斧	Ⅲ1②イ	頁岩	[6.5]	4.3	1.4	43.0	

第19表　縄文時代の住居跡一覧表

遺構名	グリッド	主軸方向	平面形	長径(m)	短径(m)	壁高(m)	柱穴	炉跡	埋甕	周溝	時期
SJ 1	Z-5	N-32° -W	隅丸方	4.20	[1.70]	0.29	2	—	無		勝坂式新段階
SJ 2	AA-4	N-35° -W	隅丸長方	4.40	[1.10]	0.24	2	—	無		加曽利E Ⅱ
SJ 3	Z-3	N-16° -W	六角	5.80	[4.50]	0.52	14	埋甕炉・石囲炉	無	○	加曽利E Ⅰ～E Ⅱ
SJ 4	Y-3・4	N-18° -W	円	6.80	6.70	0.23	17	埋甕炉	有		加曽利E Ⅰ
SJ 5	W・X-4	N- 8° -W	円	(7.00)	(6.90)	—	8	埋甕炉	有		加曽利E Ⅲ
SJ 6	Z-4・5	—	—	—	—	—	2	地床炉	無		—
SJ 7	Z-5	—	—	—	—	—	無	地床炉	無		—
SJ 8	Z-4	—	—	—	—	—	1	地床炉	無		—
SJ 9	X-4	—	—	—	—	—	無	地床炉	無		—

第20表　縄文時代の集石土壙一覧表（第45図）

遺構名	グリッド	平面形	長軸方位	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	礫総重量(Kg)	時期	重複遺構
SC 1	Z-5	楕円	N-80° -W	0.65	0.60	(0.17)	24.7	勝坂式新段階	SJ1
SC 2	Z-5	楕円	N-13° -W	0.35	0.31	(0.11)	2.7	不明	SJ1
SC 3	Z-3	楕円	N-87° -E	0.64	0.62	(0.08)	5.0	加曽利E Ⅱ式	SJ3
SC 4	W-4・5、X-4	楕円	N- 3° -W	2.08	1.77	0.22	73.6	加曽利E Ⅱ式	
SC 5	X-4	楕円	N- 3° -E	1.17	1.10	0.21	26.9	不明	SJ9炉跡

（3）グリッド出土遺物

向原A遺跡のグリッドから出土した縄文時代の遺物は、中期の土器群と石器群である。

縄文土器（第48図1～32）

グリッドから出土した縄文時代の土器群は、中期中葉の勝坂式土器と後半の加曽利E式土器、それに並行する他系統の土器群である。

1～4は勝坂式古段階の連続押引文系の土器群である。1は隆帯脇にキャタピラ文を施文し、1列の角押文を沿わせる。2、3は半截竹管状工具による平行押引文で2列の刺突文列を施文する。4は隆帯脇にやや幅広の角状押引文を沿わせている。1、4は新道式、3は雲母を含む阿玉台Ⅱ式に比定されよう。

5、6は勝坂式中段階の藤内式に比定される土器群で、5はパネル状区画文の縁に細かな刻みを施す。6は地文縄文上に小波状沈線を施すものである。

7～10は勝坂式新段階の土器群で、隆帯上に刻みや、区画内に沈線文を施文するなど、井戸尻式段階の土器群である。8は口縁部に渦巻く隆帯上に、細かな押引状の連続爪形文を施すもので、北陸系の要素と思われる。

11～22は加曽利E式系の土器群で、11は隆帯が横「S」字状の渦を巻く加曽利E Ⅰ式土器である。13は頸部に無文帯を有するが、12、14の口縁部文様帯のみの土器群と同様に、加曽利E Ⅱ式段階の土器群と思われる。

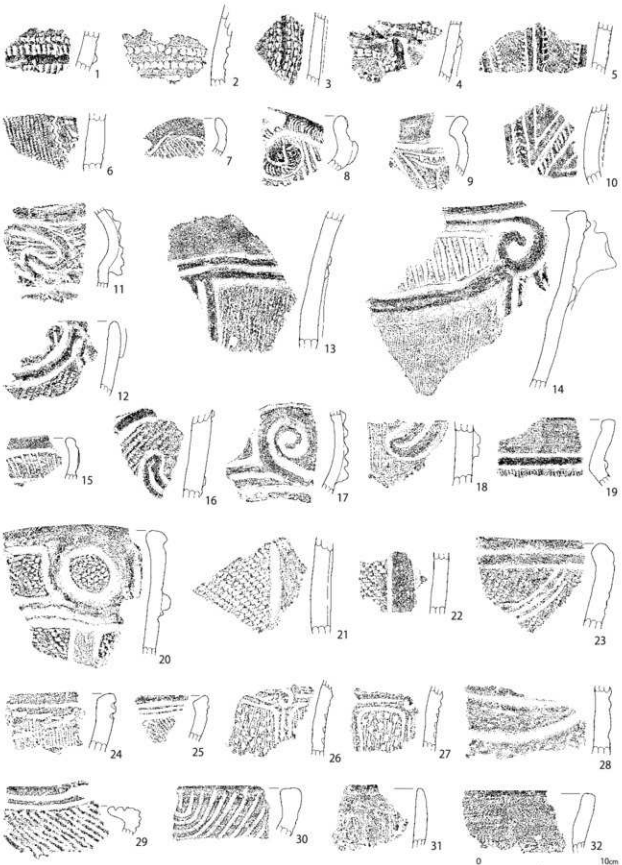
2、14、15は口縁部文様帯の区画文内に沈線文を施文するもので、曽利式系の要素が窺える。16は地文に0段多条RL縄文を施文するもので、加曽利E Ⅰ式に0段多条縄文が残る好例であろう。12の地文も0段多条縄文と思われ、加曽利E Ⅱ式段階まで残る可能性がある。

17は口縁部の渦巻文、18は胴部の渦巻文であるが、18は閉塞する2本隆帯で渦巻文を描くもので、16の渦巻文と類似する。

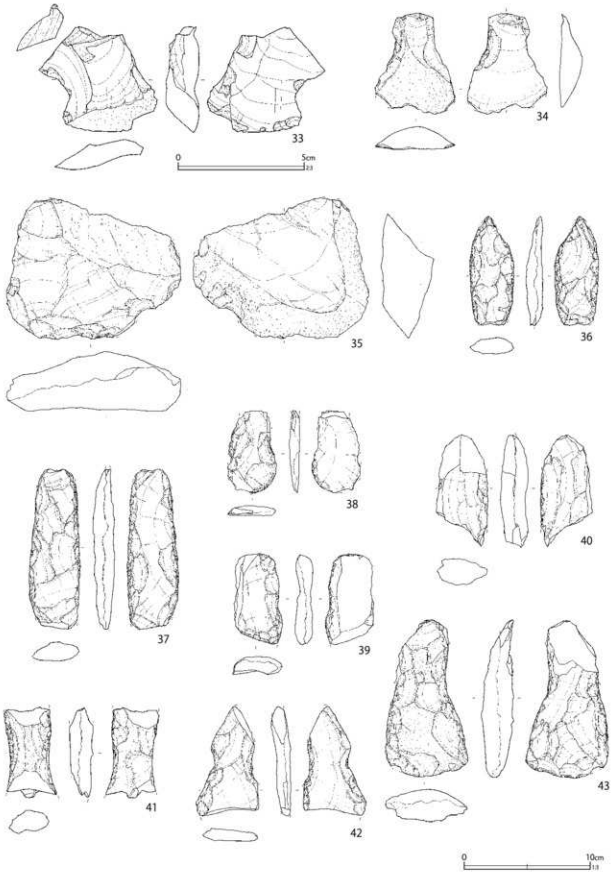
18、19の地文は条線文である。大半が加曽利E Ⅱ式段階に比定されよう。

20～22は胴部に磨消懸垂文を施文する加曽利E Ⅲ式土器である。20の口縁部文様帯には、円形の区画文を施している。

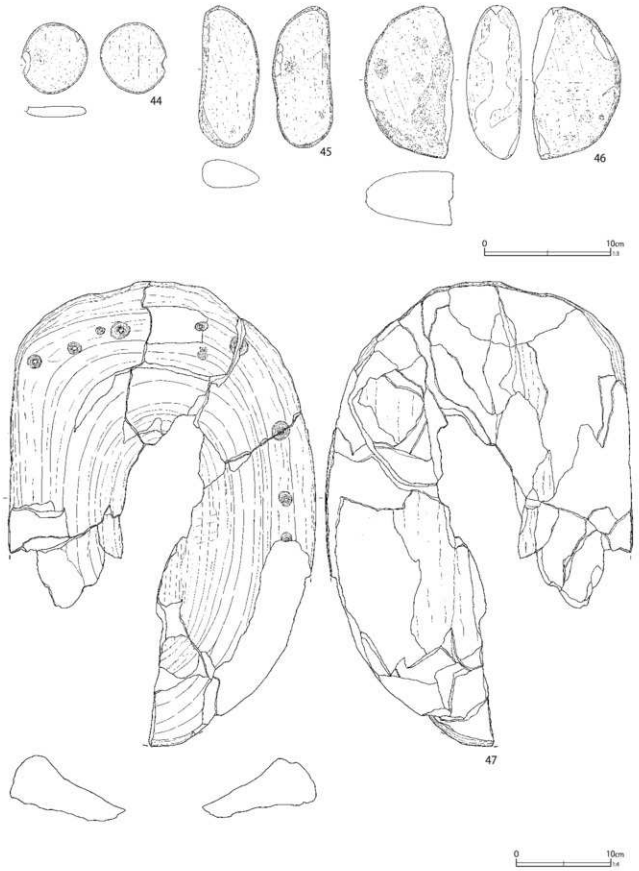
23～25、28は連弧文土器で、23は3本沈線の



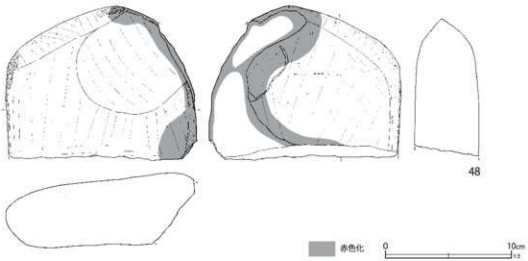
第48図　グリッド出土遺物（1）



第49図　グリッド出土遺物（2）



第50図　グリッド出土遺物（3）



第51図　グリッド出土遺物（4）

第21表　グリッド出土石器観察表（第49～51図）

番号	出土位置	器　種	分　類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
49~33	SK1	スクレイパー	Ⅱ1①	チャート	4.2	4.7	1.3	19.3	
34	SK1	スクレイパー	Ⅰ2①イ	ホルンフェルス	8.0	6.3	1.8	69.0	
35	SK7	礫器	①ア	ホルンフェルス	11.1	13.9	4.7	668.7	
36	グリッド	尖頭器	①イ	頁岩	8.6	3.5	1.3	49.4	
37	グリッド	打製石斧	Ⅱ2②イ	頁岩	[12.6]	4.1	1.7	120.5	
38	SK7	打製石斧	Ⅲ2②イ	頁岩	[6.5]	3.9	0.8	23.6	
39	SK1	打製石斧	Ⅲ2②イ	結晶片岩	[7.1]	[3.9]	1.4	41.5	
40	グリッド	打製石斧	Ⅴ②イ	緑泥片岩	[8.8]	[4.1]	2.2	88.3	
41	SK1	打製石斧	Ⅲ2②イ	ホルンフェルス	[7.1]	[4.2]	[1.9]	53.8	
42	グリッド	打製石斧	Ⅲ1②イ	ホルンフェルス	[8.7]	[5.0]	1.6	53.6	
43	SK1	打製石斧	Ⅲ1②イ	ホルンフェルス	[12.5]	6.5	2.6	193.1	
50~44	SK1	磨石	Ⅰ1①イ	安山岩	5.6	5.2	1.0	38.1	
45	グリッド	磨石	Ⅱ1~3①イ	砂岩	11.2	4.8	2.4	180.2	
46	グリッド	磨石	Ⅳ1~3①ア	砂岩	12.2	7.1	4.3	483.9	
47	SK7	石皿	Ⅱ2②イ	緑泥片岩	[49.2]	32.7	[7.4]	9000.0	
51~48	SK2	石皿	Ⅳ②ア	砂岩	[12.2]	[15.2]	6.5	1559.9	表裏面一部赤色化

弧線文を施文する。24、25は胴部が括れる器形の連弧文土器で、26、27も同様に胴部で括れ、「十」字状の区画を施文する連弧文土器と曽利式土器の中間的な土器である。地文条線文上にランダムな刺突文を施している。

29、30は曽利式系の重弧文土器である。29は口縁部が強く内湾する。

31は地文条線文のみの深鉢、32は口縁部が無文となる深鉢であろう。

石器（第49図33～第51図48）

33は剥片の抉り部分に剥離を施したノッチドスクレイパー、34は礫表の残る剥片を利用したスクレイパーである。35は帯状の礫表を残す礫器である。

36～43は打製石斧で、37、41は短冊形、38、39、42、43は撥形石斧である。42は基部と刃部を欠損するが、両側縁に抉り込み状の調整剥離が施される。36は尖頭状の石斧である。サイドスクレイパーの可能性もある。

44～46は磨石、47、48は石皿である。47は緑泥片岩製である。皿部の中央は欠損していたが、故意に打ち割られた可能性がある。

2　中・近世の遺構と遺物

向原A遺跡の中・近世の遺構としては、地下式坑、土壙、ピット等が検出されている。向原A遺跡から芦苅場遺跡にかけて、調査区南側の台地上は厚く関東ローム層が堆積しており、飯能市域でも検出例の少ない中世の地下式坑等が構築されていた。特に、向原A遺跡から芦苅場遺跡Ⅱ区西側の市道寄りの地区に、中・近世の遺構が集中していた。

（1）地下式坑

第１号土壙（第52図）

Y・Z－３・４区に位置する。平面形は楕円形を呈し、北東側の階段状の入り口部と、円形に近い隅丸方形状の地下坑で構成されている。長径4.40m、短径3.60mを測り、深さ0.56mまでを調査した。断面の調査から、地下坑は南側方向に袋状の広がりを見せるものと判断される。

遺物は流れ込みの縄文時代の土器片や石器が出土した。

第７号土壙（第52図、第54図１～第55図５）

X－４区に位置する。第５号住居跡と重複する。南側の階段状の入り口部と、隅丸方形状の地下坑で構成される。検出時では入り口部が長方形の土壙状を呈し、地下坑の天井部分は現存していた。長径3.88m、短径1.70m、深さ1.22mを測る。地下坑の側面部は、底面部より張り出して掘られており、断面形は袋状を呈していた。

遺物は第53図１～第54図５が出土している。流れ込みの縄文土器や石器は、グリッド出土遺物として取り扱った。

第54図１は大振りのかわらけである。胎土が軟質で摩耗が進み、調整痕等は観察できない。２～４は板碑である。２に建武４年（1337）の銘がある。３も銘があるが上部が欠失する。第55図４は小型の板碑で彫刻が認められないが、打ち割りにより外形成形される。５は粉挽臼である。図示した以外に瓦質土器破片１点（釜か）が出土している。

第８号土壙（第53図、第55図６～８）

Y－３区に位置する。平面形は長方形に把手の付いた「T」字形を呈し、長方形の地下坑の長径側縁に階段状の入り口部が付いた形状である。検出当初は楕円形の土壙状であったが、最終形態は天井が現存し、床面から壁が直立する形状となっている。長径2.00m、短径1.89m、深さ1.11mを測る。

出土遺物は、第55図６～８である。６～８は軟質の瓦質土器内耳鍋で、同一個体とみられる。外面下位にヘラミガキを伴う。

（2）土壙

第２号土壙（第56図）

Z－５区に位置する。平面形は長楕円状の不整形を呈し、長径2.74m、短径1.22m、深さ0.46mである。遺物は出土していない。

第３号土壙（第56図）

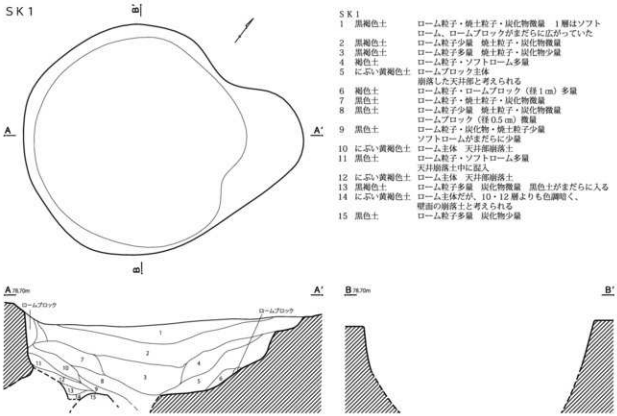
X－２区に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径1.04m、短径0.95m、深さ1.42mのである。断面が円筒状の土壙で、遺物は出土していない。

第４号土壙（第56図）

Z－５区に位置する。平面形は長楕円状の不整形を呈し、長径1.87m、短径0.99m、深さ0.35mである。遺物は出土していない。

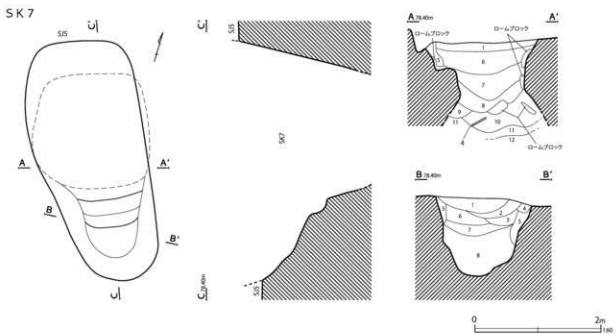
第５号土壙（第56図）

Y－４区に位置する。平面形は楕円形で、長径1.11m、短径1.05m、深さ0.32mである。遺物は出土していない。



SK1

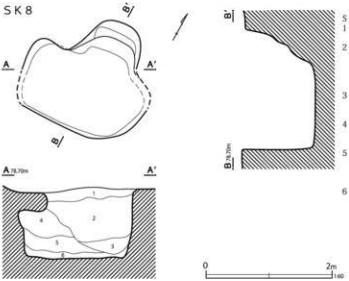
1	黒褐色土	ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量　1層はソフトローム、ロームブロックがまだらに広がっていた
2	黒褐色土	ローム粒子少量　焼土粒子・炭化物微量
3	黒褐色土	ローム粒子多量　焼土粒子・炭化物少量
4	褐色土	ローム粒子・ソフトローム多量
5	にぶい黄褐色土	ロームブロック主体 崩落した天井部と考えられる
6	褐色土	ローム粒子・ロームブロック（径1cm）多量
7	黒色土	ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量
8	黒色土	ローム粒子少量　焼土粒子・炭化物微量 ロームブロック（径0.5cm）微量
9	黒色土	ローム粒子・炭化物・焼土粒子少量 ソフトロームがまだらに少量
10	にぶい黄褐色土	ローム主体　天井部崩落土
11	黒色土	ローム粒子・ソフトローム多量 天井崩落土中に混入
12	にぶい黄褐色土	ローム主体　天井部崩落土
13	黒褐色土	ローム粒子多量　炭化物微量　黒色土がまだらに入る
14	にぶい黄褐色土	ローム主体だが、10・12層よりも色調暗く、 壁面の崩落土と考えられる
15	黒色土	ローム粒子多量　炭化物少量



SK7

1	黒褐色土	ローム粒子少量　暗褐色土がブロック状に微量
2	黒褐色土	ローム粒子多量　ロームブロック（径1～2cm）少量
3	褐色土	ローム粒子・ロームブロック（径1cm）・ソフトローム多量
4	褐色土	ローム粒子多量　ロームブロック（径1～5cm）密に多量 ソフトローム多量
5	にぶい黄褐色土	ローム主体
6	黒褐色土	ローム粒子多量　ロームブロック（径1～5cm）少量
7	黒褐色土	ローム粒子多量　ソフトロームがブロック状にわずかに入る
8	褐色土	ローム粒子・ソフトローム・ロームブロック（径1cm）多量 短期に埋め戻しうけたと考えられる
9	暗褐色土	ローム粒子多量　ロームブロック（径1cm）少量
10	褐色土	ソフトロームが多量に混入する層で、大型のロームブロックが混入しており、天井の崩落土または壁面の崩落土と考えられる
11	黒褐色土	ローム粒子多量　ソフトロームがわずかに混じる
12	にぶい黄褐色土	ローム主体　天井崩落土と考えられる

第52図　地下式坑（1）



第53図　地下式坑（2）

第６号土壙（第56図）

Ｙ－３区に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長径1.86m、短径0.60m、深さ0.50mである。遺物は出土していない。

第９号土壙（第56図）

Ｙ－２区に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長径1.63m、短径1.00m、深さ0.09mである。遺物は出土していない。

（３）ピット（第15図、第57、58図）

帰属時期不明のピットはとしてグリットごとに番号を付けて把握した。ピットの分布状況を第15図に示し、個別の遺構図を第56図、出土遺物を第57図に示した。また、ピットの規模等は一覧にして第25表で示した。ピットには建物の柱穴状のものも含まれており、地下式坑とともに中世の建物跡等が存在していた可能性は高い。

Ｘ２－Ｐ１からは第58図１が出土した。１は舶載磁器で、明の染付（青花）である。やや胎質が悪く厚手のものである。

Ｙ２－Ｐ１はピット内には、礎石もしくは根がらみの石と考えられる扁平な礫が４段に積まれていた。また、覆土から第58図２が出土した。２は瀬戸美濃系陶器の天目茶碗である。光沢のある茶色味の強い釉薬が掛けられる。体部は丸みが強い。17世紀中頃に比定される。

（４）グリッド出土遺物（第59図１～第61図23）

向原Ａ遺跡の調査区内から出土した、遺構に帰属しない中・近世の遺物をまとめる。

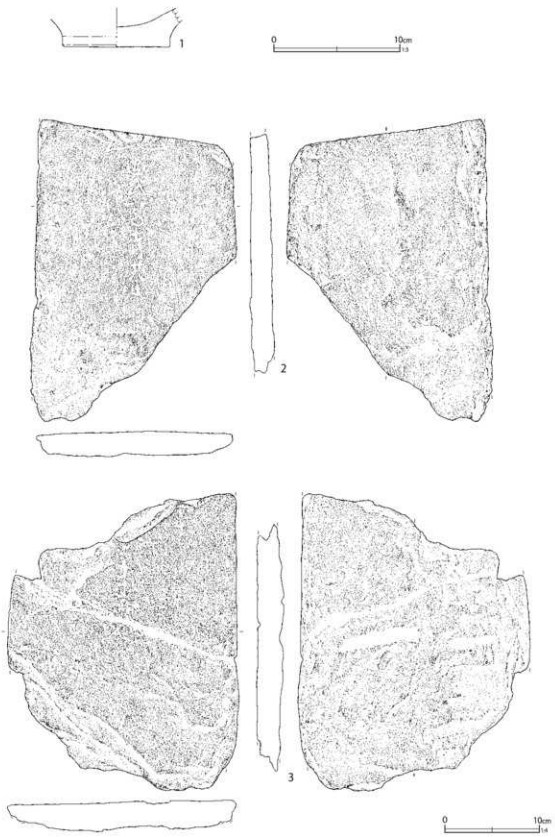
第59図１～６は縄文時代の第４号集石土壙からの出土であり、第４号集石土壙を中世の段階で撹乱した時に混在した遺物と思われ、まとまりのある一群と把握される。

１は瓦質土器の焙烙で内耳部分は剥離する。17世紀以降のものである。２は瓦質土器の鉢である。軟質で摩耗しているが、底部には糸切痕が認められる。胎土には長石・石英の角礫が含まれる。３～６は常滑焼の甕で全て胴部の破片である。

７～12までは瓦質土器の鉢である。７、９、10は口縁部が丸く、僅かに内側に膨らむ。７は外面にノッキング状に横位のヘラナデ痕が認められる。８、11は口縁部が上方にやや尖るものである。いずれも胎土は軟質であり、大粒の長石・石英粒子を含む点が特徴的である。12は底部の破片である。内面は摩耗しているが、外面は丁寧にナデ調整され、少し光沢がある。ナデに先行する指頭圧痕が僅かに確認できる。

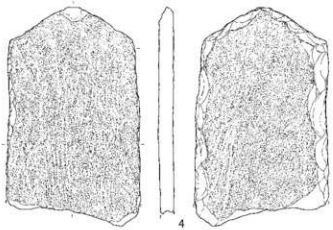
13、14は瓦質土器の内耳鍋である。13は内耳

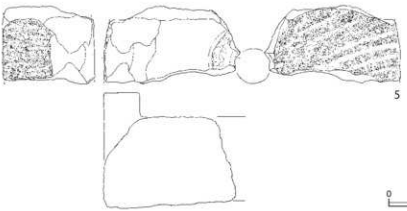
SK7



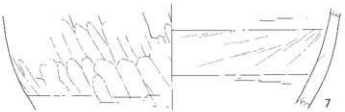
第54図　地下式坑出土遺物（1）

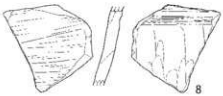
SK7



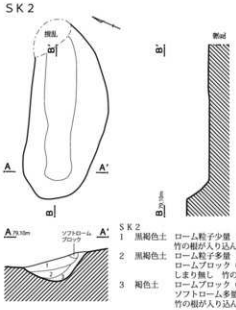


SK8

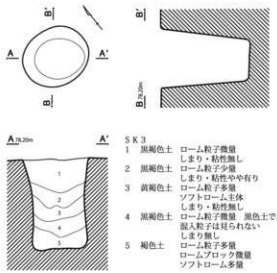




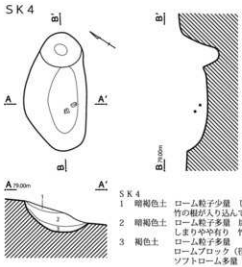
第55図　地下式坑出土遺物（2）



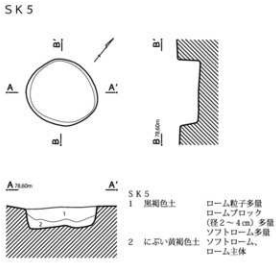
SK2
1　黒褐色土　ローム粒子少量　しまり無し
　竹の根が入り込んでいた
2　黒褐色土　ローム粒子多量
　ロームブロック（径1cm）微量
　しまり無し　竹の根が入り込んでいた
3　褐色土　ロームブロック（径1～2cm）少量
　ソフトローム多量　しまり無し
　竹の根が入り込んでいた



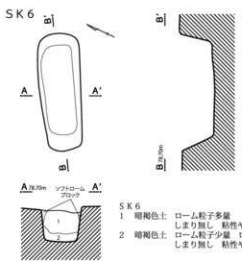
SK3
1　黒褐色土　ローム粒子微量
　しまり・粘性無し
2　黒褐色土　ローム粒子少量
　しまり・粘性やや有り
3　黄褐色土　ローム粒子多量
　ソフトローム主体
　しまり・粘性無し
4　黒褐色土　ローム粒子微量　黒色土で、
　混入粒子は見られない
　しまり無し
5　褐色土　ローム粒子多量
　ロームブロック微量
　ソフトローム多量



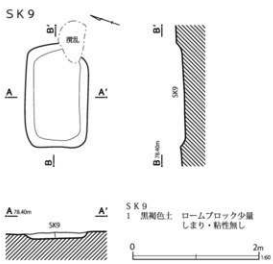
SK4
1　暗褐色土　ローム粒子少量　しまりやや有り
　竹の根が入り込んでいる　2層より色調暗い
2　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量
　しまりやや有り　竹の根が入り込んでいる
3　褐色土　ローム粒子多量
　ロームブロック（径1cm）・炭化物少量
　ソフトローム多量



SK5
1　黒褐色土　ローム粒子多量
　ロームブロック
　（径2～4cm）多量
　ソフトローム多量
2　にぶい黄褐色土　ソフトローム、
　ローム主体



SK6
1　暗褐色土　ローム粒子多量
　しまり無し　粘性やや有り
2　暗褐色土　ローム粒子少量　ロームブロック微量
　しまり無し　粘性やや有り

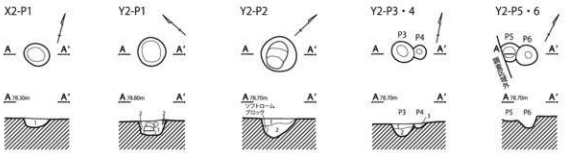


SK9
1　黒褐色土　ロームブロック少量
　しまり・粘性無し

第56図　土壙

第22表　中・近世の土壙一覧表（第52・53・56図）

遺構名	グリッド	時期	平面形	長軸方位	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	重複遺構
SK 1	Y-Z-3・4	中・近	楕円	N-53° -E	4.40	3.60	[0.56]	地下式坑
SK 7	X-4	中・近	長楕円	N-30° -W	3.88	1.70	[1.22]	地下式坑　SJ5
SK 8	Y-3	中・近	不整	N-89° -E	2.00	1.89	1.11	地下式坑
SK 2	Z-5	中・近	不整	N-72° -E	2.74	1.22	0.46	
SK 3	X-2	中・近	楕円	N-52° -W	1.04	0.95	1.42	
SK 4	Z-5	中・近	不整	N-55° -E	1.87	0.99	0.35	
SK 5	Y-4	中・近	楕円	N-52° -E	1.11	1.05	0.32	SJ4
SK 6	Y-3	中・近	隅丸長方	N-60° -E	1.86	0.64	0.50	
SK 9	Y-2	中・近	隅丸長方	N-71° -E	1.63	1.00	0.09	



X2　ピット1
1　暗褐色土　ローム粒子少量　ロームブロック多量（径2～4cm）　しまり・粘性やや有り

Y2　ピット1
1　黒褐色土　ローム粒子微量　炭化物少量　黒味強い
2　黒褐色土　ローム粒子少量　ロームブロック（径1cm）多量

Y2　ピット2
1　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロック（径1cm）少量　しまり無し　粘性やや有り
2　暗褐色土　ローム粒子微量　しまり・粘性無し

Y2　ピット3・4
1　暗褐色土　ローム粒子少量　ロームブロック（径1cm）しまり無し
2　褐色土　ローム粒子多量　しまり無し　粘性有り
3　暗褐色土　ローム粒子少量　しまり有り

Y3　ピット1
1　黒褐色土　ローム粒子少量
2　黒褐色土　ローム粒子多量　ソフトローム（径1cm）少量
3　褐色土　ソフトローム多量

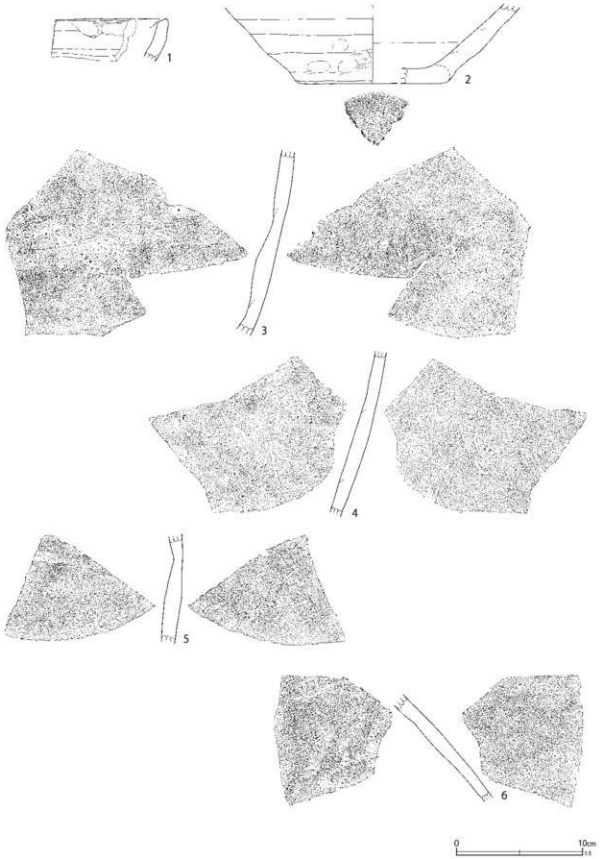
第57図　ピット

第23表　中・近世のピット一覧表（第57図）

グリッド	No.	長径(m)	深さ(m)	備考
X-2	P1	0.40	0.14	磁器皿出土
Y-2	P1	0.45	0.11	天目茶碗出土
	P2	0.56	0.30	
	P3	0.35	0.20	
	P4	0.22	0.07	

グリッド	No.	長径(m)	深さ(m)	備考
Y-2	P5	0.30	0.07	
	P6	0.34	0.18	
Y-3	P1	0.31	0.23	
Z-5	P1	0.80	0.60	

第58図　ピット出土遺物



第59図　中・近世グリッド出土遺物（1）